

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 2 節 承認基準等</p> <p>第 1 危険物仮貯蔵・仮取扱い承認申請に関する承認基準 (法第 10 条第 1 項ただし書)</p> <p>(省略)</p> <p>第 2 危険物製造所等の仮使用承認申請に関する承認基準 (法第 11 条第 5 項ただし書)</p> <p>(省略)</p> <p>第 3 予防規程制定・変更認可申請に関する認可基準 (法第 14 条の 2 第 1 項)</p> <p>1 認可基準</p> <p>(1) 予防規程の認可は、記載内容を審査し、法第 10 条第 3 項の技術上の基準に適合しているか否かをその判定の基準とすること。</p> <p>(2) 危険物規則第 60 条の 2 第 1 号、第 3 号から第 8 号、第 11 号及び第 12 号については「予防規程作成上の留意事項について」(平成 13 年 8 月 23 日消防危第 98 号)を参考に審査すること。また、予防規程以外に保安マニュアル等が作成されており、予防規程の内容がわかりやすく記述されている場合は、予防規程の中にこれらのマニュアルの該当部分を引用することも可能である。</p> <p>なお、これらの方法により予防規程を作成した場合に、個人名が含まれることが考えられるが、この場合、個人名に変更があっても予防規程の変更の認可は要しないものである。</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 2 節 承認基準等</p> <p>第 1 危険物仮貯蔵・仮取扱い承認申請に関する承認基準 (法第 10 条第 1 項ただし書)</p> <p>(省略)</p> <p>第 2 危険物製造所等の仮使用承認申請に関する承認基準 (法第 11 条第 5 項ただし書)</p> <p>(省略)</p> <p>第 3 予防規程制定・変更認可申請に関する認可基準 (法第 14 条の 2 第 1 項)</p> <p>1 認可基準</p> <p>(1) 予防規程の認可は、記載内容を審査し、法第 10 条第 3 項の技術上の基準に適合しているか否かをその判定の基準とすること。</p> <p>(2) 危険物規則第 60 条の 2 第 1 号、第 3 号から第 8 号、第 11 号及び第 12 号については「予防規程作成上の留意事項について」(平成 13 年 8 月 23 日消防危第 98 号)を参考に審査すること。また、予防規程以外に保安マニュアル等が作成されており、予防規程の内容がわかりやすく記述されている場合は、予防規程の中にこれらのマニュアルの該当部分を引用することも可能である。</p> <p>なお、これらの方法により予防規程を作成した場合に、個人名が含まれることが考えられるが、この場合、個人名に変更があっても予防規程の変更の認可は要しないものである。</p>	

<p>(3) 危険物規則第60条の2に定める事項の内容について確認するほか、次の中で該当する通知を参照し審査すること。</p> <p>ア 共通事項</p> <p>(ア) 「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の技術上の基準等について」(平成11年6月2日消防危第53号)</p> <p>(イ) 「地下貯蔵タンク等及び移動貯蔵タンクの漏れの点検に係る運用上の指針について(平成16年3月18日消防危第33号(平成22年7月8日消防危第144号改正))(第3章第21)</p> <p>(ウ) 「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成17年10月26日消防危第245号(平成30年3月30日消防危第44号改正))</p> <p>(エ) 「危険物から水素を製造するための改質装置の遠隔監視に必要な安全対策について」(平成24年5月23日消防危第140号(平成24年12月18日消防危第263号改正))</p> <p>(オ) 「危険物施設の地震・津波対策に係る予防規程の策定について」(平成24年9月14日消指第209号)</p> <p>(カ) 「震災時等における危険物の仮貯蔵・仮取扱い等の安全対策及び手続きについて」(平成25年10月3日消防災第364号、消防危第171号)(第3章第44)</p> <p>(キ) 「「危険物施設の震災等対策ガイドライン」を活用した危険物施設の震災等対策の推進について」(平成26年5月23日消防危第136号)</p> <p>(ク) 「プラントにおけるドローンの安全な運用方法に関するガイドライン等の送付について」(平成31年3月29日消防危第51号、消防特第49号)</p> <p>(ケ) 「危険物施設における可燃性蒸気の滞留するおそれのある場所に関する運用について」(平成31年4月24日消防危第84号(令和2年1月23日消防危第21号改正))</p> <p>(コ) 「危険物施設の風水害対策ガイドラインについて」(令和2年3月27日消防災第55号、消防危第86号)</p> <p>(サ) 「ドライコンテナによる危険物の貯蔵について」(令和4年12月13日消防危第283号)(第3章第48)</p>	<p>(3) 危険物規則第60条の2に定める事項の内容について確認するほか、次の中で該当する通知を参照し審査すること。</p> <p>ア 共通事項</p> <p>(ア) 「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の技術上の基準等について」(平成11年6月2日消防危第53号)</p> <p>(イ) 「地下貯蔵タンク等及び移動貯蔵タンクの漏れの点検に係る運用上の指針について(平成16年3月18日消防危第33号(平成22年7月8日消防危第144号改正))(第3章第21)</p> <p>(ウ) 「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成17年10月26日消防危第245号(平成30年3月30日消防危第44号改正))</p> <p>(エ) 「危険物から水素を製造するための改質装置の遠隔監視に必要な安全対策について」(平成24年5月23日消防危第140号(平成24年12月18日消防危第263号改正))</p> <p>(オ) 「危険物施設の地震・津波対策に係る予防規程の策定について」(平成24年9月14日消指第209号)</p> <p>(カ) 「震災時等における危険物の仮貯蔵・仮取扱い等の安全対策及び手続きについて」(平成25年10月3日消防災第364号、消防危第171号)(第3章第44)</p> <p>(キ) 「「危険物施設の震災等対策ガイドライン」を活用した危険物施設の震災等対策の推進について」(平成26年5月23日消防危第136号)</p> <p>(ク) 「プラントにおけるドローンの安全な運用方法に関するガイドライン等の送付について」(平成31年3月29日消防危第51号、消防特第49号)</p> <p>(ケ) 「危険物施設における可燃性蒸気の滞留するおそれのある場所に関する運用について」(平成31年4月24日消防危第84号(令和2年1月23日消防危第21号改正))</p> <p>(コ) 「危険物施設の風水害対策ガイドラインについて」(令和2年3月27日消防災第55号、消防危第86号)</p> <p>(サ) 「ドライコンテナによる危険物の貯蔵について」(令和4年12月13日消防危第283号)(第3章第48)</p> <p><u>イ 屋内貯蔵所に関する事項</u> <u>「屋内貯蔵所において電気機械器具等を使用する場合の運用</u></p>	<p>所要の整備</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 4 節 製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の</u>基準</p> <p>1 から 3 省略</p> <p>4 建築物等の構造（危険物令第 9 条第 1 項第 5 号から第 9 号まで） (1) 危険物令第 9 条第 1 項第 5 号に規定する「延焼のおそれのある外壁」については、次のとおりとする。（平成元年 7 月 4 日消防危第 64 号） ア 「延焼のおそれのある外壁」とは、隣地境界線、道路中心線又は同一敷地内の 2 以上の建築物相互間の中心線から、1 階については 3 メートル以内、2 階以上については 5 メートル以内にある建築物の外壁をいう。ただし、防火上有効な公園、広場、河川等の空地若しくは水面その他これらに類するものに面する建築物の外壁を除く。 イ 「延焼のおそれのある外壁」に<u>配管又は換気設備等</u>を設ける場合は、次によること。 (ア) 危険物を移送するための配管を外壁に貫通させる場合は、当該外壁と<u>配管</u>とのすき間をモルタルその他の不燃材料で埋め戻すこと。 (イ) <u>換気設備等</u>を設ける場合は、外壁貫通部分等に防火上有効に温度ヒューズ付の防火ダンパー等（以下「防火ダンパー等」という。）を設けること。 (2) から (7) （省略）</p> <p>5 床等、排水溝、貯留設備（ためます及び油分離装置等）（危険物令第 9 条第 1 項第 9 号、第 12 号） (1) から (4) （省略） <u>(5) 危険物令第 9 条第 1 項第 12 号に規定する「高さ 0.15 メートル以上の囲い」については、作業工程上やむをえないものに限</u></p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 4 節 製造所の基準</p> <p>1 から 3 省略</p> <p>4 建築物等の構造（危険物令第 9 条第 1 項第 5 号から第 9 号まで） (1) 危険物令第 9 条第 1 項第 5 号に規定する「延焼のおそれのある外壁」については、次のとおりとする。（平成元年 7 月 4 日消防危第 64 号） ア 「延焼のおそれのある外壁」とは、隣地境界線、道路中心線又は同一敷地内の 2 以上の建築物相互間の中心線から、1 階については 3 メートル以内、2 階以上については 5 メートル以内にある建築物の外壁をいう。ただし、防火上有効な公園、広場、河川等の空地若しくは水面その他これらに類するものに面する建築物の外壁を除く。 イ 「延焼のおそれのある外壁」に<u>配管、換気設備又は排出設備</u>を設ける場合は、次によること。 (ア) 危険物を移送するための配管、<u>換気設備又は排出設備</u>を外壁に貫通させる場合は、当該外壁とのすき間をモルタルその他の不燃材料で埋め戻すこと。 (イ) <u>換気設備又は排出設備</u>を設ける場合は、外壁貫通部分等に防火上有効に温度ヒューズ付の防火ダンパー等（以下「防火ダンパー等」という。）を設けること。 (2) から (7) （省略）</p> <p>5 床等、排水溝、貯留設備（ためます及び油分離装置等）（危険物令第 9 条第 1 項第 9 号、第 12 号） (1) から (4) （省略） <u>(5) 危険物令第 9 条第 1 項第 12 号に規定する「高さ 0.15 メートル以上の囲い」については、危険物の取扱方法及び数量を考慮</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>換気設備等の整理に伴う所要の整備</p> <p>消防庁通知の反映</p>

り、排水溝及び油分離装置を設けることによってこれに替えても差し支えない。

6 (省略)

7 換気設備等 (危険物令第9条第1項第10号、第11号)

(1) 延焼のおそれのある部分以外の部分であっても、壁、床又は天井を耐火構造としなければならない部分に換気設備等を設ける場合は、当該貫通部分等に防火上有効に防火ダンパー等を設けるよう指導する。

(2) 給気口については、次のとおりとする。

ア 給気口は、床面積150平方メートルごとに1箇所の割合で設けるよう指導するものとし、その有効面積は次表を基準とする。

表2-4-1 給気口の有効面積

床面積	給気口の面積
30㎡未満	75c㎡
30㎡以上 60㎡未満	150c㎡
60㎡以上 90㎡未満	300c㎡
90㎡以上 120㎡未満	450c㎡
120㎡以上 150㎡まで	600c㎡

イ 給気口には引火防止網等を設けるよう指導する。

ウ 給気口は、換気のための有効な位置に設けるよう指導する。

なお、(4)の強制換気設備を設置する場合は、給気口を高所に設定する。

(3) 自然換気設備 (危険物令第9条第1項第10号に規定する「換気設備」をいう。以下同じ。)については、次のとおりとする。

ア 換気口は、給気口に応じて換気が有効に行われるように設けるものとし、屋根上又は地上2メートル以上の高さとする。

した溝等、又は囲い等によることができる。溝等の場合は、その上部を車両等が通過する場合、車両等の重量によって変形しない構造とすること。(令和6年5月31日消防危第170号)

6 (省略)

7 換気設備、排出設備 (危険物令第9条第1項第10号、第11号)

換気設備等の整理に伴う記載位置の変更など所要の整備

(1) 換気設備 (危険物令第9条第1項第10号に規定する「換気設備」をいう。以下同じ。)については、次のとおりとする。

イ 換気設備は、回転式又は固定式のベンチレーター、越屋根、ルーフファン等とする。

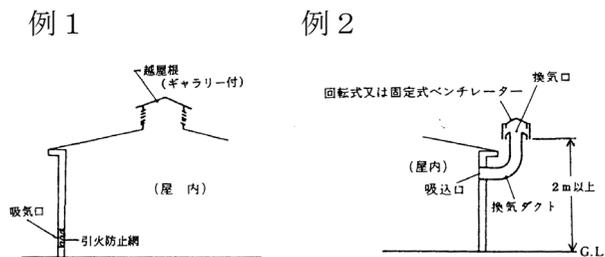
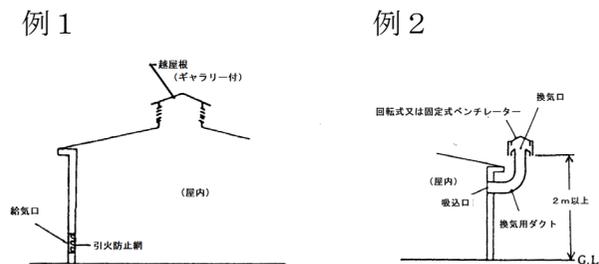


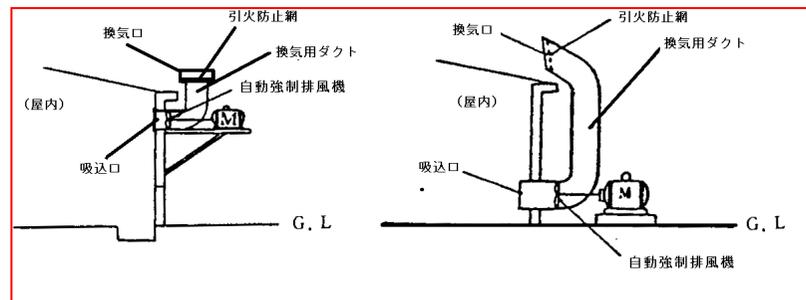
図 2 - 4 - 8 換気設備の例

ア 換気設備は、自然換気設備（給気口と排気口により構成されるもの）、強制換気設備（給気口と回転式又は固定式ベンチレーター等により構成されるもの）又は自動強制換気設備（給気口と自動強制排風機等により構成されるもの）のいずれかによるものとする。



〈自然換気設備の例〉

〈強制換気設備の例〉



〈自動強制換気設備の例〉

図 2 - 4 - 8 換気設備の例

換気設備の 3 種類を具体的に記載

換気設備の 3 種類を図に整理

ウ 換気用ダクトについては、次によること。
 (ア) から(イ) 省略

(4) 強制換気設備 (危険物令第9条第1項第11号に規定する「蒸気又は微粉を屋外の高所に排出する設備」をいう。以下同じ。) については、次のとおりとする。
 ア 危険物令第9条第1項第11号 及び第11条第1項第10号の2ヌ に規定する「可燃性蒸気が滞留するおそれのある建築物又はポンプ室」とは、次に掲げる危険物を貯蔵し、又は取り扱うものが該当する。

イ 給気口については、次のとおりとする。
 (ア) 給気口は、床面積 150 平方メートルごとに1箇所の割合で設けるよう指導するものとし、その有効面積は次表を基準とする。

表2-4-1 給気口の有効面積

床面積	給気口の面積
30 m ² 未満	75c m ²
30 m ² 以上 60 m ² 未満	150c m ²
60 m ² 以上 90 m ² 未満	300c m ²
90 m ² 以上 120 m ² 未満	450c m ²
120 m ² 以上 150 m ² まで	600c m ²

(イ) 給気口は、換気のための有効な位置に設けるよう指導する。

なお、(2) 排出設備 を設置する場合は、給気口を高所に設定する。

ウ 換気口は、給気口に応じて換気が有効に行われるように設けるものとし、屋根上又は地上2メートル以上の高さとする。

エ 換気用ダクトについては、次によること。
 (ア) から(イ) 省略

オ 延焼のおそれのある部分以外の部分であっても、壁、床又は天井を耐火構造としなければならない部分に設備を設ける場合は、当該貫通部分等に防火上有効に防火ダンパー等を設けるよう指導する。

カ 給気口及び換気口には、40 メッシュ (引火点 70 度以上の第4類危険物のみを貯蔵又は取扱う場合は 20 メッシュ) の引火防止網 を設けるよう指導する。

(2) 排出設備 (危険物令第9条第1項第11号に規定する「蒸気又は微粉を屋外の高所に排出する設備」をいう。以下同じ。) については、次のとおりとする。

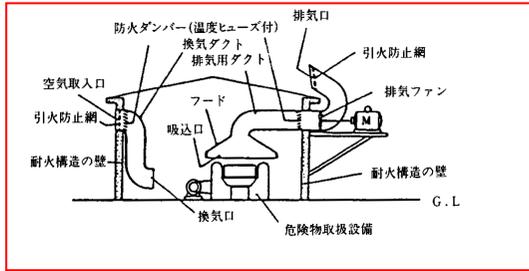
ア 危険物令第9条第1項第11号に規定する「可燃性の蒸気が滞留するおそれ」とは、次に掲げる危険物を貯蔵し、又は取り扱うものが該当する。

既存の図に掲載されている内容の明文化

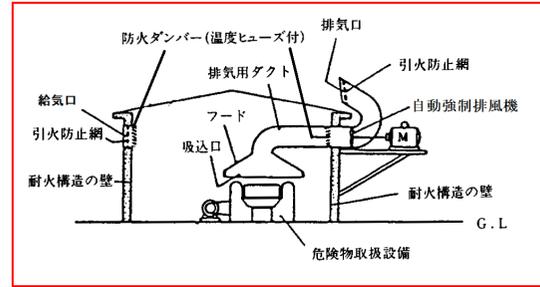
危険物令第11条第1項第10号の2ヌに限らず、これ以

<p>(ア) 引火点が40度未満の危険物 (イ) 引火点が40度以上の危険物であっても引火点以上の状態にあるもの</p> <p><u>イ 強制換気設備は、排気用ファン、排気用ダクト、フード等により構成される動力換気設備で可燃性蒸気又は微粉を強制的に屋外の高所に排出できる構造とする。</u></p> <p><u>ウ 排気用ファン</u>の容量は、1時間あたり換気が5回以上とすること。</p> <p><u>エ</u> 排気用ダクトについては、次によること。 (ア) 排気用ダクトの排気口の位置は、敷地境界線、開口部、火気使用器具等から1.5メートル以上離れた場所とすること。 (イ) 排気用ダクトの排気口の高さは、当該建築物の軒高以上の高さで、かつ、地上4メートル以上とすること。</p> <p><u>(ウ)</u> その他の基準については、<u>(3)ウ</u> ((ア)を除く。)の基準を準用すること。</p> <p><u>オ</u> 可燃性蒸気又は微粉が滞留する場所が一部に限定される場合は、その部分のみを有効に換気できる局所換気方式として差し支えない。</p> <p><u>カ</u> <u>強制換気設備</u>は、常時作動させること。ただし、作業終了時等に可燃性蒸気又は微粉が残存するおそれのない構造の製造所等については、常時作動とならなくても差し支えない。</p>	<p>(ア) 引火点が40度未満の危険物 (イ) 引火点が40度以上の危険物であっても引火点以上の状態にあるもの</p> <p><u>イ 排出設備は、自動強制排風機、排気用ダクト等により構成される自動強制排出設備によるものとする。</u></p> <p><u>ウ 給気口については、(1)イの基準を適用すること。</u></p> <p><u>エ 自動強制排風機</u>の容量は、1時間あたり換気が5回以上とすること。</p> <p><u>オ</u> 排気用ダクトについては、次によること。 (ア) 排気用ダクトの排気口の位置は、敷地境界線、開口部、火気使用器具等から1.5メートル以上離れた場所とすること。 (イ) 排気用ダクトの排気口の高さは、当該建築物の軒高以上の高さで、かつ、地上4メートル以上とすること。</p> <p><u>(ウ)</u> <u>貯留設備を設置する場合は、排気用ダクトの入り口を、貯留設備の上部で、かつ、床面から概ね0.1メートル程度の高さに設けるよう指導する。</u></p> <p><u>(エ)</u> その他の基準については、<u>(1)エ</u> ((ア)を除く。)の基準を準用すること。</p> <p><u>カ</u> 可燃性蒸気又は微粉が滞留する場所が一部に限定される場合は、その部分のみを有効に換気できる局所換気方式として差し支えない。</p> <p><u>キ</u> <u>排出設備</u>は、常時作動させること。ただし、作業終了時等に可燃性蒸気又は微粉が残存するおそれのない構造の製造所等については、常時作動とならなくても差し支えない。</p> <p><u>ク</u> <u>排出設備により、室内の空気を有効に置換することができ、かつ、室温が上昇するおそれのない場合には、換気設備を併設する必要はないものであること。</u></p> <p><u>ケ</u> <u>上記によるほか、(1)オ及びカの基準を適用すること。</u></p>	<p>外の箇所からも参照されるため削除 排出設備の定義を整理</p> <p>既存の図に掲載されている内容の明文化</p> <p>必ずしも併設する必要がないことを追記</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------

例 1



例 1



例 2

例 3

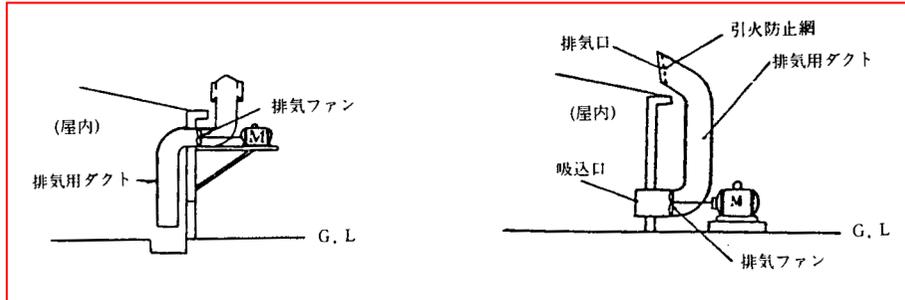


図 2-4-9 強制換気設備の例
危険物の性状等に応じた位置から排出すること。

8~15 (省略)

例 2

例 3

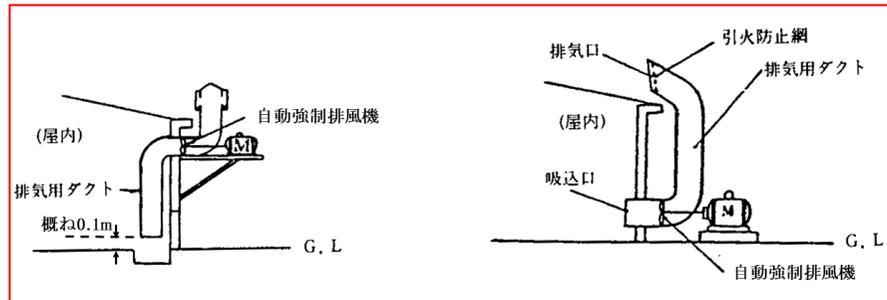


図 2-4-9 排出設備の例
危険物の性状等に応じた位置から排出すること。

8~15 (省略)

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 5 節 一般取扱所の位置、構造及び設備の技術上の基準</p> <p>一般取扱所の基準は、危険物令第 19 条第 1 項及び第 2 項並びに第 4 節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 危険物令第 19 条第 2 項に規定される一般取扱所の共通事項 (1) ～ (3) (省略)</p> <p>(4) 区画室単位的一般取扱所 ア ～ ウ (省略) エ 危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 の 56 第 2 項第 1 号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ 75 mm 以上のもの」(平成 12 年建設省告示第 1399 号第 1 第 1 号ト) が含まれる。(平成 2 年 10 月 31 日消防危第 105 号)</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 5 節 一般取扱所の基準</p> <p>一般取扱所の基準は、危険物令第 19 条第 1 項及び第 2 項並びに第 4 節「製造所の基準」の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 危険物令第 19 条第 2 項に規定される一般取扱所の共通事項 (1) ～ (3) (省略)</p> <p>(4) 区画室単位的一般取扱所 ア ～ ウ (省略) エ 危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 の 56 第 2 項第 1 号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ 75 mm 以上のもの」(平成 12 年建設省告示第 1399 号第 1 第 1 号ト) が含まれる。(平成 2 年 10 月 31 日消防危第 105 号)</p> <p><u>オ エによるほか、危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 条の 56 第 2 項第 1 号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「耐火構造の構造方法を定める件」(平成 12 年建設省告示第 1399 号) 第 1 第 1 号に適合する壁及び第 3 第 1 号に適合する床が認められる。(令和 5 年 3 月 24 日消防危第 63 号)</u></p> <p><u>カ エ及びオによるほか、危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 条の 56 第 2 項第 1 号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、建築基準法第 2 条第 7 号並びに同法施行令第 107 条第 1 号及び第 2 号 (第 1 号にあっては、通常の火災による加熱が 2 時間加えられた場合のものに限る。) の技術的基準に適合するものとして国土交</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

<p><u>オ</u> 危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 条の 56 第 2 項第 1 号に規定する他の部分と区画された床又は壁に換気設備等を設ける場合は、第 4 節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」4(1)イ(イ)の例によること。(平成 2 年 3 月 31 日消防危第 28 号)</p> <p>(5) ～(6) (省略)</p> <p>2 危険物令第 19 条第 2 項に規定される一般取扱所の取扱形態ごとの個別事項</p> <p>(1) ～(3) (省略)</p> <p>(4) ボイラー等の一般取扱所 (危険物令第 19 条第 2 項第 3 号、危険物規則第 28 条の 54 第 1 項第 3 号、第 28 条の 57) 危険物を取り扱う主たる設備がボイラー、バーナーその他これら類する装置 (以下「ボイラー等」という。) で、危険物を消費する一般取扱所については、危険物規則第 28 条の 57 の定めによるほか、次によること。</p> <p>ア ～ ウ (省略)</p> <p><u>エ</u> 屋上に設置する<u>ボイラー等の一般取扱所</u> (危険物規則第 28 条の 57 第 4 項) (ア) ～(キ) (省略)</p> <p>(5) 充填の一般取扱所 (危険物令第 19 条第 2 項第 4 号、危険物規則第 28 条の 54 第 1 項第 4 号、第 28 条の 58) 車両、貨車等に固定されたタンクへ危険物を注入する一般取扱所については、危険物規則第 28 条の 58 の定めによるほか、次によること。 ア 第 4 類の危険物を車両、貨車に固定されたタンクへ直接注入するローディングアーム等の設備には、静電気を有効に除去する装置を設けること。</p>	<p><u>通大臣の認定を受けた耐力壁である間仕切壁及び床が認められる。(令和 5 年 3 月 24 日消防危第 63 号)</u></p> <p><u>キ</u> 危険物規則第 28 条の 55 第 2 項第 2 号及び第 28 条の 56 第 2 項第 1 号に規定する他の部分と区画された床又は壁に換気設備等を設ける場合は、第 4 節「製造所の基準」4(1)イ(イ)の例によること。(平成 2 年 3 月 31 日消防危第 28 号)</p> <p>(5) ～(6) (省略)</p> <p>2 危険物令第 19 条第 2 項に規定される一般取扱所の取扱形態ごとの個別事項</p> <p>(1) ～(3) (省略)</p> <p>(4) ボイラー等の一般取扱所 (危険物令第 19 条第 2 項第 3 号、危険物規則第 28 条の 54 第 1 項第 3 号、第 28 条の 57) 危険物を取り扱う主たる設備がボイラー、バーナーその他これら類する装置 (以下「ボイラー等」という。) で、危険物を消費する一般取扱所については、危険物規則第 28 条の 57 の定めによるほか、次によること。</p> <p>ア ～ ウ (省略)</p> <p><u>エ</u> 屋上に設置する<u>場合は、次によること。</u> (危険物規則第 28 条の 57 第 4 項) (ア) ～(キ) (省略)</p> <p>(5) 充填の一般取扱所 (危険物令第 19 条第 2 項第 4 号、危険物規則第 28 条の 54 第 1 項第 4 号、第 28 条の 58) 車両、貨車等に固定されたタンクへ危険物を注入する一般取扱所については、危険物規則第 28 条の 58 の定めによるほか、次によること。 ア 第 4 類の危険物を車両、貨車に固定されたタンクへ直接注入するローディングアーム等の設備には、静電気を有効に除去する装置を設けること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------

<p>イ アのローディングアームの材質には、アルミニウム、真ちゅう等の火花を発生するおそれのない金属等を用いること。</p> <p>ウ 第4類の危険物を取り扱う場合は、車両、貨車に固定されたタンクに蓄積される静電気を除去するため第7節「屋外タンク貯蔵所の基準」16(8)の例により接地電極等を設けること。</p> <p>(6) 詰替えの一般取扱所（危険物令第19条第2項第4号、危険物規則第28条の54第1項第4号、第28条の59）</p> <p>固定した注油設備によって危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を容器に詰め替え、又は車両に固定された容量4,000リットル以下のタンク（容量2,000リットルを超えるタンクにあっては、その内部を2,000リットル以下ごとに仕切ったものに限る。）に注入する一般取扱所の固定注油設備、注油空地、排水溝及び油分離装置、建築物の構造、消火設備、塀等については、第13節「給油取扱所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」を準用すること。</p> <p>3 複数の取扱形態を有する一般取扱所（平成10年3月16日消防令第28号）</p> <p>(1) ア(ア)から(キ)までに掲げる危険物の取扱形態のみを複数有する一般取扱所であって、イ及びウに適合し、かつ、(2)アからシまでに適合するものは、危険物令第23条を適用し、危険物令第19条第1項において準用する危険物令第9条第1項第1号、第2号及び第4号から第11号までの規定（ア(ウ)及び(カ)に掲げる取扱形態以外の取扱形態を有しない一般取扱所は第18号及び第19号の規定を含む。）を適用しないことができる。</p> <p>ア 危険物の取扱形態</p>	<p>イ アのローディングアームの材質には、アルミニウム、真ちゅう等の火花を発生するおそれのない金属等を用いること。</p> <p>ウ 第4類の危険物を取り扱う場合は、車両、貨車に固定されたタンクに蓄積される静電気を除去するため第7節「屋外タンク貯蔵所の基準」16(8)の例により接地電極等を設けること。</p> <p>(6) 詰替えの一般取扱所（危険物令第19条第2項第5号、危険物規則第28条の54第1項第5号、第28条の59）</p> <p>固定した注油設備によって危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を容器に詰め替え、又は車両に固定された容量4,000リットル以下のタンク（容量2,000リットルを超えるタンクにあっては、その内部を2,000リットル以下ごとに仕切ったものに限る。）に注入する一般取扱所の固定注油設備、注油空地、排水溝及び油分離装置、建築物の構造、消火設備、塀等については、第13節「給油取扱所の基準」を準用すること。</p> <p><u>(7) 蓄電池設備以外では危険物を取り扱わない一般取扱所（危険物令第19条第2項第9号、危険物規則第28条の54第1項第9号、第28条の60の4）</u></p> <p><u>「危険物の規制に関する規則の一部を改正する省令等の運用について」（令和5年9月19日消防令第251号）2(3)イに基づき、他の消防本部と情報交換を行う場合は、保安課危険物保安係を窓口とすること。</u></p> <p>3 複数の取扱形態を有する一般取扱所（平成10年3月16日消防令第28号）</p> <p>(1) ア(ア)から(キ)までに掲げる危険物の取扱形態のみを複数有する一般取扱所であって、イ及びウに適合し、かつ、(2)アからシまでに適合するものは、危険物令第23条を適用し、危険物令第19条第1項において準用する危険物令第9条第1項第1号、第2号及び第4号から第11号までの規定（ア(ウ)及び(カ)に掲げる取扱形態以外の取扱形態を有しない一般取扱所は第18号及び第19号の規定を含む。）を適用しないことができる。</p> <p>ア 危険物の取扱形態</p>	<p>誤記訂正</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------

<p>(ア) 塗装、印刷又は塗布のために危険物（第2類の危険物又は第4類の危険物（特殊引火物を除く。）に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(イ) 洗浄のために危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(ウ) 焼入れ又は放電加工のために危険物（引火点が70度以上の第4類の危険物に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(エ) ボイラー、バーナーその他これらに類する装置で危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を消費する取扱形態</p> <p>(オ) 危険物を用いた油圧装置又は潤滑油循環装置（高引火点危険物のみを100度未満の温度で取り扱うものに限る。）としての危険物の取扱形態</p> <p>(カ) 切削油として危険物を用いた切削装置、研削装置又はこれらに類する装置（高引火点危険物のみを100度未満の温度で取り扱うものに限る。）としての危険物の取扱形態</p> <p>(キ) 危険物以外のものを加熱するため危険物（高引火点危険物に限る。）を用いた熱媒体油循環装置としての危険物の取扱形態</p> <p>イ 建築物に設けられた一般取扱所であること。</p> <p>ウ 指定数量の倍数が30未満であること。</p> <p>(2) 一般取扱所の位置、構造及び設備</p> <p>ア 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、地階を有しないものであること（(1)ア(エ)及び(オ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合を除く。）。</p> <p>イ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、壁、柱、床及びはりを耐火構造とすること。</p> <p>ウ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、出入口以外の開口部を有しない厚さ70ミリメートル以上の鉄筋コンクリート造又はこれと同等以上の強度を有する構造の床又は壁で当該建築物の他の部分と区画されたものであること（(1)ア(オ)及び(カ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合を除く。）。</p> <p>エ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、屋根（上階がある場合は上階の床）を耐火構造とすること。ただし、(1)</p>	<p>(ア) 塗装、印刷又は塗布のために危険物（第2類の危険物又は第4類の危険物（特殊引火物を除く。）に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(イ) 洗浄のために危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(ウ) 焼入れ又は放電加工のために危険物（引火点が70度以上の第4類の危険物に限る。）を取り扱う形態</p> <p>(エ) ボイラー、バーナーその他これらに類する装置で危険物（引火点が40度以上の第4類の危険物に限る。）を消費する取扱形態</p> <p>(オ) 危険物を用いた油圧装置又は潤滑油循環装置（高引火点危険物のみを100度未満の温度で取り扱うものに限る。）としての危険物の取扱形態</p> <p>(カ) 切削油として危険物を用いた切削装置、研削装置又はこれらに類する装置（高引火点危険物のみを100度未満の温度で取り扱うものに限る。）としての危険物の取扱形態</p> <p>(キ) 危険物以外のものを加熱するため危険物（高引火点危険物に限る。）を用いた熱媒体油循環装置としての危険物の取扱形態</p> <p>イ 建築物に設けられた一般取扱所であること。</p> <p>ウ 指定数量の倍数が30未満であること。</p> <p>(2) <u>複数の取扱形態を有する</u>一般取扱所の位置、構造及び設備</p> <p>ア 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、地階を有しないものであること（(1)ア(エ)及び(オ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合を除く。）。</p> <p>イ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、壁、柱、床及びはりを耐火構造とすること。</p> <p>ウ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、出入口以外の開口部を有しない厚さ70ミリメートル以上の鉄筋コンクリート造又はこれと同等以上の強度を有する構造の床又は壁で当該建築物の他の部分と区画されたものであること（(1)ア(オ)及び(カ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合を除く。）。</p> <p>エ 建築物の一般取扱所の用に供する部分は、屋根（上階がある場合は上階の床）を耐火構造とすること。ただし、(1)</p>	<p>所要の整備</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>ア(ア)又は(イ)に掲げる危険物の取扱形態を有しない場合は、屋根を不燃材料で造ることができる。</p> <p>オ (1)ア(エ)に掲げる危険物の取扱形態を有する場合は、危険物を取り扱うタンクの容量の総計を指定数量未満とすること。</p> <p>カ 危険物を取り扱うタンク（容量が指定数量の5分の1未満のものを除く。）の周囲には、危険物規則第13条の3第2項第1号の規定の例による囲いを設けること。ただし、(1)ア(オ)及び(カ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合は、建築物の一般取扱所の用に供する部分のしきいを高くすることにより囲いに代えることができる。</p> <p>キ 建築物の一般取扱所の用に供する部分には、(1)ア(ウ)に掲げる危険物の取扱形態により取り扱われる危険物が危険な温度に達するまでに警報することができる装置を設けること。</p> <p>ク 危険物を加熱する設備（(1)ア(イ)又は(キ)の危険物の取扱形態を有する設備に係るものに限る。）には、危険物の過熱を防止することができる装置を設けること。</p> <p>ケ (1)ア(キ)の危険物の取扱形態を有する設備は、危険物の体積膨張による危険物の漏えいを防止することができる構造のものとする。</p> <p>コ 可燃性の蒸気又は微粉（霧状の危険物を含む。以下同じ。）を放散するおそれのある設備と火花又は高熱等を生ずる設備を併置しないこと。ただし、放散された可燃性の蒸気又は微粉が滞留するおそれがない場所に火花又は高熱等を生ずる設備を設置する場合はこの限りでない。</p> <p>サ 危険物規則第33条第1項第1号に該当する一般取扱所以外の一般取扱所には、危険物規則第34条第2項第1号の規定の例により消火設備を設けること。ただし、第1種、第2種及び第3種の消火設備を当該一般取扱所に設けるときは、当該設備の放射能力範囲内の部分について第4種の消火設備を設けないことができる。</p> <p>シ 危険物規則第28条の55第2項第3号から第8号まで及び危険物規則第28条の57第2項第2号の基準に適合するものであること。</p>	<p>ア(ア)又は(イ)に掲げる危険物の取扱形態を有しない場合は、屋根を不燃材料で造ることができる。</p> <p>オ (1)ア(エ)に掲げる危険物の取扱形態を有する場合は、危険物を取り扱うタンクの容量の総計を指定数量未満とすること。</p> <p>カ 危険物を取り扱うタンク（容量が指定数量の5分の1未満のものを除く。）の周囲には、危険物規則第13条の3第2項第1号の規定の例による囲いを設けること。ただし、(1)ア(オ)及び(カ)に掲げる危険物の取扱形態のみを有する場合は、建築物の一般取扱所の用に供する部分のしきいを高くすることにより囲いに代えることができる。</p> <p>キ 建築物の一般取扱所の用に供する部分には、(1)ア(ウ)に掲げる危険物の取扱形態により取り扱われる危険物が危険な温度に達するまでに警報することができる装置を設けること。</p> <p>ク 危険物を加熱する設備（(1)ア(イ)又は(キ)の危険物の取扱形態を有する設備に係るものに限る。）には、危険物の過熱を防止することができる装置を設けること。</p> <p>ケ (1)ア(キ)の危険物の取扱形態を有する設備は、危険物の体積膨張による危険物の漏えいを防止することができる構造のものとする。</p> <p>コ 可燃性の蒸気又は微粉（霧状の危険物を含む。以下同じ。）を放散するおそれのある設備と火花又は高熱等を生ずる設備を併置しないこと。ただし、放散された可燃性の蒸気又は微粉が滞留するおそれがない場所に火花又は高熱等を生ずる設備を設置する場合はこの限りでない。</p> <p>サ 危険物規則第33条第1項第1号に該当する一般取扱所以外の一般取扱所には、危険物規則第34条第2項第1号の規定の例により消火設備を設けること。ただし、第1種、第2種及び第3種の消火設備を当該一般取扱所に設けるときは、当該設備の放射能力範囲内の部分について第4種の消火設備を設けないことができる。</p> <p>シ 危険物規則第28条の55第2項第3号から第8号まで及び危険物規則第28条の57第2項第2号の基準に適合するものであること。</p>	
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

<p>4 栈橋等の一般取扱所 栈橋（渡り栈橋を含む。以下同じ。）又は岸壁等において、危険物を輸送用の船舶、タンカー等へ積み込み、又は積み卸す一般取扱所については、次のとおりとする。</p> <p>(1) 海、河川、運河等に面する部分については、保有空地の規定は、適用しない。</p> <p>(2) 栈橋は、不燃材料で造るとともに、波浪、潮流等に対して安全な構造とする。</p> <p>(3) 栈橋に設置する危険物を移送するための配管には、取り扱う危険物の品名を表示するとともに、配管先端部には鋳鋼製の弁を設けること。</p> <p>(4) 栈橋上には、電気による照明以外の灯火を用いる照明装置を設けないこと。</p> <p>(5) 避雷設備は、設けなくても差し支えない。</p> <p>5 動植物油類のタンクに附属する注入設備等の一般取扱所 危険物規則第1条の3第7項第1号の定めるところにより貯蔵保管されているタンクのうち当該タンクに附属して注入口及び当該注入口に接続する配管、弁等が設けられており、当該注入口、配管及び弁において1日に指定数量以上の動植物油類を取り扱う場合については、次により一般取扱所として規制する。</p> <p>(1) 一般取扱所となる範囲は、注入口から当該タンクの元弁（元弁がない場合については、配管と当該タンクの接続部）までとする。</p> <p>(2) その他技術上の基準については、第7節「屋外タンク貯蔵所の基準」、第8節「屋内タンク貯蔵所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」及び第9節「地下タンク貯蔵所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」を準用すること。</p> <p>6 ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所 当該一般取扱所の技術上の基準等については、「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の技術上の基準等について」（平成11年6月2日消防危第53号）、「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の取扱いについて」（平成11年6月18日消危</p>	<p>4 栈橋等の一般取扱所 栈橋（渡り栈橋を含む。以下同じ。）又は岸壁等において、危険物を輸送用の船舶、タンカー等へ積み込み、又は積み卸す一般取扱所については、次のとおりとする。</p> <p>(1) 海、河川、運河等に面する部分については、保有空地の規定は、適用しない。</p> <p>(2) 栈橋は、不燃材料で造るとともに、波浪、潮流等に対して安全な構造とする。</p> <p>(3) 栈橋に設置する危険物を移送するための配管には、取り扱う危険物の品名を表示するとともに、配管先端部には鋳鋼製の弁を設けること。</p> <p>(4) 栈橋上には、電気による照明以外の灯火を用いる照明装置を設けないこと。</p> <p>(5) 避雷設備は、設けなくても差し支えない。</p> <p>5 動植物油類のタンクに附属する注入設備等の一般取扱所 危険物規則第1条の3第7項第1号の定めるところにより貯蔵保管されているタンクのうち当該タンクに附属して注入口及び当該注入口に接続する配管、弁等が設けられており、当該注入口、配管及び弁において1日に指定数量以上の動植物油類を取り扱う場合については、次により一般取扱所として規制する。</p> <p>(1) 一般取扱所となる範囲は、注入口から当該タンクの元弁（元弁がない場合については、配管と当該タンクの接続部）までとする。</p> <p>(2) その他技術上の基準については、第7節「屋外タンク貯蔵所の基準」、第8節「屋内タンク貯蔵所の基準」及び第9節「地下タンク貯蔵所の基準」を準用すること。</p> <p>6 ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所 当該一般取扱所の技術上の基準等については、「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の技術上の基準等について」（平成11年6月2日消防危第53号）、「ナトリウム・硫黄電池を設置する危険物施設の取扱いについて」（平成11年6月18日消危</p>	<p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

第 48 号)、「ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所の火災対策について」(平成 24 年 6 月 7 日消防危第 154 号)、「ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所の火災対策について」(平成 24 年 7 月 4 日消指第 134 号)、「ナトリウム・硫黄電池の設置について」(平成 25 年 8 月 23 日消防危第 156 号) 及び「新たな構造を有するナトリウム・硫黄電池の取扱いについて」(平成 25 年 9 月 2 日消指第 228 号) によること。

なお、ナトリウム・硫黄電池に関する運搬及び貯蔵の技術上の基準については、「危険物の規制に関する規則等の一部改正について」(平成 19 年 3 月 12 日消防危第 59 号) によること。

7 その他の留意事項

(1) 単独荷卸し

地下タンクを有するものにおける移動タンク貯蔵所に乗務する危険物取扱者による単独荷卸しに必要な安全対策等については、「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成 17 年 10 月 26 日消防危第 245 号 (平成 30 年 3 月 30 日消防危第 44 号改正)) によること。

(2) 発電所、変電所等

第 1 節第 1 16 を参照すること。

第 48 号)、「ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所の火災対策について」(平成 24 年 6 月 7 日消防危第 154 号)、「ナトリウム・硫黄電池を設置する一般取扱所の火災対策について」(平成 24 年 7 月 4 日消指第 134 号)、「ナトリウム・硫黄電池の設置について」(平成 25 年 8 月 23 日消防危第 156 号) 及び「新たな構造を有するナトリウム・硫黄電池の取扱いについて」(平成 25 年 9 月 2 日消指第 228 号) によること。

なお、ナトリウム・硫黄電池に関する運搬及び貯蔵の技術上の基準については、「危険物の規制に関する規則等の一部改正について」(平成 19 年 3 月 12 日消防危第 59 号) によること。

7 その他の留意事項

(1) 単独荷卸し

地下タンクを有するものにおける移動タンク貯蔵所に乗務する危険物取扱者による単独荷卸しに必要な安全対策等については、「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成 17 年 10 月 26 日消防危第 245 号 (平成 30 年 3 月 30 日消防危第 44 号改正)) によること。

(2) 発電所、変電所等

第 1 節第 1 16 を参照すること。

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 6 節 屋内貯蔵所の位置、構造及び設備の技術上の基準</p> <p>屋内貯蔵所の基準は、危険物令第 10 条の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 貯蔵又は取扱いの範囲 屋内貯蔵所において危険物以外の物品を貯蔵する場合にあっては、危険物規則第 38 条の 4 の規定によるほか、「屋内貯蔵所等における危険物以外の物品の貯蔵に係る運用基準について」（平成 10 年 3 月 16 日消防危第 26 号）によること。 屋内貯蔵所内の危険物の取扱いは、軽易な作業による詰替え、小分け、混合等の貯蔵に伴う取扱いで、1 日の取扱量が指定数量未満であり、かつ、火災予防上安全な方法で行う場合に限り認められる。</p> <p>2 保安距離（危険物令第 10 条第 1 項第 1 号） 保安距離については、第 4 節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」1 の例によること。</p> <p>3 保有空地 保有空地については、危険物令第 10 条第 1 項第 2 号の定めによるほか、第 4 節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」2 の例によること。</p> <p>4 標識、掲示板（危険物令第 10 条第 1 項第 3 号） 標識及び掲示板については、第 4 節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」3 の例によること。</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 6 節 屋内貯蔵所の基準</p> <p>屋内貯蔵所の基準は、危険物令第 10 条の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 貯蔵又は取扱いの範囲 屋内貯蔵所において危険物以外の物品を貯蔵する場合にあっては、危険物規則第 38 条の 4 の規定によるほか、「屋内貯蔵所等における危険物以外の物品の貯蔵に係る運用基準について」（平成 10 年 3 月 16 日消防危第 26 号）によること。 屋内貯蔵所内の危険物の取扱いは、軽易な作業による詰替え、小分け、混合等の貯蔵に伴う取扱いで、1 日の取扱量が指定数量未満であり、かつ、火災予防上安全な方法で行う場合に限り認められる。</p> <p>2 保安距離（危険物令第 10 条第 1 項第 1 号） 保安距離については、第 4 節「製造所の基準」1 の例によること。</p> <p>3 保有空地 保有空地については、危険物令第 10 条第 1 項第 2 号の定めによるほか、第 4 節「製造所の基準」2 の例によること。</p> <p>4 標識、掲示板（危険物令第 10 条第 1 項第 3 号） 標識及び掲示板については、第 4 節「製造所の基準」3 の例によること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

<p>5 軒高 危険物令第10条第1項第4号に定める「軒高」とは、地盤面から建築物の小屋組又はこれに代わる横架材を支持する壁、敷げた又は柱の上端までの高さをいう。(平成元年3月1日消防危第14号)</p> <p>6 床面積の制限(危険物令第10条第1項第5号) 危険物令第10条第1項第5号に定める「床面積」は、建築基準法施行令第2条第1項第3号に定めるところによるものとし、建築確認申請において、建築主事が確認した面積と同一とする。</p> <p>7 建築物等の構造 建築物等の構造は、危険物令第10条第1項第6号から第11号までの定めによるほか、次のとおりとする。 (1) 危険物令第10条第1項第6号ただし書の「延焼のおそれのない外壁、柱及び床」における「延焼のおそれのない」は「外壁、柱及び床」全てにかかるものであること。 (2) 貯蔵倉庫に隔壁を設ける場合は次のとおりとする。 ア 隔壁は、開口部を有しない耐火構造とするとともに、屋根まで完全に区画すること。 イ 同類の危険物のみの貯蔵倉庫に設ける隔壁については、不燃材料として差し支えない。 ウ 類を異にする危険物を貯蔵する場合は、鉄筋コンクリート造とするよう指導する。 (3) 危険物令第10条第1項第10号に規定する「禁水性物品」の貯蔵倉庫の床面は、設置場所の浸水状況を勘案して地上高を決定すること。この場合の地上高は15センチメートル以下としないよう指導する。ただし、これと同等以上の効果があると認められる措置を講じた場合は、この限りでない。 (4) その他の基準については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」4の例によること。</p> <p>8 床の構造等(危険物令第10条第1項第11号) 危険物令第10条第1項第11号に定める「床の構造等」については、次によること。 (1) フォークリフト等の出入りのために排水溝の上に蓋を設ける場</p>	<p>5 軒高 危険物令第10条第1項第4号に定める「軒高」とは、地盤面から建築物の小屋組又はこれに代わる横架材を支持する壁、敷げた又は柱の上端までの高さをいう。(平成元年3月1日消防危第14号)</p> <p>6 床面積の制限(危険物令第10条第1項第5号) 危険物令第10条第1項第5号に定める「床面積」は、建築基準法施行令第2条第1項第3号に定めるところによるものとし、建築確認申請において、建築主事が確認した面積と同一とする。</p> <p>7 建築物等の構造 建築物等の構造は、危険物令第10条第1項第6号から第11号までの定めによるほか、次のとおりとする。 (1) 危険物令第10条第1項第6号ただし書の「延焼のおそれのない外壁、柱及び床」における「延焼のおそれのない」は「外壁、柱及び床」全てにかかるものであること。 (2) 貯蔵倉庫に隔壁を設ける場合は次のとおりとする。 ア 隔壁は、開口部を有しない耐火構造とするとともに、屋根まで完全に区画すること。 イ 同類の危険物のみの貯蔵倉庫に設ける隔壁については、不燃材料として差し支えない。 ウ 類を異にする危険物を貯蔵する場合は、鉄筋コンクリート造とするよう指導する。 (3) 危険物令第10条第1項第10号に規定する「禁水性物品」の貯蔵倉庫の床面は、設置場所の浸水状況を勘案して地上高を決定すること。この場合の地上高は15センチメートル以下としないよう指導する。ただし、これと同等以上の効果があると認められる措置を講じた場合は、この限りでない。 (4) その他の基準については、第4節「製造所の基準」4の例によること。</p> <p>8 床の構造等(危険物令第10条第1項第11号) 危険物令第10条第1項第11号に定める「床の構造等」については、次によること。 (1) フォークリフト等の出入りのために排水溝の上に蓋を設ける場</p>	<p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>合は、グレーチング等、当該排水溝の効用を損なわないよう設けること。</p> <p>(2) その他の基準については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」5の例によること。</p>	<p>合は、グレーチング等、当該排水溝の効用を損なわないよう設けること。</p> <p>(2) その他の基準については、第4節「製造所の基準」5の例によること。</p>	<p>所要の整備</p>
<p>9 架台</p> <p>危険物令第10条第1項第11号の2に規定する「架台」については、危険物規則第16条の2の2の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>(1) 架台は、第3章第1「建築関係資料」<u>別添第3</u>の「床」に該当しない構造のものであること。</p> <p>(2) ～(4) (省略)</p>	<p>9 架台</p> <p>危険物令第10条第1項第11号の2に規定する「架台」については、危険物規則第16条の2の2の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>(1) 架台は、第3章第1「建築関係資料」<u>3(1)</u>の「床」に該当しない構造のものであること。</p> <p>(2) ～(4) (省略)</p>	<p>所要の整備</p>
<p>10 採光及び照明の設備 (危険物令第10条第1項第12号)</p> <p>採光及び照明の設備については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」6の例によること。</p>	<p>10 採光及び照明の設備 (危険物令第10条第1項第12号)</p> <p>採光及び照明の設備については、第4節「製造所の基準」6の例によること。</p>	<p>所要の整備</p>
<p>11 換気設備等 (危険物令第10条第1項第12号)</p> <p>換気の設備<u>及び</u>引火点70度未満の危険物の貯蔵倉庫に設ける「内部に滞留した可燃性の蒸気を屋根上に排出する設備」については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」7(4)の例によること。</p>	<p>11 換気設備等 (危険物令第10条第1項第12号)</p> <p>換気の設備については、<u>第4節「製造所の基準」7(1)の例によること。また、</u>引火点70度未満の危険物の貯蔵倉庫に設ける「内部に滞留した可燃性の蒸気を屋根上に排出する設備」については、第4節「製造所の基準」7(2)の例によること。</p>	<p>所要の整備</p>
<p>12 電気設備 (危険物令第10条第1項第13号)</p> <p>電気設備については、第3章第2「電気設備の基準」によること。</p>	<p>12 電気設備 (危険物令第10条第1項第13号)</p> <p>電気設備については、第3章第2「電気設備の基準」によること。</p>	
<p>13 避雷設備 (危険物令第10条第1項第14号)</p> <p>避雷設備については、第3章第3「避雷設備の基準」によること。</p>	<p>13 避雷設備 (危険物令第10条第1項第14号)</p> <p>避雷設備については、第3章第3「避雷設備の基準」によること。</p>	
<p>14 建築物の部分に設ける屋内貯蔵所 (危険物令第10条第3項)</p> <p>建築物の部分に設ける指定数量の倍数が20以下の屋内貯蔵所については、危険物令第10条第3項の定めによるほか、次によること。</p> <p>(1) 屋内貯蔵所を同一の階において2以上設ける場合は、隣接して設けないこと。</p> <p>(2) 危険物令第10条第3項第7号に規定する「ダンパー」について</p>	<p>14 建築物の部分に設ける屋内貯蔵所 (危険物令第10条第3項)</p> <p>建築物の部分に設ける指定数量の倍数が20以下の屋内貯蔵所については、危険物令第10条第3項の定めによるほか、次によること。</p> <p>(1) 屋内貯蔵所を同一の階において2以上設ける場合は、隣接して設けないこと。</p> <p>(2) 危険物令第10条第3項第7号に規定する「ダンパー」について</p>	

<p>は、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」4(1)イ(イ)の例によること。</p> <p>(3) 1階が耐火構造で、2階が耐火構造以外の構造である建築物（1階と2階とは開口部のない耐火構造の床で区画されている）の1階に屋内貯蔵所を設けることはできない。（平成元年7月4日消防危第64号）</p> <p>(4) 建築物の屋内貯蔵所の用に供する部分以外の部分の用途は問わない。（平成元年7月4日消防危第64号）</p> <p>(5) 危険物令第10条第3項第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75mm以上のもの」（平成12年建設省告示第1399号第1第1号ト）も含まれる。（平成2年10月31日消防危第105号）</p>	<p>は、第4節「製造所の基準」4(1)イ(イ)の例によること。</p> <p>(3) 1階が耐火構造で、2階が耐火構造以外の構造である建築物（1階と2階とは開口部のない耐火構造の床で区画されている）の1階に屋内貯蔵所を設けることはできない。（平成元年7月4日消防危第64号）</p> <p>(4) 建築物の屋内貯蔵所の用に供する部分以外の部分の用途は問わない。（平成元年7月4日消防危第64号）</p> <p>(5) 危険物令第10条第3項第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75mm以上のもの」（平成12年建設省告示第1399号第1第1号ト）も含まれる。（平成2年10月31日消防危第105号）</p>	<p>所要の整備</p>
<p>(6) 危険物令第10条第3項第6号に規定する「窓を設けないこと」とは、出入口及び法令上必要とされる換気設備等の開口部以外の開口部を有してはならないことを意味する。（平成元年3月1日消防危第14号）</p> <p>15 ～ 17 （省略）</p>	<p><u>(6) (5)によるほか、危険物令第10条第3項第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「耐火構造の構造方法を定める件」（平成12年建設省告示第1399号）第1第1号に適合する壁及び第3第1号に適合する床が認められる。（令和5年3月24日消防危第63号）</u></p> <p><u>(7) (5)及び(6)によるほか危険物令第10条第3項第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、建築基準法第2条第7号並びに同法施行令第107条第1号及び第2号（第1号にあっては、通常の火災による加熱が2時間加えられた場合のものに限る。）の技術的基準に適合するものとして国土交通大臣の認定を受けた耐力壁である間仕切壁及び床が認められる。（令和5年3月24日消防危第63号）</u></p> <p>(8) 危険物令第10条第3項第6号に規定する「窓を設けないこと」とは、出入口及び法令上必要とされる換気設備等の開口部以外の開口部を有してはならないことを意味する。（平成元年3月1日消防危第14号）</p> <p>15 ～ 17 （省略）</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
<p>15 ～ 17 （省略）</p>	<p><u>18 蓄電池により貯蔵される危険物のみを貯蔵し、又は取り扱う屋内貯蔵所（危険物令第10条第6項）</u> <u>危険物令第10条第6項を適用する屋内貯蔵所を設置する場合は、</u></p>	<p>所要の整備</p>

「危険物の規制に関する政令等の一部改正に伴う蓄電池により貯蔵される危険物のみを貯蔵し、又は取り扱う屋内貯蔵所の運用について」(令和5年12月28日消防危第361号)によること。

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

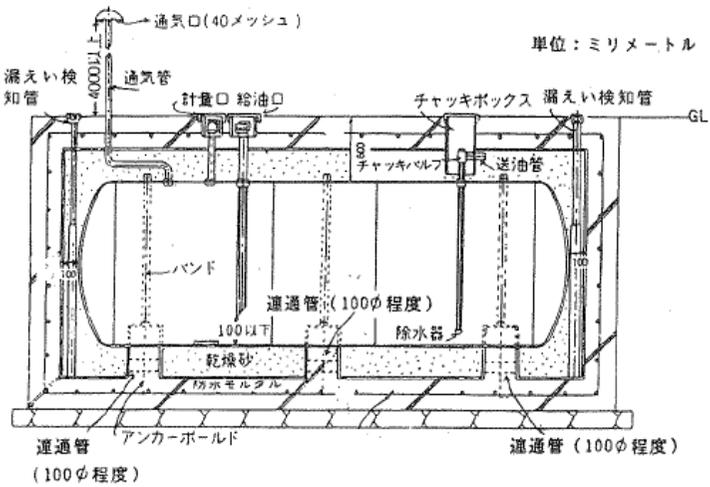
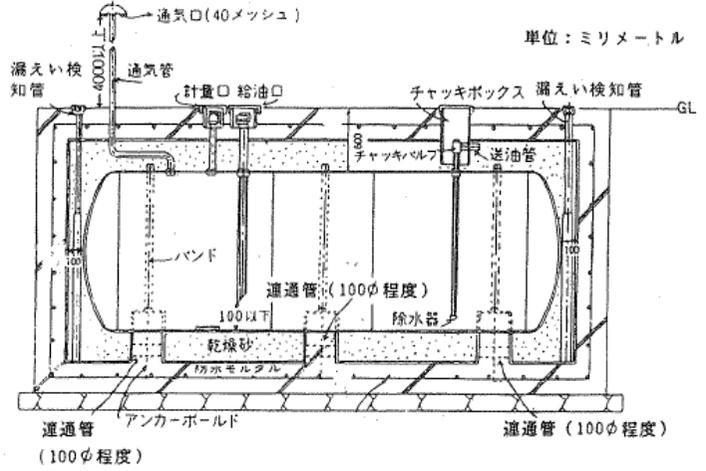
現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 7 節 屋外タンク貯蔵所の基準</p> <p>1～16 (省略)</p> <p>17 ポンプ設備（危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2）</p> <p>(1) ポンプ設備は、防油堤内に設けないこと。</p> <p>(2) ポンプ設備の保有空地は、次のとおり指導する。</p> <p>ア 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 イただし書の「防火上有効な隔壁」とは、壁を耐火構造とした建築物内に設けられた場合も含まれる。</p> <p>イ ポンプ設備相互間については保有空地の規定を適用しないことができる。</p> <p>ウ 屋外タンク貯蔵所のポンプ設備内に設けることができるポンプ設備は、当該屋外タンク貯蔵所のポンプ設備に限られる。ただし、2 以上の屋外タンク貯蔵所の共用ポンプ設備については、この限りではない。</p> <p>エ 2 以上のポンプ設備が一箇所に集団で設置されている場合は、当該 2 以上のポンプ設備の群をもって 1 のポンプ設備とする。この場合、当該ポンプ設備の属するどのタンクの空地内に置くことも可能であり、また、どのタンクとの距離もタンクの空地の幅の 3 分の 1 以上でなければならない。（昭和 40 年 10 月 26 日自消乙予発第 20 号）</p> <p>(3) 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 リに規定する「採光、照明及び換気の設備」、同条第 1 項第 10 号の 2 ヌに規定する「蒸気を屋外の高所に排出する設備」、同条第 1 項第 10 号の 2 ルに規定する「貯留設備」は、第 4 節「<u>製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」5 から 7 までの例によること。</p> <p>(4) 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 ヲに規定する「掲示板」は、16(6)及び(7)の例によること。</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 7 節 屋外タンク貯蔵所の基準</p> <p>1～16 (省略)</p> <p>17 ポンプ設備（危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2）</p> <p>(1) ポンプ設備は、防油堤内に設けないこと。</p> <p>(2) ポンプ設備の保有空地は、次のとおり指導する。</p> <p>ア 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 イただし書の「防火上有効な隔壁」とは、壁を耐火構造とした建築物内に設けられた場合も含まれる。</p> <p>イ ポンプ設備相互間については保有空地の規定を適用しないことができる。</p> <p>ウ 屋外タンク貯蔵所のポンプ設備内に設けることができるポンプ設備は、当該屋外タンク貯蔵所のポンプ設備に限られる。ただし、2 以上の屋外タンク貯蔵所の共用ポンプ設備については、この限りではない。</p> <p>エ 2 以上のポンプ設備が一箇所に集団で設置されている場合は、当該 2 以上のポンプ設備の群をもって 1 のポンプ設備とする。この場合、当該ポンプ設備の属するどのタンクの空地内に置くことも可能であり、また、どのタンクとの距離もタンクの空地の幅の 3 分の 1 以上でなければならない。（昭和 40 年 10 月 26 日自消乙予発第 20 号）</p> <p>(3) 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 リに規定する「採光、照明及び換気の設備」、同条第 1 項第 10 号の 2 ヌに規定する「蒸気を屋外の高所に排出する設備」、同条第 1 項第 10 号の 2 ルに規定する「貯留設備」は、第 4 節「製造所の基準」5 から 7 までの例によること。</p> <p>(4) 危険物令第 11 条第 1 項第 10 号の 2 ヲに規定する「掲示板」は、16(6)及び(7)の例によること。</p>	<p>所要の整備</p>

<p>(5) 指定数量の10倍以下の第4類の危険物の屋外貯蔵タンクのポンプ設備の周囲には、1メートル以上の幅の空地进行を保有するよう指導する。ただし、不燃材料で覆った場合は、この限りはでない。</p> <p>18 ~ 33 (省略)</p>	<p>(5) 指定数量の10倍以下の第4類の危険物の屋外貯蔵タンクのポンプ設備の周囲には、1メートル以上の幅の空地进行を保有するよう指導する。ただし、不燃材料で覆った場合は、この限りはでない。</p> <p><u>(6) 危険物令第11条第1項第10号の2ルに規定する「高さ0.15メートル以上の囲い」については、危険物の取扱方法及び数量を考慮した溝等、又は囲い等によることができる。溝等の場合は、その上部を車両等が通過する場合、車両等の重量によって変形しない構造とすること（令和6年5月31日消防危第170号）。</u></p> <p>18 ~ 33 (省略)</p>	<p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 8 節 屋内タンク貯蔵所<u>の位置、構造及び設備の技術上</u>の基準</p> <p>1～11 (省略)</p> <p>12 平屋建以外に設けるタンク専用室の換気及び排出設備 (危険物令第 12 条第 2 項第 7 号) 危険物令第 12 条第 2 項第 7 号に規定する「ダンパー等」は、<u>第 4 節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」4 (1)イ (イ)の例によること。</u></p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 8 節 屋内タンク貯蔵所の基準</p> <p>1～11 (省略)</p> <p>12 平屋建以外に設けるタンク専用室の換気及び排出設備 (危険物令第 12 条第 2 項第 7 号) 危険物令第 12 条第 2 項第 7 号に規定する「ダンパー等」は、<u>温度ヒューズ付の防火ダンパー等とし、タンク専用室の貫通部に防火上有効に設けること。</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>設置個所が外壁に限らないため整理したもの</p>

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 9 節 地下タンク貯蔵所 <u>の位置、構造及び設備の技術上</u>の基準 1～13 (省略)</p> <p>14 タンク室の構造 (危険物令第13条第 1 項第14号、危険物規則第23条の 4、第24条、危険物告示第 4 条の50) (1)～(3) (省略) (4) 危険物規則第24条第 1 項第 2 号に規定する「地下水等がタンク室の内部に浸入しない措置」とは、振動等による変形追従性能、危険物により劣化しない性能及び長期耐久性能を有するゴム系又はシリコン系の止水剤を充填するなどの措置がある。(平成17年 3 月24日消防危第55号)</p>  <p style="text-align: center;">図 2-9-5 地下タンク室に設けられた地下貯蔵タンクの例</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 9 節 地下タンク貯蔵所の基準 1～13 (省略)</p> <p>14 タンク室の構造 (危険物令第 13 条第 1 項第 14 号、危険物規則第23条の 4、第 24 条、危険物告示第 4 条の 50) (1)～(3) (省略) (4) 危険物規則第 24 条第 1 項第 2 号に規定する「地下水等がタンク室の内部に浸入しない措置」とは、振動等による変形追従性能、危険物により劣化しない性能及び長期耐久性能を有するゴム系又はシリコン系の止水剤を充填するなどの措置がある。(平成 17 年 3 月 24 日消防危第 55 号) <u>(5) 地下タンクの枕には、漏れた油が漏えい検知装置等で有効に検知できるような開口 (連通管) を設けるよう指導する。</u> <u>なお、円形の連通管を設ける場合は、直径 100 ミリメートル程度とすること。</u></p>  <p style="text-align: center;">図 2-9-5 <u>-1</u> 地下タンク室に設けられた地下貯蔵タンクの例</p>	<p>所要の整備</p> <p>図に記載されている構造を明記したもの</p>

15～22 (省略)

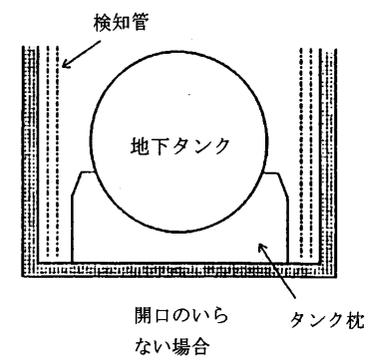
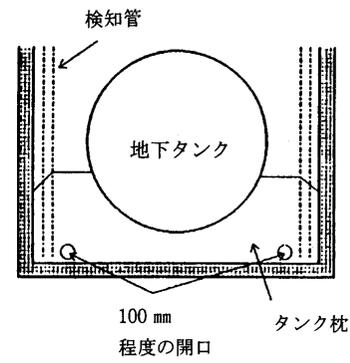


図 2-9-5-2 タンク枕に設ける開口 (連通管) の設置例

15～22 (省略)

設置例を追記

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 10 節 簡易タンク貯蔵所<u>の位置、構造及び設備の技術上</u>の基準 (省略)</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 10 節 簡易タンク貯蔵所の基準 (省略)</p>	<p>所要の整備</p>

基準」16(8)に掲げる接地電極等が設けられている場所で行うよう指導すること。

極等が設けられている場所で行うよう指導すること。

- (1) さく等は、高さ0.5メートル以上とし、不燃材料で造ること。
- (2) さく等の周囲には、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」5の例により排水溝、ためます又は油分離装置を設けること。

4 保有空地（危険物令第16条第1項第4号）
 保有空地については、危険物令第16条第1項第4号の規定によるほか、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」2の例によること。

5 標識及び掲示板（危険物令第16条第1項第5号）
 標識及び掲示板については、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」3の例によること。

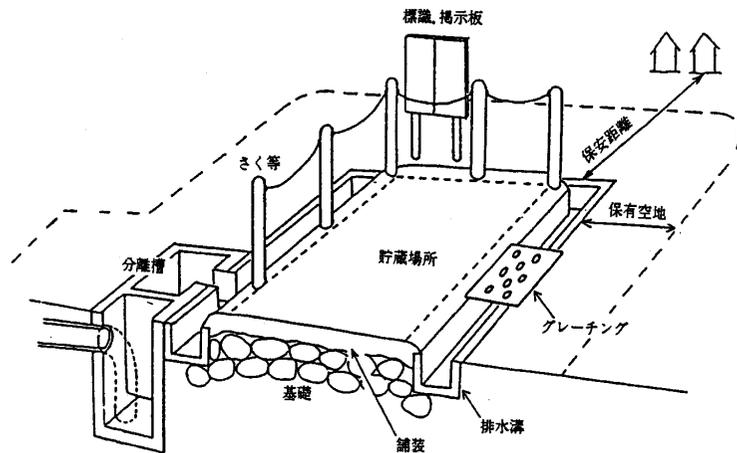


図2-12-1 屋外貯蔵所の例

6 架台（危険物令第16条第1項第6号）
 危険物令第16条第1項第6号に規定する「架台」については、危険物規則第24条の10の規定によるほか、次によること。

- (1) 架台は、建築基準法第2条に規定する「建築物」に該当しない構造のものであること。
- (2) 架台高さは、その最上段に貯蔵する容器の頂部が6メートル未満となるようにすること。
- (3) その他の基準については、第6節「屋内貯蔵所の位置、構

- (1) さく等は、高さ0.5メートル以上とし、不燃材料で造ること。
- (2) さく等の周囲には、第4節「製造所の基準」5の例により排水溝、ためます又は油分離装置を設けること。

4 保有空地（危険物令第16条第1項第4号）
 保有空地については、危険物令第16条第1項第4号の規定によるほか、第4節「製造所の基準」2の例によること。

5 標識及び掲示板（危険物令第16条第1項第5号）
 標識及び掲示板については、第4節「製造所の基準」3の例によること。

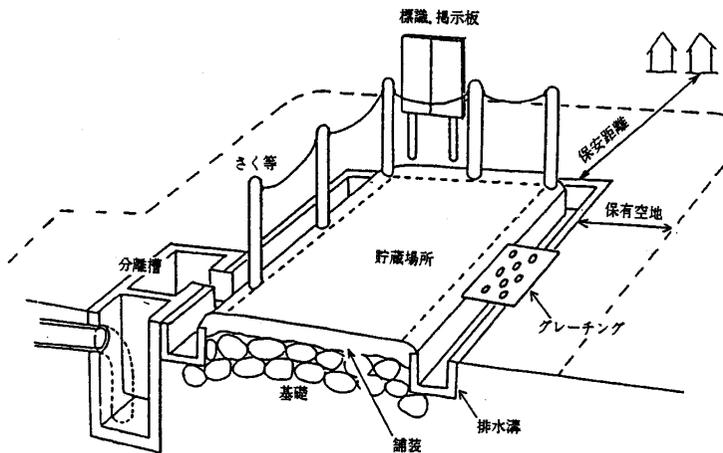


図2-12-1 屋外貯蔵所の例

6 架台（危険物令第16条第1項第6号）
 危険物令第16条第1項第6号に規定する「架台」については、危険物規則第24条の10の規定によるほか、次によること。

- (1) 架台は、建築基準法第2条に規定する「建築物」に該当しない構造のものであること。
- (2) 架台高さは、その最上段に貯蔵する容器の頂部が6メートル未満となるようにすること。
- (3) その他の基準については、第6節「屋内貯蔵所の基準」9

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

造及び設備の技術上の基準」9の例によること。

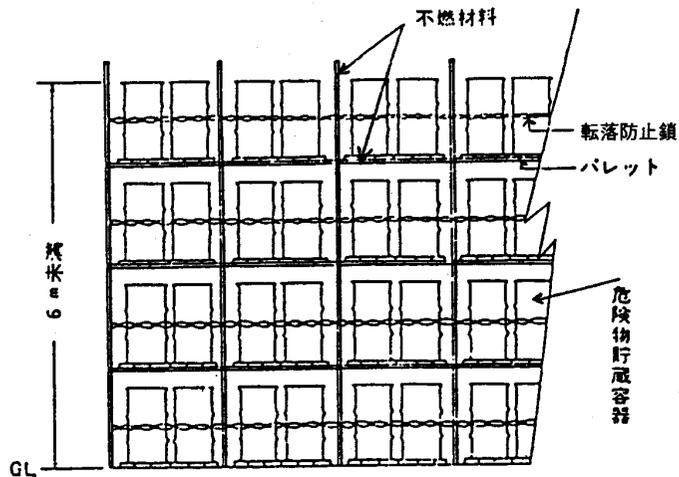


図 2-12-2 架台の例

- 7 塊状の硫黄等のみの屋外貯蔵所（危険物令第16条第2項）
危険物令第16条第1項第3号の適用については、原則として
囲いは同号の「さく等」に含まれるものではないが、囲いの相互間のうち硫黄等を貯蔵し、又は取り扱う場所の外縁部分にさく等を設ければ足りる。（昭和54年7月30日消防危第80号）

の例によること。

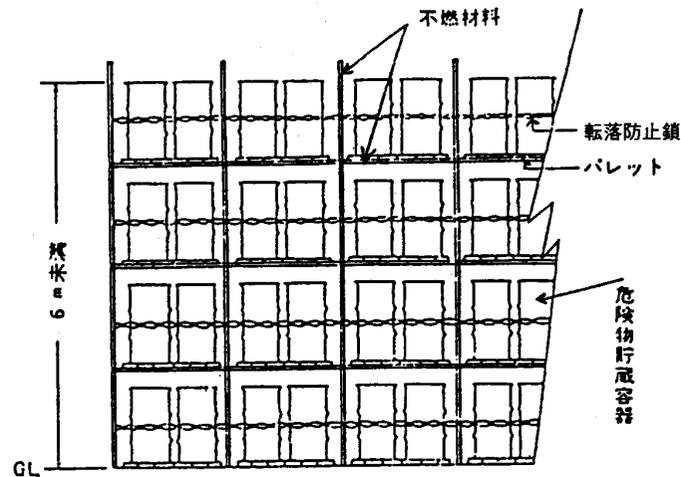


図 2-12-2 架台の例

- 7 塊状の硫黄等のみの屋外貯蔵所（危険物令第16条第2項）
危険物令第16条第1項第3号の適用については、原則として
囲いは同号の「さく等」に含まれるものではないが、囲いの相互間のうち硫黄等を貯蔵し、又は取り扱う場所の外縁部分にさく等を設ければ足りる。（昭和54年7月30日消防危第80号）

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 13 節 給油取扱所 <u>の位置、構造及び設備の技術上</u>の基準</p> <p>第 1 屋外給油取扱所及び共通事項</p> <p><u>1 給油取扱所の敷地</u> 給油取扱所の敷地面積とは、建築基準法施行令第 2 条（ただし書の部分を除く。）に規定する敷地面積のうち給油取扱所の用に供する部分の面積（防火塀を含めたもの）をいう。</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 13 節 給油取扱所の基準</p> <p>第 1 屋外給油取扱所及び共通事項</p> <p><u>1 定義等</u> <u>(1) 自動車等について</u> 危険物令第 3 条第 1 号の「自動車等」には、自動車、航空機、船舶及び鉄道又は軌道によって運行する車両のほか、可搬形発電設備、除雪機、農機具類等動力源として危険物を消費する燃料タンクを内蔵するもの全てが該当し、給油取扱所においてそれらの燃料タンクへ直接給油することが認められる。（令和 5 年 3 月 24 日消防危第 63 号） <u>(2) 車両の荷台に積載され、又は車両により牽引された自動車等への給油について</u> 給油取扱所において、トラック等の車両の荷台に積載され、又は車両により牽引された状態の自動車等の燃料タンクに直接給油することも認められる。（令和 5 年 3 月 24 日消防危第 63 号）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>(注意事項) 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所において、自動車等（自動車及び原動機付自転車を除く。）に直接給油する場合は、危険物取扱者である従業員、又はその立会いを受けた従業員が行う必要がある。</p> </div> <p><u>2 給油取扱所の敷地</u> 給油取扱所の敷地面積とは、建築基準法施行令第 2 条（ただし書の部分を除く。）に規定する敷地面積のうち給油取扱所の用に供する部分の面積（防火塀を含めたもの）をいう。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>注意事項を追記</p> <p>所要の整備</p>

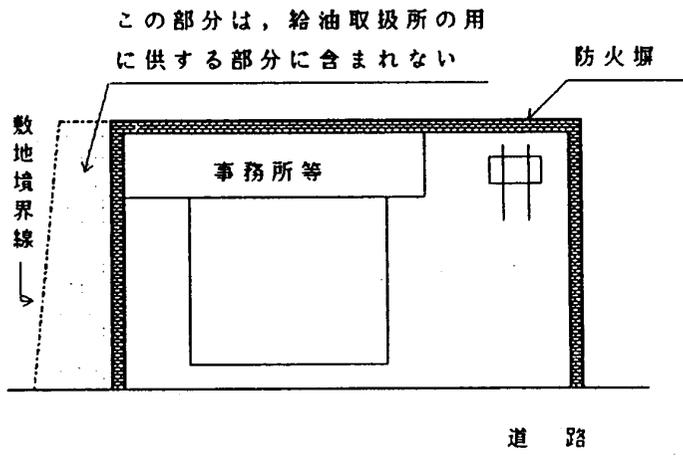


図2-13-1-1 給油取扱所の用に供する部分の面積

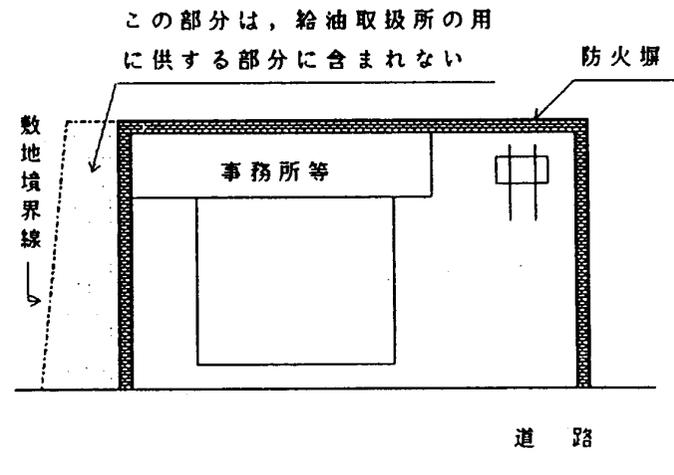


図2-13-1-1 給油取扱所の用に供する部分の面積

2. 自動車等の出入りするための給油空地（危険物令第17条第1項第2号、危険物規則第24条の14）

- (1) 危険物令第17条第1項第2号に規定する給油空地内には、上屋の柱、アイランド（固定給油設備及び固定注油設備（以下「固定給油設備等」という。）を置くため、地盤面より15センチメートル以上高くした鉄筋コンクリート製の台をいう。以下同じ。）等の給油取扱所の構造上必要なものに限り設けることができる。ただし、自動車等の窓ガラス拭き、灰皿の処理、オイル点検等の軽微な作業を行うための物品を収納する棚（アイランドサービスユニット、クイックサービスユニット等をいう。）及び外部リーダープリンタについては、アイランド上の給油業務に支障のない場所に固定して設置する場合に限り認めて差し支えない。
- (2) 危険物令第17条第1項第19号に規定する自動車等の出入りする側とは、危険物規則第1条第1号に規定する幅員4メートル以上の道路に接し、かつ、給油を受けるための自動車等が出入りできる側をいう。
- (3) 歩道、ガードレール等により実際に自動車等が出入りするための間口（10メートル以上）がとれない場合は、歩道の切下げ又はガードレールの撤去部分を2箇所以上とし、それぞれ5メートル以上の通路を保有すること。

3. 給油空地（危険物令第17条第1項第2号、危険物規則第24条の14）

- (1) 危険物令第17条第1項第2号に規定する給油空地内には、上屋の柱、アイランド（固定給油設備及び固定注油設備（以下「固定給油設備等」という。）を置くため、地盤面より15センチメートル以上高くした鉄筋コンクリート製の台をいう。以下同じ。）等の給油取扱所の構造上必要なものに限り設けることができる。ただし、自動車等の窓ガラス拭き、灰皿の処理、オイル点検等の軽微な作業を行うための物品を収納する棚（アイランドサービスユニット、クイックサービスユニット等をいう。）及び外部リーダープリンタについては、アイランド上の給油業務に支障のない場所に固定して設置する場合に限り認めて差し支えない。
- (2) 危険物令第17条第1項第19号に規定する自動車等の出入りする側とは、危険物規則第1条第1号に規定する幅員4メートル以上の道路に接し、かつ、給油を受けるための自動車等が出入りできる側をいう。
- (3) 歩道、ガードレール等により実際に自動車等が出入りするための間口（10メートル以上）がとれない場合は、歩道の切下げ又はガードレールの撤去部分を2箇所以上とし、それぞれ5メートル以上の通路を保有すること。

所要の整備

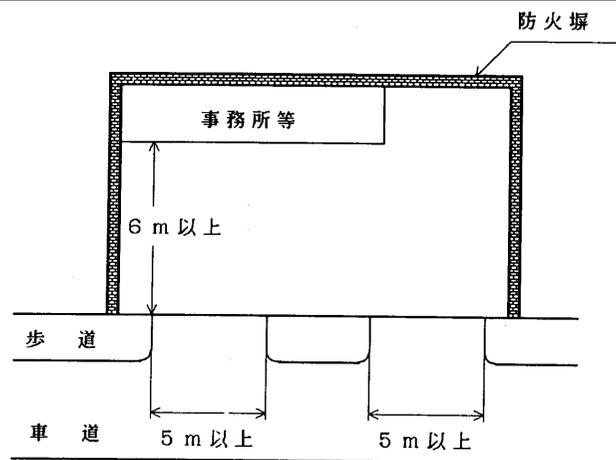


図 2-13-1-2 自動車等が出入りするための間口の例 (認められる例)

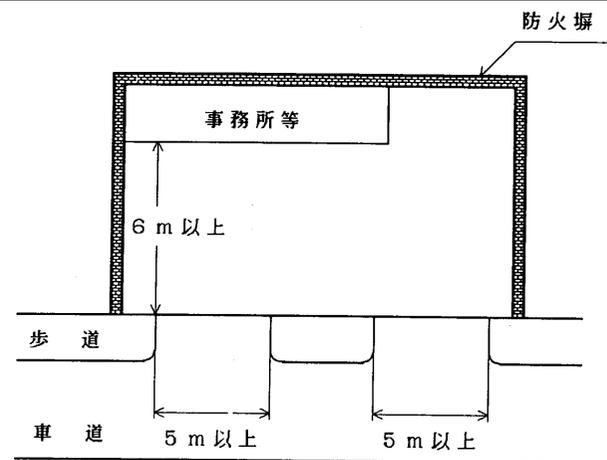
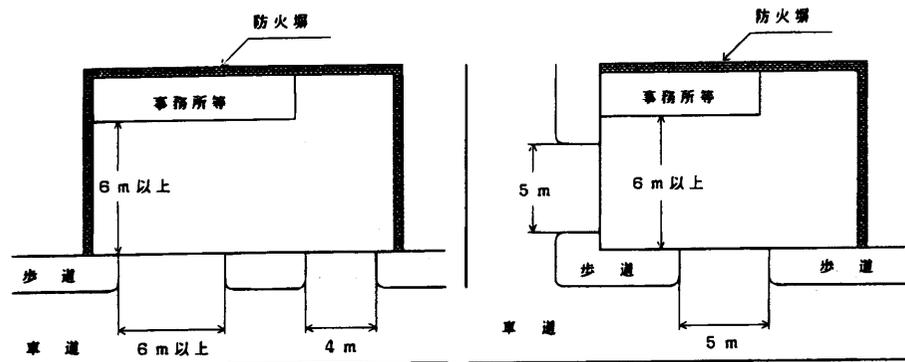


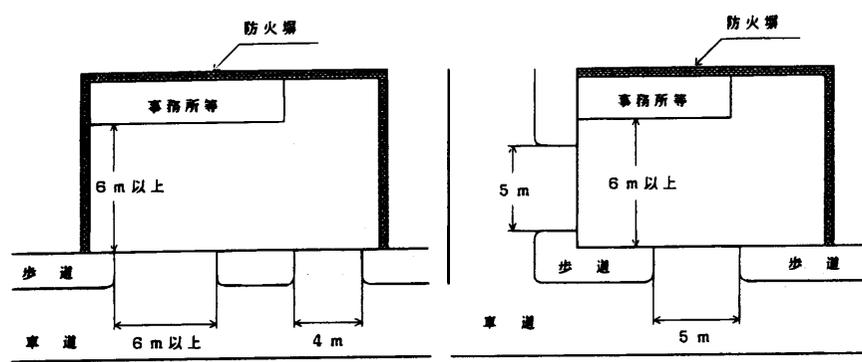
図 2-13-1-2 自動車等が出入りするための間口の例 (認められる例)



(認められない例)

(認められない例)

図 2-13-1-3 自動車等が出入りするための間口の例



(認められない例)

(認められない例)

図 2-13-1-3 自動車等が出入りするための間口の例

(4) 給油空地 (危険物令第 17 条第 1 項第 2 号、危険物規則第 24 条の 14)

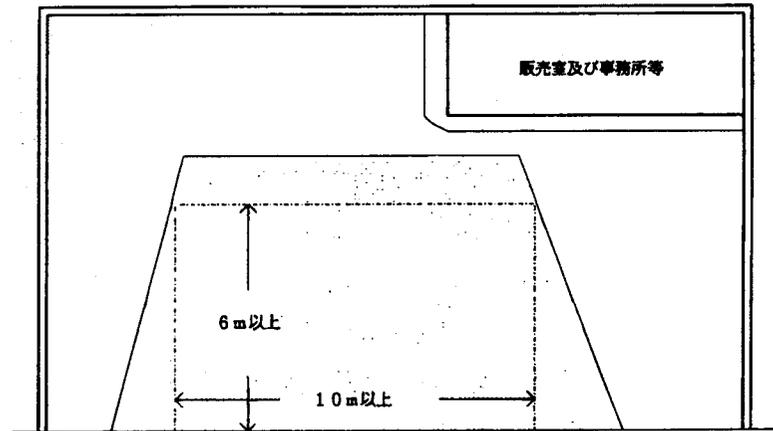
給油空地は、道路境界線に接するとともに、乗り入れ部から固定給油設備に至る車両の動線を含めて、その空地内に間口 10 メートル以上、奥行 6 メートル以上の矩形が固定給油設備を包含し描かれる必要があること。ただし、新たに歩道等の整備により、間口が乗り入れ部と同一として確保できなくなった場合は、「給油取扱所の

(4) 給油空地は、道路境界線に接するとともに、乗り入れ部から固定給油設備に至る車両の動線を含めて、その空地内に間口 10 メートル以上、奥行 6 メートル以上の矩形が固定給油設備を包含し描かれる必要があること。ただし、新たに歩道等の整備により、間口が乗り入れ部と同一として確保できなくなった場合は、「給油取扱所の技術上の基準等に係る運用について」(平成 13 年 11 月 21 日消防令第 127 号) によること。

所要の整備

技術上の基準等に係る運用について」(平成13年11月21日消防危第127号)によること。

なお、ただし書を適用する場合にあっては、給油空地に車両の動線部分を含めることに留意すること。



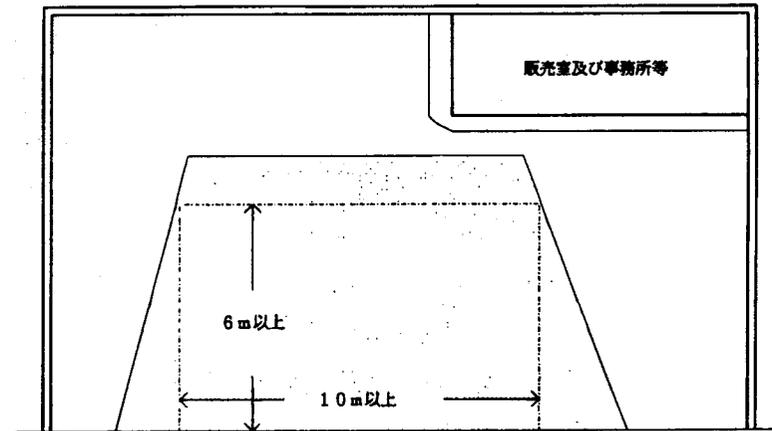
危険第17条第1項に規程する間口10m以上奥行6m以上の空地
給油空地

図2-13-1-4 給油空地の設定例

3 注油空地(危険物令第17条第1項第3号、危険物規則第24条の15)

(1) 灯油若しくは軽油を容器に詰め替え、又は車両に固定された容量4,000リットル以下のタンク(容量2,000リットルを超えるタンクにあっては、その内部を2,000リットル以下ごとに仕切ったものに限る。以下「容量4,000リットル以下の移動タンク貯蔵所」という。)に注入するために必要な空地(以下「注油空地」という。)は、固定給油設備から次表の距離以上離すこと。

なお、ただし書を適用する場合にあっては、給油空地に車両の動線部分を含めることに留意すること。



危険第17条第1項に規程する間口10m以上奥行6m以上の空地
給油空地

図2-13-1-4 給油空地の設定例

4 注油空地(危険物令第17条第1項第3号、危険物規則第24条の15)

(1) 灯油若しくは軽油を容器に詰め替え、又は車両に固定された容量4,000リットル以下のタンク(容量2,000リットルを超えるタンクにあっては、その内部を2,000リットル以下ごとに仕切ったものに限る。以下「容量4,000リットル以下の移動タンク貯蔵所」という。)に注入するために必要な空地(以下「注油空地」という。)は、固定給油設備から次表の距離以上離すこと。

所要の整備

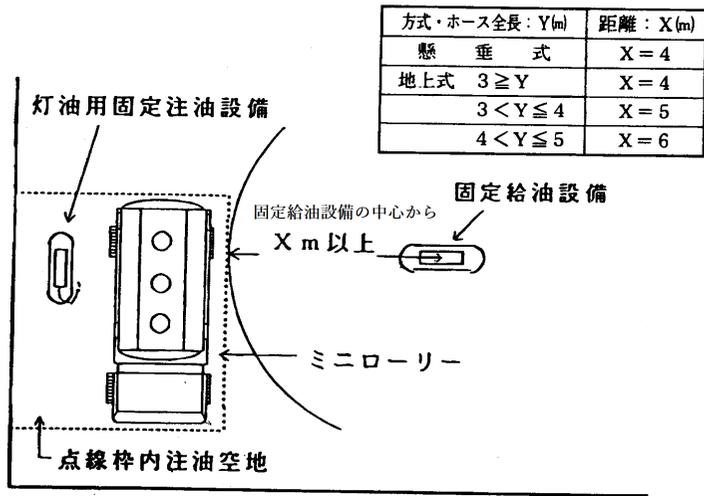


図 2-13-1-5 給油設備と注油設備との離隔距離

- (2) 容器を包含するように保有される必要があり、容器の置き台等を設ける場合は、当該置き台等 **を注油空地に含める** こと。(平成 18 年 5 月 10 日消防危第 113 号)
- (3) 容量 4,000 リットル以下の移動タンク貯蔵所等に注油する場合は、車両がはみださず、かつ、注入作業に必要な十分な広さを有する空地とすること。

4 給油空地及び注油空地の位置、構造 (危険物令第 17 条第 1 項第 4 号、5 号、危険物規則第 24 条の 16、第 24 条の 17)

(1) ~ (5) (省略)

5 危険物の流出防止措置 (危険物令第 17 条第 1 項第 5 号、危険物規則第 24 条の 17)

- (1) ~ (3) (省略)
- (4) 油分離装置を新設又は改修する場合にあつては、**環境創造局環境保全全部水・土壌環境課下水道担当** (電話番号 671-2835) の指導 (下水道法及び市条例による届出) を受けるよう指導する。
 なお、油分離装置の構造例及び収容能力の計算例を図 2-13-1-7 に示す。

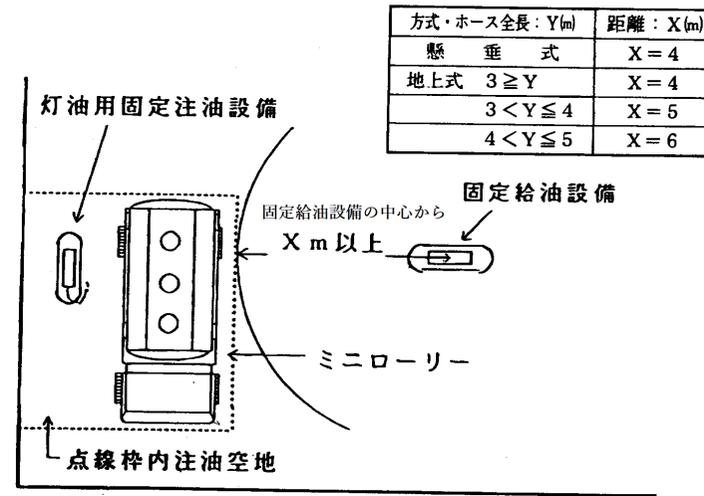


図 2-13-1-5 給油設備と注油設備との離隔距離

- (2) **容器に詰め替える場合は**、容器を包含するように保有される必要があり、容器の置き台等を設ける場合は、当該置き台等 **も包含** すること。(平成 18 年 5 月 10 日消防危第 113 号)
- (3) 容量 4,000 リットル以下の移動タンク貯蔵所等に注油する場合は、車両がはみださず、かつ、注入作業に必要な十分な広さを有する空地とすること。**(平成 18 年 5 月 10 日消防危第 113 号)**

5 給油空地及び注油空地の位置、構造 (危険物令第 17 条第 1 項第 4 号、5 号、危険物規則第 24 条の 16、第 24 条の 17)

(1) ~ (5) (省略)

6 危険物の流出防止措置 (危険物令第 17 条第 1 項第 5 号、危険物規則第 24 条の 17)

- (1) ~ (3) (省略)
- (4) 油分離装置を新設又は改修する場合にあつては、**下水道河川局下水道施設部水質課工場排水担当** (電話番号 671-2835) の指導 (下水道法及び市条例による届出) を受けるよう指導する。
 なお、油分離装置の構造例及び収容能力の計算例を図 2-13-1-7 に示す。

所要の整備

所要の整備

所要の整備

市組織・機構改革に伴う修正

図 2-13-1-7 油分離装置の構造 (省略)
(5)～(9) (省略)

6 専用タンク 及び廃油タンク 等 (危険物令第 17 条第 1 項第 7 号、第 8 号)

(1) 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号に規定する専用タンク、廃油タンク等 (以下「専用タンク等」という。) の埋設位置は、給油取扱所の敷地内で、道路境界線及び敷地境界線から水平距離で 1 メートル以上離れた場所とするよう指導する。

(2) 専用タンク等は、危険物令第 17 条第 1 項第 8 号の規定によるほか、次のとおりとする。

ア 専用タンク等を 2 以上の室に仕切り、それぞれ品名の異なる危険物を貯蔵する場合は、ガソリンと灯油は、相隣接した室に貯蔵しないよう指導する。



(認められる例)



(認められない例)

図 2-13-1-10 分割地下貯蔵タンクによる貯蔵例

イ 専用タンク等の枕には、漏れた油が漏えい検知装置等で有効に検知できるような開口 (連通管) を設けるよう指導する。

なお、円形の連通管を設ける場合は、直径 100 ミリメートル以上とすること。

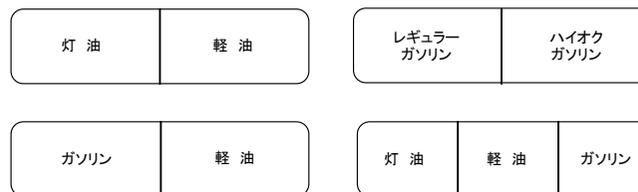
図 2-13-1-7 油分離装置の構造 (省略)
(5)～(9) (省略)

7 専用タンク等 及び簡易タンク (危険物令第 17 条第 1 項第 7 号、第 8 号)

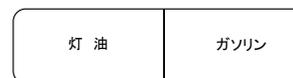
(1) 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号に規定する専用タンク、廃油タンク等 (以下「専用タンク等」という。) の埋設位置は、給油取扱所の敷地内で、道路境界線及び敷地境界線から水平距離で 1 メートル以上離れた場所とするよう指導する。

(2) 専用タンク等は、危険物令第 17 条第 1 項第 8 号の規定によるほか、次のとおりとする。

ア 専用タンク等を 2 以上の室に仕切り、それぞれ品名の異なる危険物を貯蔵する場合は、ガソリンと灯油は、相隣接した室に貯蔵しないよう指導する。



(認められる例)



(認められない例)

図 2-13-1-10 分割地下貯蔵タンクによる貯蔵例

所要の整備

第 2 章第 9 節
に記載位置を
変更

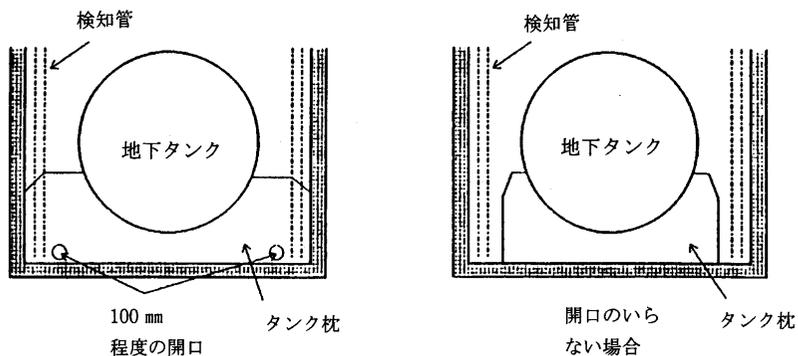


図 2-13-1-11 タンク枕に設ける開口（連通管）の設置例

- ウ 屋外給油取扱所であっても、専用タンク等に危険物の過剰な注入を自動的に防止する設備を設けるか、又は専用タンク等の注入口直近に危険物の過剰な注入を防止するための警報装置を設けるよう指導する。
- エ 引火点 40 度以上の危険物を貯蔵する専用タンク等に設ける通気管の先端についても、敷地境界線から 1.5 メートル以上離すよう指導する。
- オ 引火点 40 度未満の危険物を取り扱う専用タンク等の通気管には、第 2「屋内給油取扱所」8 (4) 及び(5)の例により移動貯蔵タンクから危険物を注入するときに放出される可燃性の蒸気を回収する設備を設けるよう指導する。
- カ 注入口の位置は、荷卸しが予想される移動タンク貯蔵所のけん引車を含む全ての部分が敷地内に収まる位置となるよう指導する。
- キ 遠方注入口方式のものは、注入口を箱等の中に収納させ、灯油と他の危険物との注入口の間には、仕切りを入れるよう指導する。
- ク 一の専用タンク等には、同時に 2 以上の荷役を行わないよう指導する。
- ケ 廃油タンクに注入用受け口、配管を設ける場合は、整備室等に設けるとともに、閉止弁等を設置するよう指導する。
- コ 専用タンク等に設ける遠方注入口の直近には、油量液面計を設けること。

図 2-13-1-11 (削除)

- イ 屋外給油取扱所であっても、専用タンク等に危険物の過剰な注入を自動的に防止する設備を設けるか、又は専用タンク等の注入口直近に危険物の過剰な注入を防止するための警報装置を設けるよう指導する。
- ウ 引火点 40 度以上の危険物を貯蔵する専用タンク等に設ける通気管の先端についても、敷地境界線から 1.5 メートル以上離すよう指導する。
- エ 引火点 40 度未満の危険物を取り扱う専用タンク等の通気管には、第 2「屋内給油取扱所」8 (4) 及び(5)の例により移動貯蔵タンクから危険物を注入するときに放出される可燃性の蒸気を回収する設備を設けるよう指導する。
- オ 注入口の位置は、荷卸しが予想される移動タンク貯蔵所のけん引車を含む全ての部分が敷地内に収まる位置となるよう指導する。
- カ 遠方注入口方式のものは、注入口を箱等の中に収納させ、灯油と他の危険物との注入口の間には、仕切りを入れるよう指導する。
- キ 一の専用タンク等には、同時に 2 以上の荷役を行わないよう指導する。
- ク 廃油タンクに注入用受け口、配管を設ける場合は、整備室等に設けるとともに、閉止弁等を設置するよう指導する。
- ケ 専用タンク等に設ける遠方注入口の直近には、油量液面計を設けること。

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

所要の整備

<p><u>サ</u> 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号及び第 8 号に適合する屋外給油取扱所の簡易タンクは、固定注油設備に接続しても差し支えない。(平成 21 年 11 月 17 日消防危第 204 号)</p> <p><u>シ</u> 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号に規定する「廃油タンク等」とは、廃油タンク及び給湯用ボイラー、冷暖房ボイラー、自家発電設備等に直接接続するタンクをいう。また、給湯用ボイラー又は冷暖房ボイラーへの灯油の供給は、専用タンクから行うことができる。(昭和 62 年 4 月 28 日消防危第 38 号)</p> <p>7 固定給油設備等の構造(危険物令第 17 条第 1 項第 10 号、第 11 号、第 12 号、第 13 号、第 14 号、第 15 号、危険物規則第 25 条の 2、第 25 条の 2 の 2、第 25 条の 3)</p> <p>(1) (省略)</p> <p>(2) ア～オ (省略)</p> <p><u>(3) 吐出量に係る事項</u></p> <p><u>ア 固定給油設備の最大吐出量は、ガソリン又は第 4 類の危険物のうちメタノール若しくはこれを含有するものについては毎分 50 リットル以下とし、軽油については毎分 180 リットル以下とすること。</u></p> <p><u>また、固定注油設備の最大吐出量は、毎分 60 リットル以下とすること。</u></p> <p><u>ただし、灯油若しくは軽油を車両に固定されたタンクに注入する用に供する固定注油設備にあっては、その最大吐出量を毎分 180 リットル以下とすることができる。</u></p> <p><u>イ アただし書の固定注油設備は、次に掲げる構造とすること。</u></p> <p>(ア) タンク容量に相当する液面以上の危険物の過剰な注入を自動的に停止できる構造のもの、1 回の連続した注入量が設定量(タンク容量から注入開始時における危険物の残量を減じた量以下の量であって 2,000 リットルを超えない量であること。)以下に制限されるもの等注入時の危険物のあふれを防止する機能を有すること。(平成 5 年 9 月 2 日消防危第 68 号)</p> <p>(イ) <u>固定注油設備の注油ホースの直近に専ら車両に固定されたタンクに注入する用に供するものである旨が表示されていること。</u>(平成 5 年 9 月 2 日消防危第 68 号)</p>	<p><u>コ</u> 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号及び第 8 号に適合する屋外給油取扱所の簡易タンクは、固定注油設備に接続しても差し支えない。(平成 21 年 11 月 17 日消防危第 204 号)</p> <p><u>サ</u> 危険物令第 17 条第 1 項第 7 号に規定する「廃油タンク等」とは、廃油タンク及び給湯用ボイラー、冷暖房ボイラー、自家発電設備等に直接接続するタンクをいう。また、給湯用ボイラー又は冷暖房ボイラーへの灯油の供給は、専用タンクから行うことができる。(昭和 62 年 4 月 28 日消防危第 38 号)</p> <p>8 固定給油設備等の構造(危険物令第 17 条第 1 項第 10 号、第 11 号、第 12 号、第 13 号、第 14 号、第 15 号、危険物規則第 25 条の 2、第 25 条の 2 の 2、第 25 条の 3)</p> <p>(1) (省略)</p> <p>(2) ア～オ (省略)</p> <p><u>カ 固定注油設備等は、次に掲げる構造とすること。</u></p> <p>(ア) <u>危険物の過剰な注入を自動的に防止できる構造としては、</u>タンク容量に相当する液面以上の危険物の過剰な注入を自動的に停止できる構造、1 回の連続した注入量が設定量(タンク容量から注入開始時における危険物の残量を減じた量以下の量であって 2,000 リットルを超えない量であること。)以下に制限される構造等注入時の危険物の漏れを防止する機能を有する<u>構造がある</u>こと。(平成 5 年 9 月 2 日消防危第 68 号)</p> <p>(イ) <u>車両に固定されたタンクにその上部から注入する用のみ供する注油ホースの直近には、専ら車両に固定されたタンクに注入する用に供するものである旨の表示がなされていること。</u>(平成 5 年 9 月 2 日消防危第 68 号)</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>法令内容のため削除</p> <p>消防庁通知の文言に修正</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------

ウ 顧客用固定給油設備等の1回の給油量及び給油時間等の上限を、顧客の1回当たりの給油量及び給油時間等を勘案し、適正な数値に設定すること。この場合、顧客用固定給油設備の設定値は、大型トラック専用の給油取扱所等1回の給油で大量の燃料を給油することが想定されるものを除いて、給油量についてはガソリンの場合100リットル、軽油の場合200リットルを、給油時間については4分を標準とすること。

また、顧客用固定注油設備の設定値は、注油量については100リットル、注油時間については6分を標準とすること。(平成10年3月13日消防危第25号(改正平成24年5月23日消防危第138号))

(4) 外装材料に係る事項(平成5年9月2日消防危第68号)

危険物規則第25条の2第4号に規定する「難燃性を有する材料」とは、不燃材料及び建築基準法施行令第1条第5号に規定する準不燃材料並びにJIS K 7201「酸素指数法による高分子材料の燃焼試験方法」により試験を行い、酸素指数が26以上となる高分子材料をいう。酸素指数については、表2-13-1-3及び表2-13-1-4(昭和54年10月2日消防予第184号)参照。ただし、油量表示部等機能上透視性を必要とする最小限のものについては、この限りではない。

表2-13-1-3 酸素指数26未満のもの

アクリルニトリル・スチレン共重合樹脂(AS)
アクリルニトリル・ブタジエン・スチレン共重合樹脂(ABS)
エポキシ樹脂(EP)…接着剤以外のもの
不飽和ポリエステル樹脂(UP)
ポリアセタール(POA)
ポリウルタン(PUR)
ポリエチレン(PE)
ポリスチレン(PS)
ポリビニルアルコール(PVAL)…粉状(原料等)
ポリプロピレン(PP)
ポリメタクリル酸メチル(PMMA、メタクリル樹脂)

(3) 外装材料に係る事項(平成5年9月2日消防危第68号)

危険物規則第25条の2第4号に規定する「難燃性を有する材料」とは、不燃材料及び建築基準法施行令第1条第5号に規定する準不燃材料並びにJIS K 7201「酸素指数法による高分子材料の燃焼試験方法」により試験を行い、酸素指数が26以上となる高分子材料をいう。酸素指数については、表2-13-1-3及び表2-13-1-4(昭和54年10月2日消防予第184号)参照。ただし、油量表示部等機能上透視性を必要とする最小限のものについては、この限りではない。

表2-13-1-3 酸素指数26未満のもの

アクリルニトリル・スチレン共重合樹脂(AS)
アクリルニトリル・ブタジエン・スチレン共重合樹脂(ABS)
エポキシ樹脂(EP)…接着剤以外のもの
不飽和ポリエステル樹脂(UP)
ポリアセタール(POA)
ポリウルタン(PUR)
ポリエチレン(PE)
ポリスチレン(PS)
ポリビニルアルコール(PVAL)…粉状(原料等)
ポリプロピレン(PP)
ポリメタクリル酸メチル(PMMA、メタクリル樹脂)

同一内容が記載されているため削除

所要の整備

表 2-13-1-4 酸素指数26以上のもの

フェノール樹脂 (PF)
 ふっ素樹脂 (PFE)
 ポリアミド (PA)
 ポリ塩化ビニリデン (PVDC、塩化ビニリデン樹脂)
 ポリ塩化ビニル (PVC、塩化ビニル樹脂)
 ユリア樹脂 (UF)
 けい素樹脂 (SI)
 ポリカーボネート (PC)
 メラミン樹脂 (MF)
 アルキド樹脂 (ALK) …液状

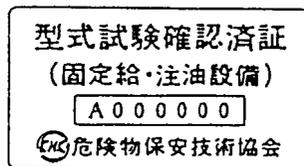
(5) 表示に係る基準

固定給油設備等には、次の表示をすること。

- ア 危険物規則第25条の3第1号に規定する「直近の位置」とは、固定給油設備等の本体（懸垂式のものにあつては、給油ホース設備の本体のケース）又は給油ホース等のノズルの部分等をいう。
- イ 危険物規則第25条の3第2号に規定する「取り扱う危険物の品名」とは、ガソリン、軽油、灯油等の油種名をいうが、レギュラー、ハイオク等の商品名によることでも差し支えない。（昭和62年4月28日消防危第38号）

(6) 型式試験確認済証に係る事項

危険物保安技術協会の型式試験確認済証を貼付した固定給油設備等及び油中ポンプ設備は、政令等に定める技術基準に適合していると認められる。



- 備考
1. 型式試験確認済証の材質はテトロンとし、厚さ0.025mm、縦24mm、横45mmの大きさで表面ラミネート加工とする。
 2. 型式試験確認済証は、地は黒色とし、文字、マーク及び試験確認に係る整理番号用枠内は消褐色とする。ただし、整理番号は黒色とする。
 3. 整理番号の前のA、B、C、D、E及びFのアルファベツ

表 2-13-1-4 酸素指数26以上のもの

フェノール樹脂 (PF)
 ふっ素樹脂 (PFE)
 ポリアミド (PA)
 ポリ塩化ビニリデン (PVDC、塩化ビニリデン樹脂)
 ポリ塩化ビニル (PVC、塩化ビニル樹脂)
 ユリア樹脂 (UF)
 けい素樹脂 (SI)
 ポリカーボネート (PC)
 メラミン樹脂 (MF)
 アルキド樹脂 (ALK) …液状

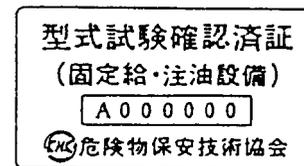
(4) 表示に係る基準

固定給油設備等には、次の表示をすること。

- ア 危険物規則第25条の3第1号に規定する「直近の位置」とは、固定給油設備等の本体（懸垂式のものにあつては、給油ホース設備の本体のケース）又は給油ホース等のノズルの部分等をいう。
- イ 危険物規則第25条の3第2号に規定する「取り扱う危険物の品名」とは、ガソリン、軽油、灯油等の油種名をいうが、レギュラー、ハイオク等の商品名によることでも差し支えない。（昭和62年4月28日消防危第38号）

(5) 型式試験確認済証に係る事項

危険物保安技術協会の型式試験確認済証を貼付した固定給油設備等及び油中ポンプ設備は、政令等に定める技術基準に適合していると認められる。



- 備考
1. 型式試験確認済証の材質はテトロンとし、厚さ0.025mm、縦24mm、横45mmの大きさで表面ラミネート加工とする。
 2. 型式試験確認済証は、地は黒色とし、文字、マーク及び試験確認に係る整理番号用枠内は消褐色とする。ただし、整理番号は黒色とする。
 3. 整理番号の前のA、B、C、D、E及びFのアルファベツ

所要の整備

所要の整備

ト記号は固定給油設備等の最大吐出量による区分を示す。

図 2-13-1-17 型式試験確認済証 (参考)

表 2-13-1-5 固定給油設備等の最大吐出量による区分

区分	内 容
A	最大吐出量が50ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
B	最大吐出量が50ℓ/分を超え60ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
C	最大吐出量が60ℓ/分を超え180ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
D	最大吐出量の異なるA及びBを2以上組み込んだ固定給油設備等。
E	最大吐出量の異なるA及びCを2以上組み込んだ固定給油設備等。
F	最大吐出量の異なるB及びCを2以上組み込んだ固定給油設備等。

(7) 固定給油設備等のポンプ機器として油中ポンプ機器を用いる場合の措置

ア 地震及び車両の衝突により、接続するホース機器が転倒した時に、ポンプ機器を停止する措置として、ホース機器に設けた姿勢検知装置の傾き検知信号によりポンプ機器の回路が遮断するような方法が講じられていること。

イ ホース機器には危険物の供給を停止する措置として、配管に設けられた弁が姿勢検知装置の信号により閉鎖するような方法が講じられていること。

ウ ホース機器が給油取扱所の建築物の屋根に固定されているなど転倒する恐れのないものである場合には、ア及びイの措置は必要ない。

(8) 固定給油設備等に火花を発生おそれのある機械器具を設けるものに係る事項

危険物規則第25条の2第5号に規定される「可燃性蒸気が流入しない構造」については、「可燃性蒸気流入防止構造等の基準について」(平成13年3月30日消防危第43号)によること。

(9) 懸垂式固定給油設備等に設けることとされている危険物令第17条第1項第15号に規定する「危険物の移送を緊急に

ト記号は固定給油設備等の最大吐出量による区分を示す。

図 2-13-1-17 型式試験確認済証 (参考)

表 2-13-1-5 固定給油設備等の最大吐出量による区分

区分	内 容
A	最大吐出量が50ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
B	最大吐出量が50ℓ/分を超え60ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
C	最大吐出量が60ℓ/分を超え180ℓ/分以下の固定給油設備等。(最大吐出量の同じものを2以上組み込んだ固定給油設備等を含む。)
D	最大吐出量の異なるA及びBを2以上組み込んだ固定給油設備等。
E	最大吐出量の異なるA及びCを2以上組み込んだ固定給油設備等。
F	最大吐出量の異なるB及びCを2以上組み込んだ固定給油設備等。

(6) 固定給油設備等のポンプ機器として油中ポンプ機器を用いる場合の措置

ア 地震及び車両の衝突により、接続するホース機器が転倒した時に、ポンプ機器を停止する措置として、ホース機器に設けた姿勢検知装置の傾き検知信号によりポンプ機器の回路が遮断するような方法が講じられていること。

イ ホース機器には危険物の供給を停止する措置として、配管に設けられた弁が姿勢検知装置の信号により閉鎖するような方法が講じられていること。

ウ ホース機器が給油取扱所の建築物の屋根に固定されているなど転倒する恐れのないものである場合には、ア及びイの措置は必要ない。

(7) 固定給油設備等に火花を発生おそれのある機械器具を設けるものに係る事項

危険物規則第25条の2第5号に規定される「可燃性蒸気が流入しない構造」については、「可燃性蒸気流入防止構造等の基準について」(平成13年3月30日消防危第43号)によること。

(8) 懸垂式固定給油設備等に設けることとされている危険物令第17条第1項第15号に規定する「危険物の移送を緊急に止

所要の整備

所要の整備

所要の整備

<p>止めることができる装置」の操作部を設ける場所は、当該固定給油設備等の設置場所付近の事務所等の外壁等見やすい位置とすること。(平成元年3月3日消防危第15号)</p> <p><u>8</u> 固定給油設備等の位置(危険物令第17条第1項第12号、第13号、第14号) (1)～(7) (省略)</p> <p><u>9</u> 建築物の用途、構造等(危険物令第17条第1項第16号から第20号、危険物規則第25条の4、昭和62年4月28日消防危第38号、令和2年3月27日消防危第88号、<u>令和3年3月30日消防危第50号</u>) (1) 危険物規則第25条の4第1項に掲げる用途に供する建築物(以下「給油取扱所の建築物」という。)については、同項の規定によるほか、次のとおりとする。 ア 主たる用途に機能的に従属するとみなされる部分(廊下、洗面所、倉庫、会議室、更衣室、休憩室、応接室等)は、給油取扱所の建築物に含むこと。 イ ポンプ室、油庫及び給油又は灯油若しくは軽油の詰替えの作業場と一体の建築物内に設けられた自動車等の点検・整備を行う作業場(壁等で区画されていないもの)は、危険物規則第25条の4第1項第1号の「給油又は灯油若しくは軽油の詰替えの作業場」に含むこと。 <u>ウ 給油取扱所の建築物以外の用途(危険物規則第25条の4第1項第1号の2及び第5号の「事務所」以外の事務所、長距離トラック運転手用の簡易宿泊所、給油取扱所の従業員の寄宿舍等)は、給油取扱所の建築物としては認められない。</u> <u>エ 危険物規則第25条の4第1項第2号の「給油、灯油若しくは軽油の詰替え又は自動車等の点検・整備若しくは洗浄のために給</u></p>	<p>めることができる装置」の操作部を設ける場所は、当該固定給油設備等の設置場所付近の事務所等の外壁等見やすい位置とすること。(平成元年3月3日消防危第15号)</p> <p><u>8の2 固定給油設備から軽油を容器に詰め替える作業について</u> <u>固定給油設備から軽油を容器に詰め替える作業については、一日あたり指定数量未滿とする必要があることに留意すること。</u></p> <p><u>9</u> 固定給油設備等の位置(危険物令第17条第1項第12号、第13号、第14号) (1)～(7) (省略)</p> <p><u>10</u> 建築物の用途、構造等(危険物令第17条第1項第16号から第20号、危険物規則第25条の4、昭和62年4月28日消防危第38号、令和2年3月27日消防危第88号) (1) 危険物規則第25条の4第1項に掲げる用途に供する建築物(以下「給油取扱所の建築物」という。)については、同項の規定によるほか、次のとおりとする。 ア 主たる用途に機能的に従属するとみなされる部分(廊下、洗面所、倉庫、会議室、更衣室、休憩室、応接室等)は、給油取扱所の建築物に含むこと。 イ ポンプ室、油庫及び給油又は灯油若しくは軽油の詰替えの作業場と一体の建築物内に設けられた自動車等の点検・整備を行う作業場(壁等で区画されていないもの)は、危険物規則第25条の4第1項第1号の「給油又は灯油若しくは軽油の詰替えの作業場」に含むこと。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

<p><u>油取扱所</u>に出入りする者を対象とした店舗、飲食店又は展示場には、<u>キャバレー、ナイトクラブ、パチンコ店、ゲームセンター等風俗営業に係るもの及び理容室、美容室等は、主としてこれらの者以外の者を対象とすることが明らかであるので、当該用途からは除かれる。ただし、実態上「給油、灯油若しくは軽油の詰替え又は自動車等の点検・整備若しくは洗浄のために給油取扱所に出入りする者を対象とするもの」と認められる理容室等にあつては、この限りでない。</u></p> <p><u>また、当該用途に供する部分においては、物品の販売若しくは展示又は飲食物の提供だけではなく、物品の貸付のほか、行為の媒介、代理、取り次ぎ等の営業ができる。</u></p> <p><u>なお、当該用途に供する部分であると認められる限り、当該用途が対象として想定している者以外の者がこの部分にたまたま出入りすることは、差し支えない。</u></p> <p>オ コンプレッサー室は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号の「給油又は灯油若しくは軽油の詰替えのための作業場」として取り扱うこと。</p> <p>カ 危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 5 号の「給油取扱所の所有者、管理者若しくは占有者が居住する住居又はこれらの者に係る他の給油取扱所の業務を行うための事務所」については、他の用途に供する部分との間に水平及び垂直区画を設けるとともに、出入口は給油取扱所の敷地外から出入りできる位置に設けること。</p> <p>キ 給油取扱所には、給油取扱所の建築物以外の工作物（立体駐車場、ラック式ドラム缶置き場、大規模な広告物等）の設置は認められない。（昭和 62 年 4 月 28 日消防危第 38 号）</p> <p>ク 自動車の部分的な補修を目的とする塗装業務は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 3 号の「自動車等の点検・整備を行う作業場」で行う業務に該当する。（平成 14 年 2 月 26 日消防危第 29 号）この場合、換気設備については(4)ア(エ)の例に、電気設備については 10 の例によること。</p> <p>ケ 自動車の板金業務は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 3 号の「自動車等の点検・整備を行う作業場」で行う業務に該当する。（平成 31 年 4 月 19 日消防危第 81 号）</p> <p>コ 一の給油取扱所内に、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号の 2 に定める用途に供する建築物（給油取扱所の業務を行うための</p>	<p>ウ コンプレッサー室は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号の「給油又は灯油若しくは軽油の詰替えのための作業場」として取り扱うこと。</p> <p>エ 危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 5 号の「給油取扱所の所有者、管理者若しくは占有者が居住する住居又はこれらの者に係る他の給油取扱所の業務を行うための事務所」については、他の用途に供する部分との間に水平及び垂直区画を設けるとともに、出入口は給油取扱所の敷地外から出入りできる位置に設けること。</p> <p>オ 給油取扱所には、給油取扱所の建築物以外の工作物（立体駐車場、ラック式ドラム缶置き場、大規模な広告物等）の設置は認められない。（昭和 62 年 4 月 28 日消防危第 38 号）</p> <p>カ 自動車の部分的な補修を目的とする塗装業務は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 3 号の「自動車等の点検・整備を行う作業場」で行う業務に該当する。（平成 14 年 2 月 26 日消防危第 29 号）この場合、換気設備については(4)ア(エ)の例に、電気設備については 10 の例によること。</p> <p>キ 自動車の板金業務は、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 3 号の「自動車等の点検・整備を行う作業場」で行う業務に該当する。（平成 31 年 4 月 19 日消防危第 81 号）</p> <p>ク 一の給油取扱所内に、危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号の</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------

<p>事務所) のほかに、同項各号の用途に供される建築物を設けることとして差し支えない。この場合において、全ての建築物の床面積の合計は、同条第 2 項の規定に従い、300 平方メートルを超えないものとする。(平成 31 年 4 月 19 日消防危第 81 号)</p> <p>(2) 危険物規則第 25 条の 4 第 2 項に規定する「面積 (300 平方メートル以内)」については、次のとおりとする。</p> <p>ア 面積の算定については、給油取扱所の係員以外の者が出入りする建築物の部分(自動車等の点検・整備を行う作業場については、係員同伴での顧客の作業場への一時的な出入りを除く。)で、<u>①給油取扱所の業務を行うための事務所、②給油、灯油若しくは軽油の詰替え又は自動車等の点検・整備若しくは洗浄のために給油取扱所へ出入りする者を対象とした店舗、飲食店又は展示場、③自動車等の点検・整備を行う作業場</u>の各用途に供する床又は壁に区画された部分のうち、給油取扱所の係員のみが出入りする床又は壁に区画された部分(例えば更衣室、休憩室、倉庫)を除いた面積とすること。</p> <p>イ 給油取扱所の建築物の配置、出入口の位置(建築物の 2 階を危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 5 号の用途に供する場合を除く。)等については、危険物規則第 25 条の 4 第 2 項の面積 (300 平方メートル以内) に適合する限り、特に制限はない。</p> <p>ウ 既設の給油取扱所の建築物のうち、アの算定面積の合計が 300 平方メートルを超えているものについては、昭和 62 年 4 月 30 日における危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号から第 3 号までに掲げる用途に係る部分の床面積の合計を超えて増改築等を行ってはならない。</p> <p>(3) 給油取扱所の建築物の構造等については、次によること。</p> <p>ア 給油空地及び注油空地に面する部分(危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 3 号及び第 4 号の用途に供する部分を除く。)の出入口</p>	<p>2 に定める用途に供する建築物 (給油取扱所の業務を行うための事務所) のほかに、同項各号の用途に供される建築物を設けることとして差し支えない。この場合において、全ての建築物の床面積の合計は、同条第 2 項の規定に従い、300 平方メートルを超えないものとする。(平成 31 年 4 月 19 日消防危第 81 号)</p> <p><u>ケ 危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 6 号に掲げる用途については、令第 1 条の 2 第 2 項後段の規定により同号に掲げるいずれかの用途に機能的に従属すると認められるものを含むものであること。</u></p> <p><u>なお、令第 1 条の 2 第 2 項後段の規定による機能的な従属に係る運用及び収容人員の算定については、「消防用設備等設置規制事務審査基準」第 2 章 第 2 節によること。</u></p> <p>(2) 危険物規則第 25 条の 4 第 2 項に規定する「面積 (300 平方メートル以内)」については、次のとおりとする。</p> <p>ア 面積の算定については、給油取扱所の係員以外の者が出入りする建築物の部分(自動車等の点検・整備を行う作業場については、係員同伴での顧客の作業場への一時的な出入りを除く。)で、<u>危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 2 号、第 3 号及び第 6 号</u>の各用途に供する床又は壁に区画された部分のうち、給油取扱所の係員のみが出入りする床又は壁に区画された部分(例えば更衣室、休憩室、倉庫)を除いた面積とすること。</p> <p>イ 給油取扱所の建築物の配置、出入口の位置(建築物の 2 階を危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 5 号の用途に供する場合を除く。)等については、危険物規則第 25 条の 4 第 2 項の面積 (300 平方メートル以内) に適合する限り、特に制限はない。</p> <p>ウ 既設の給油取扱所の建築物のうち、アの算定面積の合計が 300 平方メートルを超えているものについては、昭和 62 年 4 月 30 日における危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号から第 3 号までに掲げる用途に係る部分の床面積の合計を超えて増改築等を行ってはならない。<u>(昭和 62 年 4 月 20 日自治省令第 16 号関係)</u></p> <p>(3) 給油取扱所の建築物の構造等については、次によること。</p> <p>ア 給油空地及び注油空地に面する部分(危険物規則第 25 条の 4</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------

<p>以外の開口部に設ける防火設備は、F I X（防火ダンパー等を設ける排煙口を除く。）とすること。</p> <p>イ 給油取扱所の建築物の外壁を防火塀と兼用する場合において、当該外壁部分については、次によること。</p> <p>(ア) 窓を設ける場合は、F I Xの防火設備とすること。ただし、設計地盤面から高さ2メートル以上の部分に開口部を設ける場合は、この限りではない。</p> <p>(イ) 敷地外へ直接通じる連絡用(避難用)出入口を設ける場合は、常時閉鎖式の特定防火設備を設けること。</p> <p>(ウ) 火を使用する設備のための<u>吸</u>気口を設ける場合にあつては、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」7の例によるほか、防火ダンパー等を設けること。</p> <p>(省略)</p> <p>図2-13-1-20 給油取扱所の建築物の構造</p>	<p>第1項第3号及び第4号の用途に供する部分を除く。)の出入口以外の開口部に設ける防火設備は、F I X（防火ダンパー等を設ける排煙口を除く。）とすること。</p> <p>イ 給油取扱所の建築物の外壁を防火塀と兼用する場合において、当該外壁部分については、次によること。</p> <p>(ア) 窓を設ける場合は、F I Xの防火設備とすること。ただし、設計地盤面から高さ2メートル以上の部分に開口部を設ける場合は、この限りではない。</p> <p>(イ) 敷地外へ直接通じる連絡用(避難用)出入口を設ける場合は、常時閉鎖式の特定防火設備を設けること。</p> <p>(ウ) 火を使用する設備のための<u>給</u>気口を設ける場合にあつては、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」7の例によるほか、防火ダンパー等を設けること。</p> <p>(省略)</p> <p>図2-13-1-20 給油取扱所の建築物の構造</p>	<p>所要の整備</p>
<p>ウ 建築物の壁のうち、次の(ア)又は(イ)の間仕切り壁については、準不燃材料又は難燃材料を使用することができる。(平成9年3月26日消防危第31号)</p> <p>(ア) 危険物を取り扱う部分と耐火構造若しくは不燃材料の壁又は自動閉鎖の防火設備により区画された危険物を取り扱わない部分の間仕切り壁</p> <p>(イ) 危険物を取り扱わない建築物に設ける間仕切り壁</p> <p>エ 火を使用する設備の位置及び構造については、<u>条例第3章の基準</u>によること。</p> <p>オ～コ (省略)</p> <p>(4) 危険物令第17条第1項第20号に規定する「ポンプ室等」の構造は、同号の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>なお、危険物令第17条第1項第20号に規定する「ポンプ室等」には油庫のほか危険物を取り扱う整備室等が含まれる。(平成元年3月3日消防危第15号)</p> <p>ア ポンプ室</p> <p>(ア) ポンプ室の床、貯留設備は、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の基準</u>」5の例によること。</p> <p>(イ) 採光及び照明設備については、第4節「製造所の<u>位置、構造</u></p>	<p>ウ <u>給油取扱所</u>の建築物の壁のうち、次の(ア)又は(イ)の間仕切り壁については、準不燃材料又は難燃材料を使用することができる。(平成9年3月26日消防危第31号)</p> <p>(ア) 危険物を取り扱う部分と耐火構造若しくは不燃材料の壁又は自動閉鎖の防火設備により区画された危険物を取り扱わない部分の間仕切り壁</p> <p>(イ) 危険物を取り扱わない建築物に設ける間仕切り壁</p> <p>エ 火を使用する設備の位置及び構造については、<u>第19節「製造所等における火を使用する設備等の規制について」</u>によること。</p> <p>オ～コ (省略)</p> <p>(4) 危険物令第17条第1項第20号に規定する「ポンプ室等」の構造は、同号の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>なお、危険物令第17条第1項第20号に規定する「ポンプ室等」には油庫のほか危険物を取り扱う整備室等が含まれる。(平成元年3月3日消防危第15号)</p> <p>ア ポンプ室</p> <p>(ア) ポンプ室の床、貯留設備は、第4節「製造所の基準」5の例によること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

及び設備の技術上の基準」6の例によること。

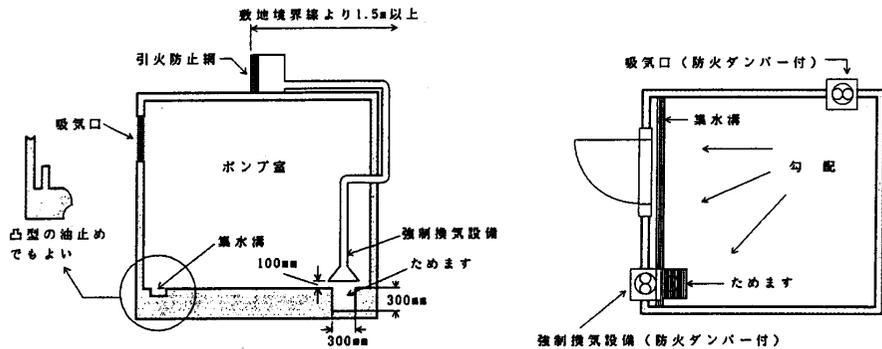
(ウ) ポンプ室に設ける吸気口は、給油取扱所の建築物の壁を防火塀と兼用する部分以外の部分に設けるものとし、防火ダンパー等を設けること。

なお、出入口の防火戸に吸気口を設けても差し支えない。

(エ) その他換気の設備及び可燃性の蒸気を屋外に排出する設備については、第4節「製造所の位置、構造及び設備の技術上の基準」7の例によること。

(オ) ポンプ設備周囲には、有効に点検できる空間（0.5メートル程度）を保有するよう指導する。

(カ) ポンプ室の壁を防火塀と兼用する部分に危険物配管を貫通させることは、給油取扱所の敷地外に危険物配管が通ることとなるので、認められない。



立面図

平面図

図2-13-1-23 ポンプ室の構造

(イ) 採光及び照明設備については、第4節「製造所の基準」6の例によること。

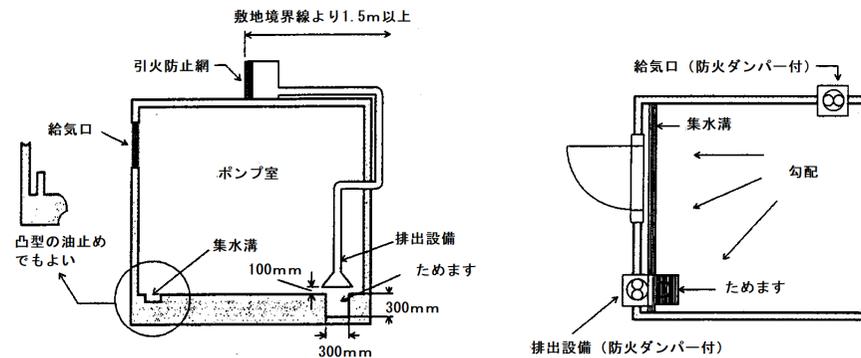
(ウ) ポンプ室に設ける給気口は、給油取扱所の建築物の壁を防火塀と兼用する部分以外の部分に設けるものとし、防火ダンパー等を設けること。

なお、出入口の防火戸に給気口を設けても差し支えない。

(エ) 換気の設備については、第4節「製造所の基準」7(1)換気設備の例によること。また、可燃性の蒸気を屋外に排出する設備については、第4節7(2)排出設備の例によること。

(オ) ポンプ設備周囲には、有効に点検できる空間（0.5メートル程度）を保有するよう指導する。

(カ) ポンプ室の壁を防火塀と兼用する部分に危険物配管を貫通させることは、給油取扱所の敷地外に危険物配管が通ることとなるので、認められない。



立面図

平面図

図2-13-1-23 ポンプ室の構造

所要の整備

第4節の記載整理に伴う修正

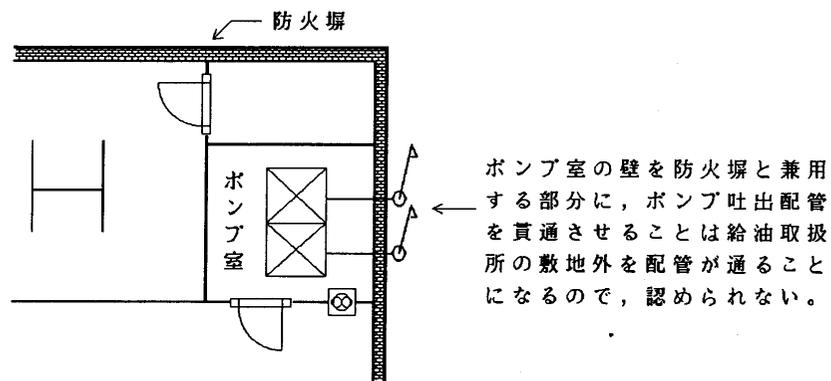


図 2-13-1-24 塙等を貫通する危険物配管（認められない例）

イ 油庫

- (ア) 整備室側に吸気口を設けるものにあつては、整備室の床面から 60 センチメートル以上の位置に設けること。
- (イ) その他油庫の構造及び設備は、アの基準に準ずること。

ウ 整備室

- (ア) 整備室内にピット等、可燃性の蒸気が滞留するおそれのあるものを設ける場合（図 2-13-1-25）には、その蒸気を有効に屋外に排出する設備として強制換気設備を設けること。また、可燃性ガス警報設備を設けるよう指導する。
- (イ) その他設備室の構造及び設備は、アの基準に準ずること。

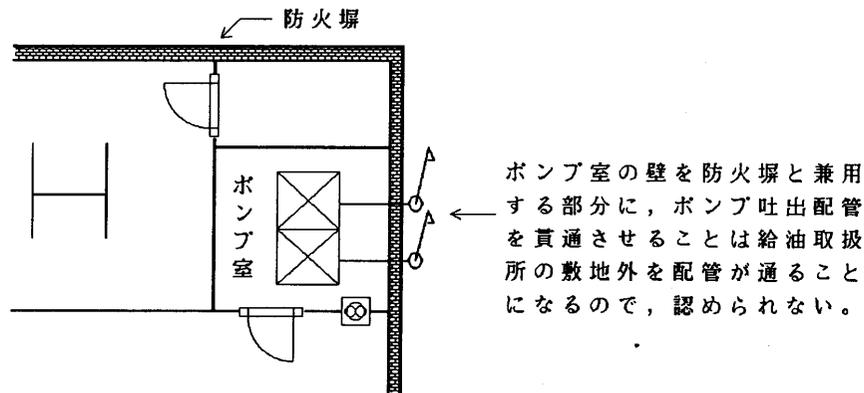
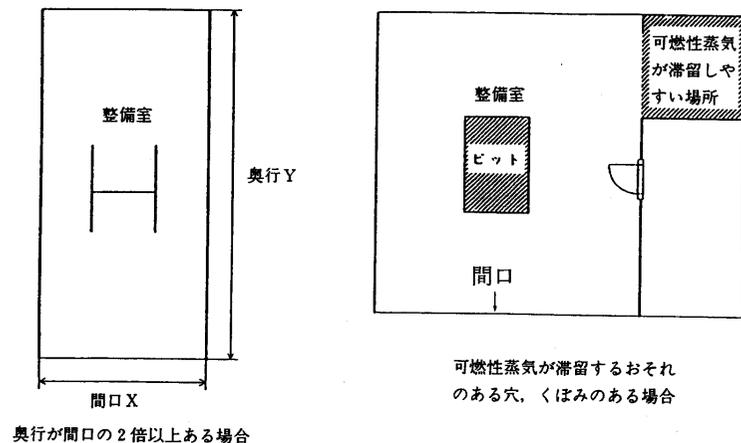


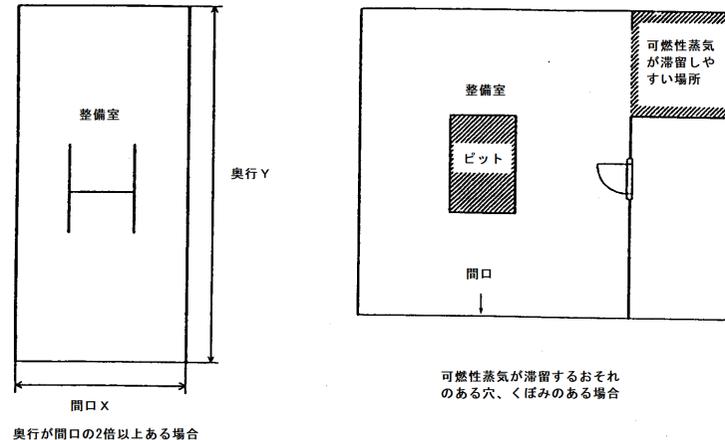
図 2-13-1-24 塙等を貫通する危険物配管（認められない例）

イ 油庫

- (ア) 整備室側に給気口を設けるものにあつては、整備室の床面から 60 センチメートル以上の位置に設けること。
- (イ) その他油庫の構造及び設備は、アの基準に準ずること。

ウ 整備室

- (ア) 整備室内を開放して使用する場合であっても、ピット等、可燃性の蒸気が滞留するおそれのあるものを設ける場合（図 2-13-1-25）は、その蒸気を有効に屋外に排出する設備を設けること。また、この場合、可燃性ガス警報設備を設けるよう指導すること。
- (イ) その他整備室の構造及び設備は、アの基準に準ずること。



所要の整備

換気設備及び
排出設備の記載

所要の整備

図2-13-1-25 可燃性蒸気が滞留するおそれのある整備室

10 電気設備の基準

電気設備については、第3章第2「電気設備の基準」によること。また、携帯型電子機器を使用する場合の留意事項等については、第3章第46「給油取扱所において携帯型電子機器を使用する場合の留意事項等」によること。

11 給油取扱所の附随設備（危険物令第17条第1項第22号、危険物規則第25条の5）

(1) 自動車等の点検・整備を行う設備

ア 自動車等の点検・整備を行う設備とは、オートリフト（油圧式・電動式）、オイルチェンジャー、ウォールタンク、タイヤチェンジャー、ホイールバルンサー、エアーコンプレッサー、バッテリーチャージャー、掃除機、マット洗機等（これらの内、移動式のもの除く。）をいう。

イ 油圧式オートリフト、オイルチェンジャー、ウォールタンク等の危険物を取り扱う設備のうち危険物を収納する部分は、次表に定める厚さの鋼板又はこれと同等以上の金属板で気密に造ること。また、屋内又は地盤面下に設けるよう指導する。（昭和62年4月28日消防危第38号）

危険物を収納する部分の容量	板厚
40 L以下	1.0 mm以上
40 Lを超え 100 L以下	1.2 mm以上
100 Lを超え 250 L以下	1.6 mm以上
250 Lを超えるもの	2.0 mm以上

ウ 危険物を取り扱う設備は、地震等により容易に転倒又は落下しないように設けること。

エ ウォールタンクには、通気管、液面計等を設けるとともに、外

図2-13-1-25 可燃性蒸気が滞留するおそれのある整備室

11 電気設備の基準

電気設備については、第3章第2「電気設備の基準」によること。また、携帯型電子機器を使用する場合の留意事項等については、第3章第46「給油取扱所において携帯型電子機器を使用する場合の留意事項等」によること。

12 給油取扱所の附随設備（危険物令第17条第1項第22号、危険物規則第25条の5）

(1) 自動車等の点検・整備を行う設備

ア 自動車等の点検・整備を行う設備とは、オートリフト（油圧式・電動式）、オイルチェンジャー、ウォールタンク、タイヤチェンジャー、ホイールバルンサー、エアーコンプレッサー、バッテリーチャージャー、掃除機、マット洗機等（これらの内、移動式のもの除く。）をいう。

イ 油圧式オートリフト、オイルチェンジャー、ウォールタンク等の危険物を取り扱う設備のうち危険物を収納する部分は、次表に定める厚さの鋼板又はこれと同等以上の金属板で気密に造ること。また、屋内又は地盤面下に設けるよう指導する。（昭和62年4月28日消防危第38号）

危険物を収納する部分の容量	板厚
40 L以下	1.0 mm以上
40 Lを超え 100 L以下	1.2 mm以上
100 Lを超え 250 L以下	1.6 mm以上
250 Lを超えるもの	2.0 mm以上

ウ 危険物を取り扱う設備は、地震等により容易に転倒又は落下しないように設けること。

エ ウォールタンクには、通気管、液面計等を設けるとともに、外

所要の整備

所要の整備

<p>面にはさび止めのための措置を講ずること。</p> <p>オ 附随設備は、給油空地内及び注油空地内に設けないこと。</p> <p>カ 附随設備は、注入口から3メートル以内の部分及び通気管の先端から1.5メートル以内の部分に設けないよう指導する。</p> <p><u>キ アイランド上に設けられる大型トラックの排出ガス処理用に用いられる尿素水溶液の供給機は、自動車等の点検・整備を行う設備に該当するが、固定給油設備からの離隔距離内の場所に設置することができる。(平成17年3月31日消防危第67号、平成23年12月1日消防危第273号)</u></p> <p>ク バッテリー充電及びバッテリーチェッカーは、充電等の際の端子接続位置が、建築物内の床面又は給油・注油空地外の安全な場所の舗装面から60センチメートル以上の高さとなる位置で行うこと。(昭和62年4月28日消防危第38号)</p> <p>ケ 火気を使用する方法又は火花を発するおそれがある方法により自動車等の点検・整備を行う場合は、建築物内で、かつ、可燃性蒸気の流入しない構造の区画した部分で行うこと。(昭和62年4月28日消防危第38号)</p> <p>参考</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>用途地域によっては、設置できないものもあるので、第4章第3「危険物関係法令と他法令との関係」2(7)を参照のこと。</p> </div>	<p>面にはさび止めのための措置を講ずること。</p> <p>オ 附随設備 <u>(尿素水溶液供給機を除く。)</u> は、給油空地内及び注油空地内に設けないこと。</p> <p>カ 附随設備は、注入口から3メートル以内の部分及び通気管の先端から1.5メートル以内の部分に設けないよう指導する。</p> <p><u>キ</u> バッテリー充電及びバッテリーチェッカーは、充電等の際の端子接続位置が、建築物内の床面又は給油・注油空地外の安全な場所の舗装面から60センチメートル以上の高さとなる位置で行うこと。(昭和62年4月28日消防危第38号)</p> <p><u>ク</u> 火気を使用する方法又は火花を発するおそれがある方法により自動車等の点検・整備を行う場合は、建築物内で、かつ、可燃性蒸気の流入しない構造の区画した部分で行うこと。(昭和62年4月28日消防危第38号)</p> <p>参考</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>用途地域によっては、設置できないものもあるので、第4章第3「危険物関係法令と他法令との関係」2(7)を参照のこと。</p> </div> <p><u>(2) 尿素水溶液供給機</u> <u>「危険物の規制に関する政令等の一部改正に伴う給油取扱所の運用について」(令和6年2月29日消防危第40号)第3 1によるほか、危険物規則第25条の5第2項第4号ロに示す「自動車等の衝突を防止するための措置」は、高さ150mm以上の基礎等によること。</u></p> <p><u>(3) 急速充電設備</u> <u>「危険物の規制に関する政令等の一部改正に伴う給油取扱所の運用について」(令和6年2月29日消防危第40号)第3 2によるほか、次によること。</u></p> <p><u>ア 位置について</u> <u>危険物規則第25条の5第2項第5号イに示す「給油又は注油に支障のない場所」は、車両の停車場(充電場所)を含め、給</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------

<p>(2) 附随設備以外の設備 ア～カ (省略)</p> <p>キ 非常用発電機を設置する場合は、可燃性蒸気が滞留するおそれのある範囲(ガソリン等の流出事故が発生した場合に直ちに移動又は電源を遮断できるものであれば、第3章第42「給油取扱所に電気自動車用急速充電設備を設置する場合における技術上の基準の運用」3(1)に示されている範囲とする。)以外の場所であって、車両の動線を考慮して支障のない場所であれば差し支えない。また当該要件を満たす場所であれば、直接地盤面や犬走りに設置して差し支えない。(平成31年4月19日消防危第81号)</p> <p>なお、設置に際しては危険物製造所等軽微な変更工事届出書(市規則第24号様式)の届出により、非常用発電機の位置、構造及び設備に関する事項について、許可内容へ内包させること。</p>	<p><u>油空地又は注油空地以外の場所とすること。</u></p> <p><u>イ 制御卓からの監視について</u> 危険物規則第25条の5第2項第5号イ(2)ただし書を適用する場合は、<u>全ての急速充電設備における使用状況を監視設備により、視認できるものであること。</u></p> <p><u>ウ 安全対策について</u> 危険物規則第25条の5第2項第5号ロに示す「自動車等の衝突を防止するための措置」は、「樹脂製ポール」、「鉄製パイプ」又は「高さ150mm以上のアイランド」等によるものとする。</p> <p><u>エ 緊急遮断装置について</u> 危険物規則第25条の5第2項第5号ハに示す「急速充電設備の電気回路を電源から遮断する装置」は、火災、その他の災害に際し速やかに操作することができる箇所(事務所の制御卓付近等)に設けるよう指導すること。</p> <p><u>なお、顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所(以下「セルフスタンド」という。)以外の給油取扱所や可搬式の制御装置(可搬式SSC)導入のセルフスタンドについては、従業員等の監視位置を考慮し、事務所の給油空地に面する外壁への設置を行うことができるものであること。また、実態に応じて、一か所の緊急遮断装置では、災害時の速やかな操作が困難であると想定される場合は、複数の設置を指導すること。</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
	<p>(4) 附随設備以外の設備 ア～カ (省略)</p> <p>キ 非常用発電機を設置する場合は、可燃性蒸気が滞留するおそれのある範囲以外の場所であって、車両の動線を考慮して支障のない場所であれば差し支えない。また当該要件を満たす場所であれば、直接地盤面や犬走りに設置して差し支えない。(平成31年4月19日消防危第81号)</p> <p>なお、設置に際しては危険物製造所等軽微な変更工事届出書(市規則第24号様式)の届出により、非常用発電機の位置、構造及び設備に関する事項について、許可内容へ内包させること。この場合については、非常時の緊急対応、施設の応急点検、臨時的な危険物の貯蔵・取扱いの手順、定期的な従業員に対する教育、対応訓練等に関する事項を予防規程及びこれに基づくマニュアル</p>	

<p>この場合については、非常時の緊急対応、施設の応急点検、臨時的な危険物の貯蔵・取扱いの手順、定期的な従業員に対する教育、対応訓練等に関する事項を予防規程及びこれに基づくマニュアル等(予防規程の制定義務のない自家用の給油取扱所のうち屋内給油取扱所以外のものとは相応する防災計画等)に記載するよう指導すること。</p> <p>ク 太陽光発電設備を設置する場合は第3章第45「危険物施設に太陽光発電設備を設置する場合の安全対策等に関するガイドライン」によること。</p> <p>(3) 固定給油設備と洗車機の遠隔距離の特例について(省略)</p> <p>12 防火管理者 収容人員が30人以上の場合又は法第8条第1項に定める建築物で、その管理について権原が分かれているものの部分に設置する場合は、防火管理者を選任すること。 なお、給油取扱所においては、危険物保安監督者が設備等の点検、火気の管理等に関する監督的業務を行うことが多いことから、同一の者がこれを兼務するよう指導する。</p> <p>13 防災物品 給油取扱所の用途に供する部分に用いる防災対象物品にあつては、法第8条の3に規定する防災性能を有するものを用いること。</p> <p>14 その他 (1) 駐車等の場所(危険物令第27条第6項第1号チ、危険物規則第40条の3の4) 駐車スペースは、あらかじめ固定給油設備の中心から次表の範囲内の部分、専用タンクの注入口から3メートル以内の部分及び専用タンクの通気管の先端から1.5メートル以内の部分並びに給油のための自動車の進入路以外の部分に設けること。 また、当該部分を白線等で示すよう指導する。 なお、自動車等の給油のための一時的な停車を除き、当該駐車スペース以外の場所に停車しないこと。</p>	<p>ル等(予防規程の制定義務のない自家用の給油取扱所のうち屋内給油取扱所以外のものとは相応する防災計画等)に記載するよう指導すること。</p> <p>ク 太陽光発電設備を設置する場合は第3章第45「危険物施設に太陽光発電設備を設置する場合の安全対策等に関するガイドライン」によること。</p> <p>(5) 固定給油設備と洗車機の遠隔距離の特例について(省略)</p> <p>13 防火管理者 収容人員が30人以上の場合又は法第8条第1項に定める建築物で、その管理について権原が分かれているものの部分に設置する場合は、防火管理者を選任すること。 なお、給油取扱所においては、危険物保安監督者が設備等の点検、火気の管理等に関する監督的業務を行うことが多いことから、同一の者がこれを兼務するよう指導する。</p> <p>14 防災物品 給油取扱所の用途に供する部分に用いる防災対象物品にあつては、法第8条の3に規定する防災性能を有するものを用いること。</p> <p>15 その他 (1) 駐車等の場所(危険物令第27条第6項第1号リ、危険物規則第40条の3の4) 駐車スペースは、あらかじめ固定給油設備の中心から次表の範囲内の部分、専用タンクの注入口から3メートル以内の部分及び専用タンクの通気管の先端から1.5メートル以内の部分並びに給油のための自動車の進入路以外の部分に設けること。 また、当該部分を白線等で示すよう指導する。 なお、自動車等の給油のための一時的な停車を除き、当該駐車スペース以外の場所に停車しないこと。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

方式・ホース全長：Y (m)	距離：X (m)
懸垂式	X = 4
地上式 3 ≤ Y	X = 4
3 < Y ≤ 4	X = 5
4 < Y ≤ 5	X = 6

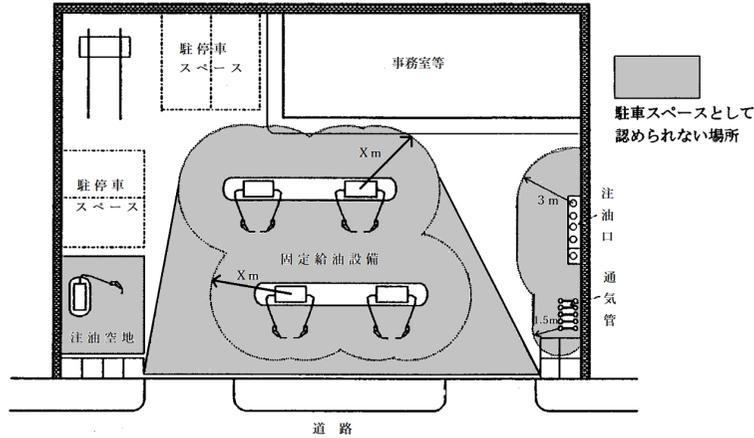


図 2-13-1-26 給油取扱所内の駐停車スペースの例

(2) 屋外での物品の販売等 (規則第 40 条の 3 の 6 第 2 項第 2 号)

屋外での物品の販売等については、「給油取扱所における屋外での物品の販売等の業務に係る運用について」(令和 2 年 3 月 27 日消防危第 88 号) によるほか、火災予防上の危険がある場合を除き、建築物の周囲の空地において、次のことを認めて差し支えない。(令和 2 年 12 月 28 日消保安第 364 号)

なお、給油、灯油の詰替え又は自動車等に点検・整備若しくは洗浄のために給油取扱所に入出する者を対象とし、ア及びイの場合は、危険物規則第 40 条の 3 の 4 で定める部分を除いた場所で行うこと。

ア レンタカー業務を行う場合において、白線等で明示されたスペースにレンタカーを常置すること。

イ 裸火等の火気を使用しない調理器具を使用したキッチンカーでの販売業務を行うこと。

ウ 物品の販売等の業務を行う場合において、自動販売機を設置すること。

方式・ホース全長：Y (m)	距離：X (m)
懸垂式	X = 4
地上式 3 ≤ Y	X = 4
3 < Y ≤ 4	X = 5
4 < Y ≤ 5	X = 6

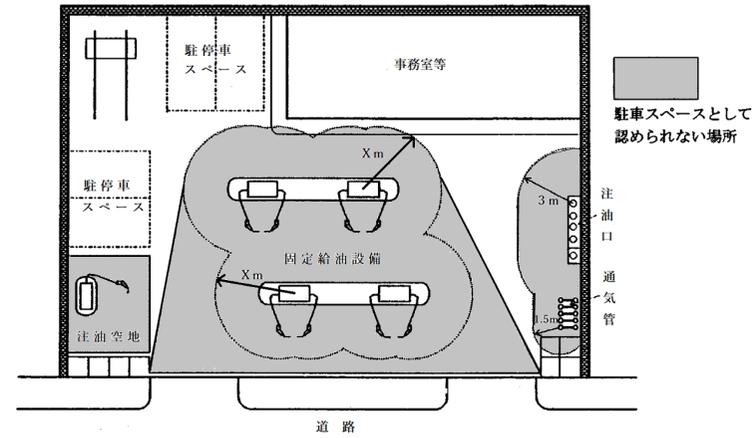


図 2-13-1-26 給油取扱所内の駐停車スペースの例

(2) 屋外での物品の販売等 (規則第 40 条の 3 の 6 第 2 項第 2 号)

屋外での物品の販売等については、「給油取扱所における屋外での物品の販売等の業務に係る運用について」(令和 2 年 3 月 27 日消防危第 88 号) によるほか、給油空地、注油空地及び危険物規則第 40 条の 3 の 4 各号で定める部分を除いた場所における次の業務については、火災予防上の危険がある場合を除き、認めて差し支えない(電気設備である場合は、可燃性の蒸気滞留するおそれのない場所に限る。)

なお、給油業務が行われていない場合に係員以外の出入りがあるものについては、次号による。(令和 6 年 5 月 8 日消保安第 93 号)

所要の整備

<p><u>なお、この場合、次のとおりとすること。</u></p> <p><u>(ア) 電気設備であることから、可燃性蒸気が滞留するおそれのある場所に設置しないよう、特に留意すること。</u></p> <p><u>なお、可燃性蒸気が滞留するおそれのある場所は、第3章第2「電気設備の基準」3の例によること。</u></p> <p><u>(イ) 転倒防止及び万一可燃性蒸気が漏れた場合を考慮し、アンカーボルト等で堅固な基礎（コンクリート製のベース、犬走り等を含む。）又は地盤に固定するとともに、自動販売機を設置する高さは、地盤面から0.15メートル以上とすること。</u></p> <p><u>(ウ) 「危険物製造所等軽微な変更届出書」（横浜市危険物規制規則第16条）の届出により、資料を提出させ、適正に設置されていることを確認すること。</u></p> <p><u>エ タイヤラック（移動式のものに限る。）等に展示して、タイヤの販売業務を行うこと。</u></p> <p><u>(3) 営業時間外における販売等（規則第40条の3の6第1項）</u></p> <p><u>営業時間外における販売等については、「給油取扱所の営業時間外における販売などの業務に係る運用について」（令和3年3月30日消防危第50号、令和3年5月7日消保安第74号）によること。</u></p> <p>(4) 植栽</p> <p>給油取扱所の植栽については、第3章第23「危険物製造所等の</p>	<p><u>ア レンタカー業務又は車両販売業務（車両の常置を含む。）</u></p> <p><u>イ キッチンカー等（裸火を使用しないものに限る。）による販売業務</u></p> <p><u>ウ 公衆用電話ボックス、郵便ポスト、宅配ロッカー又は自動販売機の設置</u></p> <p><u>エ タイヤ等の展示販売業務（防火塀の高さ未満のものに限る。）</u></p> <p><u>(3) 給油の業務が行われていないときの措置（規則第40条の3の6の2）</u></p> <p><u>「危険物の規制に関する政令等の一部改正に伴う給油取扱所の運用について」（令和6年2月29日消防危第40号）によるほか、危険物令第27条第6項第1号カただし書を適用する場合は、祭礼やイベント等の一時的な利用を含め、予防規程の変更認可を要するものであること。（令和6年5月8日消保安第93号）</u></p> <p>(4) 植栽</p> <p>給油取扱所の植栽については、第3章第23「危険物製造所等の保</p>	<p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>保有空地等における植栽」によること。</p> <p>(5) 特別高圧架空電線下に設置する給油取扱所 (省略)</p> <p>15 消火設備（危険物規則第 33 条、第 34 条、第 35 条） 消火設備については、<u>次によるほか</u>第 16 節「消火設備の基準」によること。</p> <p><u>(1) 一方開放型上階付き屋内給油取扱所において第 3 種固定式泡消火設備を設ける場合には、フォームヘッド方式とすること。</u></p> <p><u>(2) フォームヘッドは、給油空地、注油空地、専用タンクの注入口及び危険物規則第 25 条の 10 第 2 号に規定する「危険物の漏えい範囲を 15 平方メートル以下に極限化するための設備」を包含するように設置すること。</u></p> <p><u>(3) 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所、一方開放型上階付き屋内給油取扱所に設置する第 3 種固定式泡消火設備については、「製造所等の泡消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」（平成 23 年総務省告示第 559 号。以下「泡消火設備告示」という。）によること。</u></p>	<p>有空地等における植栽」によること。</p> <p>(5) 特別高圧架空電線下に設置する給油取扱所 (省略)</p> <p>16 消火設備（危険物規則第 33 条、第 34 条、第 35 条） 消火設備については、第 16 節「消火設備の基準」によること。<u>また、顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所、一方開放型上階付き屋内給油取扱所に設置する第 3 種固定式泡消火設備については、「製造所等の泡消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」（平成 23 年総務省告示第 559 号。以下「泡消火設備告示」という。）によること。</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>記載位置を屋内給油取扱所の部分に変更</p>
<p>第 2 屋内給油取扱所の基準</p> <p>屋内給油取扱所の基準は、危険物令第 17 条第 2 項及び第 1 「屋外給油取扱所及び共通事項」の規定によるほか、次によること。</p> <p>1 上屋の面積（危険物規則第 25 条の 6、平成元年 5 月 10 日消防危第 44 号、平成 6 年 3 月 11 日消防危第 21 号、平成 9 年 5 月 27 日消防危第 47 号）</p> <p>(1) 危険物規則第 25 条の 6 に規定する算出方法については、次によること。</p> <p>ア 上屋の面積の算出方法は、給油取扱所の用に供する部分の建築物の水平投影面積から危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号から第 5 号までの用途に供する部分のうち床又は壁で区画された部分の 1 階の床面積の合計を減じた面積とすること。</p> <p>この場合、給油取扱所の用に供する床又は壁で区画された部分には、油庫、コンプレッサー室等も含めること。</p>	<p>第 2 屋内給油取扱所の基準</p> <p>屋内給油取扱所の基準は、危険物令第 17 条第 2 項及び第 1 「屋外給油取扱所及び共通事項」の規定によるほか、次によること。</p> <p>1 上屋の面積（危険物規則第 25 条の 6、平成元年 5 月 10 日消防危第 44 号、平成 6 年 3 月 11 日消防危第 21 号、平成 9 年 5 月 27 日消防危第 47 号、令和 3 年 7 月 21 日消防危第 172 号）</p> <p>(1) 危険物規則第 25 条の 6 に規定する算出方法については、次によること。</p> <p>ア 上屋の面積の算出方法は、給油取扱所の用に供する部分の建築物の水平投影面積から危険物規則第 25 条の 4 第 1 項第 1 号から第 6 号までの用途に供する部分のうち床又は壁で区画された部分の 1 階の床面積の合計を減じた面積とすること。</p> <p>この場合、給油取扱所の用に供する床又は壁で区画された部分には、油庫、コンプレッサー室等も含めること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

<p>イ 上屋のはり、トラス等は、上屋の水平投影面積に含めること。</p> <p>ウ キャンプーサイン等の看板類は上屋の水平投影面積に加算することを要さない。</p> <p>(2) 屋内給油取扱所の範囲については、次のとおりとする。</p> <p>ア 危険物規則第 25 条の 6 に定める「火災の予防上安全であると認められるもの」については、「屋内給油取扱所の範囲に係る運用について」(令和 3 年 7 月 21 日消防危第 172 号。以下「172 号通知」という。) 1 によること。</p> <p>イ 許可の変更に関する取扱いについては、172 号通知によるほか、次のとおりとする。(令和 3 年 8 月 19 日消保安第 275 号)</p> <p>(ア) 172 号通知 1 (2) に基づき、「(1) 以外の給油取扱所 (建築物内に設置するもの及び給油取扱所の用に供する部分の上部に上階を有するものを除く。) であっても安全性を確認できる場合」の相談があった場合は、保安課危険物保安係に連絡すること。</p> <p>(イ) 172 号通知 2 に基づき、現に危険物令第 17 条第 2 項の屋内給油取扱所として許可を受けている給油取扱所のうち、改正後の危険物規則第 25 条の 6 の規定により屋内給油取扱所の範囲から外れるものについて、危険物令第 17 条第 1 項の屋外給油取扱所としての許可を受けたものとして取り扱う場合は、変更許可又は「危険物製造所等軽微な変更届出書」(市規則第 16 条) の届出により、「火災の予防上安全であると認められるもの」に該当することを確認する必要があること。</p> <p>よって、現に危険物令第 17 条第 2 項の屋内給油取扱所として許可を受けている給油取扱所のうち、変更許可や届出による確認が行われていないものについては、引き続き屋内給油取扱所として取り扱うものであること。</p> <p>2 屋内給油取扱所を含む建築物全体の構造 (危険物令第 17 条第 2 項第 1 号、危険物規則第 25 条の 7)</p> <p>(1) 給油取扱所における事故発生時において避難等に相当の混乱を生じるおそれのあると考えられる病院、老人福祉施設、幼稚園等令別表第 1 (6) 項に掲げる用途に供する部分を有する建築物には、給油取扱所を設置することはできない。ただし、事業所等の診療所等で給油取扱所以外の用途部分の主たる用途に供される部分に機能</p>	<p>イ 上屋のはり、トラス等は、上屋の水平投影面積に含めること。</p> <p>ウ キャンプーサイン等の看板類は上屋の水平投影面積に加算することを要さない。</p> <p>(2) 屋内給油取扱所の範囲については、次のとおりとする。</p> <p>ア 危険物規則第 25 条の 6 に定める「火災の予防上安全であると認められるもの」については、「屋内給油取扱所の範囲に係る運用について」(令和 3 年 7 月 21 日消防危第 172 号。以下「172 号通知」という。) 1 によること。</p> <p>イ 許可の変更に関する取扱いについては、172 号通知によるほか、次のとおりとする。(令和 3 年 8 月 19 日消保安第 275 号)</p> <p>(ア) 172 号通知 1 (2) に基づき、<u>172 号通知中の</u>「(1) 以外の給油取扱所 (建築物内に設置するもの及び給油取扱所の用に供する部分の上部に上階を有するものを除く。) であっても安全性を確認できる場合」の相談があった場合は、保安課危険物保安係に連絡すること。</p> <p>(イ) 172 号通知 2 に基づき、現に危険物令第 17 条第 2 項の屋内給油取扱所として許可を受けている給油取扱所のうち、改正後の危険物規則第 25 条の 6 の規定により屋内給油取扱所の範囲から外れるものについて、危険物令第 17 条第 1 項の屋外給油取扱所としての許可を受けたものとして取り扱う場合は、変更許可又は「危険物製造所等軽微な変更届出書」(市規則第 16 条) の届出により、「火災の予防上安全であると認められるもの」に該当することを確認する必要があること。</p> <p>よって、現に危険物令第 17 条第 2 項の屋内給油取扱所として許可を受けている給油取扱所のうち、変更許可や届出による確認が行われていないものについては、引き続き屋内給油取扱所として取り扱うものであること。</p> <p>2 屋内給油取扱所を含む建築物全体の構造 (危険物令第 17 条第 2 項第 1 号、危険物規則第 25 条の 7)</p> <p>(1) 給油取扱所における事故発生時において避難等に相当の混乱を生じるおそれのあると考えられる病院、老人福祉施設、幼稚園等令別表第 1 (6) 項に掲げる用途に供する部分を有する建築物には、給油取扱所を設置することはできない。ただし、事業所等の診療所等で給油取扱所以外の用途部分の主たる用途に供される部分に機能</p>	<p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

的に従属していると認められるものはこの限りでない。(平成元年3月3日消防危第15号)

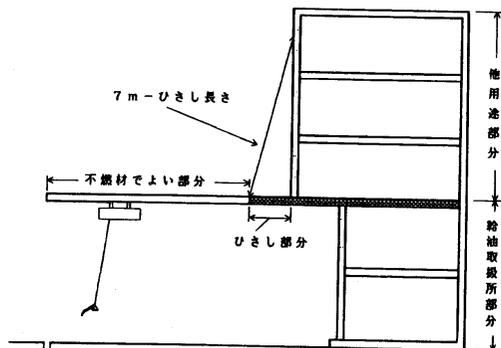
参考

令別表第1(6)項に掲げる用途ができた場合には、給油取扱所の位置、構造及び設備の技術上の基準に不適合が生じたことになり、移転命令の対象となる。

- (2) 屋内給油取扱所に設置する自動火災報知設備の基準は、第17節「警報設備、避難設備の技術上の基準」によるほか、次のとおりとする。(平成元年3月22日消防危第24号)
ア～エ (省略)

3～4 (省略)

- 5 建築物内の屋内給油取扱所の用に供する部分と他用途部分の構造(危険物令第17条第2項第5号)
- (1) 開口部のない耐火構造の床又は壁による当該建築物の他用途部分との区画については、消防用設備等設置規制事務審査基準(昭和63年5月30日消指第59号) **第2章第2節第3「令第8条に規定する区画の取扱い」**によること。
- (2) 上階を有する屋内給油取扱所の上屋上部に上階のない部分がある場合は、当該部分の上屋をひさしとみなし、危険物規則第25条の10第3号及び第4号に定めるひさしの必要長さ以上の部分については、不燃材料で造ることができる。



的に従属していると認められるものはこの限りでない。(平成元年3月3日消防危第15号)

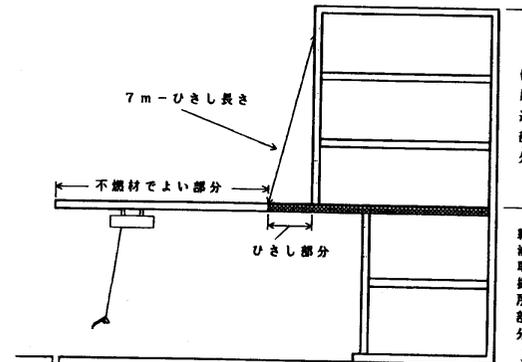
参考

令別表第1(6)項に掲げる用途ができた場合には、給油取扱所の位置、構造及び設備の技術上の基準に不適合が生じたことになり、移転命令の対象となる。

- (2) 屋内給油取扱所に設置する自動火災報知設備の基準は、第17節「警報設備、避難設備の技術上の基準」によるほか、次のとおりとする。(平成元年3月22日消防危第24号)
ア～エ (省略)

3～4 (省略)

- 5 建築物内の屋内給油取扱所の用に供する部分と他用途部分の構造(危険物令第17条第2項第5号)
- (1) 開口部のない耐火構造の床又は壁による当該建築物の他用途部分との区画については、消防用設備等設置規制事務審査基準(昭和63年5月30日消指第59号) **に係る令第8条の基準**によること。
- (2) 上階を有する屋内給油取扱所の上屋上部に上階のない部分がある場合は、当該部分の上屋をひさしとみなし、危険物規則第25条の10第3号及び第4号に定めるひさしの必要長さ以上の部分については、不燃材料で造ることができる。



所要の整備

<p>図2-13-2-1 上屋をひさしとみなす場合の措置</p> <p>6～8 (省略)</p> <p>9 オートリフト収納用地下ピット等の取扱い (平成9年12月3日消防危第112号)</p> <p>(1) オートリフトの収納用地下ピット (長さ4.6m×幅2.0m×深さ0.4m) は、危険物令第17条第2項第10号に規定する可燃性蒸気が滞留するおそれのある穴、くぼみ (以下「穴、くぼみ等」という。) に該当するものとして取り扱う。</p> <p>(2) ブレーキテスター収納用地下ピット (長さ4.6m×幅0.8m×深さ0.5m) を危険場所以外の場所に設置する場合、当該地下ピットは、穴、くぼみ等に該当しないものとする。ただし、危険場所に設置する場合は穴、くぼみ等に該当するものとして取り扱う。</p> <p>(3) (1)又は(2)の穴、くぼみ等に該当する地下ピット内に可燃性蒸気を検知する警報設備を設け、かつ、ピット内部に滞留した可燃性蒸気を屋外の高所に有効に排出することができる設備を設けた場合は、二方開放型屋内給油取扱所に限り穴、くぼみ等に該当しない。</p> <p>10 上部に上階を有する屋内給油取扱所 (危険物令第17条第2項第11号、危険物規則第25条の10、平成元年3月3日付消防危第15号)</p> <p>(1)～(7) (省略)</p> <p>第3 航空機給油取扱所の基準</p> <p>1～3 (省略)</p>	<p>図2-13-2-1 上屋をひさしとみなす場合の措置</p> <p>6～8 (省略)</p> <p>9 オートリフト収納用地下ピット等の取扱い (平成9年12月3日消防危第112号 <u>消防実務質疑応答集</u>)</p> <p>(1) オートリフトの収納用地下ピット (長さ4.6m×幅2.0m×深さ0.4m) は、危険物令第17条第2項第10号に規定する可燃性蒸気が滞留するおそれのある穴、くぼみ (以下「穴、くぼみ等」という。) に該当するものとして取り扱う。</p> <p>(2) ブレーキテスター収納用地下ピット (長さ4.6m×幅0.8m×深さ0.5m) を危険場所以外の場所に設置する場合、当該地下ピットは、穴、くぼみ等に該当しないものとする。ただし、危険場所に設置する場合は穴、くぼみ等に該当するものとして取り扱う。</p> <p>(3) (1)又は(2)の穴、くぼみ等に該当する地下ピット内に可燃性蒸気を検知する警報設備を設け、かつ、ピット内部に滞留した可燃性蒸気を屋外の高所に有効に排出することができる設備を設けた場合は、二方開放型屋内給油取扱所に限り穴、くぼみ等に該当しない。</p> <p>10 上部に上階を有する屋内給油取扱所 (危険物令第17条第2項第11号、危険物規則第25条の10、平成元年3月3日付消防危第15号)</p> <p>(1)～(7) (省略)</p> <p><u>11 消火設備 (危険物規則第33条、第34条、第35条)</u></p> <p><u>(1) 一方開放型上階付き屋内給油取扱所において第3種固定式泡消火設備を設ける場合には、フォームヘッド方式とすること。</u></p> <p><u>(2) フォームヘッドは、給油空地、注油空地、専用タンクの注入口及び危険物規則第25条の10第2号に規定する「危険物の漏えい範囲を15平方メートル以下に極限化するための設備」を包含するように設置すること。</u></p> <p>第3 航空機給油取扱所の基準</p> <p>1～3 (省略)</p>	<p>所要の整備</p> <p>記載位置の変更</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------

第4 船舶給油取扱所の基準

1～4 (省略)

5 流出油回収等応急措置(危険物規則第26条の2第3項第3号の2)

(1) 危険物が流出した場合の回収等の応急措置を講ずる設備は、油吸着剤及びオイルフェンスとし、オイルフェンスの長さは、給油する船舶を十分に囲える長さとする。また、保有する油吸着剤の量は次の表の「専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分」に応じた「吸着できる油の量」の油を吸着できる量とすること。この場合、油吸着剤の吸着能力を確認する際には、運輸省船舶局長通達(昭和59年2月1日船査第52号)に定める性能試験基準により、海上保安庁総務部海上保安試験研究センター所長が発行する試験成績書等を用いて確認すること。

なお、既存の施設において、「専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分」に応じ「油吸着剤の保有量」の量の油吸着剤を保有している場合は、「吸着できる油の量」の油を吸着できる量の吸着剤を保有しているものとみなす。

表2-13-4-1 油吸着材保有量

専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分	吸着できる油の量	油吸着材の保有量
タンク容量 30KL 未満	0.3KL 以上	30Kg 以上
タンク容量 30KL 以上 1,000KL 未満	1KL 以上	100Kg 以上
タンク容量 1,000KL 以上	3KL 以上	300Kg 以上

(2) 3の油流出防止措置の設備と、5の流出油回収等応急措置の設備を兼用することは差し支えない。

第4 船舶給油取扱所の基準

1～4 (省略)

5 流出油回収等応急措置(危険物規則第26条の2第3項第3号の2)

(1) 危険物が流出した場合の回収等の応急措置を講ずる設備は、油吸着剤及びオイルフェンスとし、オイルフェンスの長さは、給油する船舶を十分に囲える長さとする。また、保有する油吸着剤の量は次の表の「専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分」に応じた「吸着できる油の量」の油を吸着できる量とすること。この場合、油吸着剤の吸着能力を確認する際には、運輸省船舶局長通達(昭和59年2月1日船査第52号)に定める性能試験基準により、海上保安庁総務部海上保安試験研究センター所長が発行する試験成績書等を用いて確認すること。(平成20年5月22日消防危第264号)

なお、既存の施設 (平成18年4月1日において現に存する施設) において、「専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分」に応じ「油吸着剤の保有量」の量の油吸着剤を保有している場合は、「吸着できる油の量」の油を吸着できる量の吸着剤を保有しているものとみなす。

表2-13-4-1 油吸着材保有量

専用タンク又は貯蔵タンクの容量の区分	吸着できる油の量	油吸着材の保有量
タンク容量 30KL 未満	0.3KL 以上	30Kg 以上
タンク容量 30KL 以上 1,000KL 未満	1KL 以上	100Kg 以上
タンク容量 1,000KL 以上	3KL 以上	300Kg 以上

(2) 3の油流出防止措置の設備と、5の流出油回収等応急措置の設備を兼用することは差し支えない。

所要の整備

<p>(3) 油吸着材は収納庫に保管し、油吸着材及びオイルフェンスの保有量及び取扱い方法を記載した掲示板を掲出するよう指導する。</p> <p>6 給油タンク車の転落防止措置等（危険物規則第 26 条の 2 第 3 項第 6 号、危険物規則第 40 条の 3 の 8 第 3 号） （省略）</p> <p>第 5 鉄道給油取扱所の基準 （省略）</p> <p>第 6 自家用給油取扱所の基準 （危険物規則第 28 条第 3 項）</p> <p>1 自家用給油取扱所の給油空地 <u>自動車等に直接給油するための固定された</u>給油設備及び注油設備のうちホース機器の周囲には、自動車等に直接給油し、又は給油を受ける自動車等が出入りするための有効な空地を保有すること。</p> <p>2 自家用給油取扱所の自動車等の出入りする側 自家用給油取扱所の自動車等の出入りする側は、道路に接するか又は 4 メートル以上の幅を有する構内道路等に接しており、自動車等の出入りが可能な側であること。</p> <p>3 自家用給油取扱所の上屋 自家用給油取扱所においては、危険物規則第 25 条の 6 のうち給油取扱所の敷地面積を給油取扱所の敷地面積に給油取扱所の周囲の空地面積を加えた面積と読み替えることができる。</p> <p>4 自家用給油取扱所の防火塀 危険物令第 17 条第 1 項 19 号に定める技術上の基準<u>については</u>、火災予防上支障がない場合 <u>にあつては、設置</u>しないことができる。</p> <p>5 固定注油設備の取扱い 自家用給油取扱所の空地内に、自動車等の冷暖房用として、自動車</p>	<p>(3) 油吸着材は収納庫に保管し、油吸着材及びオイルフェンスの保有量及び取扱い方法を記載した掲示板を掲出するよう指導する。</p> <p>6 給油タンク車の転落防止措置等（危険物規則第 26 条の 2 第 3 項第 6 号、危険物規則第 40 条の 3 の 8 第 3 号） （省略）</p> <p>第 5 鉄道給油取扱所の基準 （省略）</p> <p>第 6 自家用給油取扱所の基準 （危険物規則第 28 条第 3 項）</p> <p>1 自家用給油取扱所の給油空地 給油設備及び注油設備のうちホース機器の周囲には、自動車等に直接給油し、又は給油を受ける自動車等が出入りするための有効な空地を保有すること。</p> <p>2 自家用給油取扱所の自動車等の出入りする側 自家用給油取扱所の自動車等の出入りする側は、道路に接するか又は 4 メートル以上の幅を有する構内道路等に接しており、自動車等の出入りが可能な側であること。</p> <p>3 自家用給油取扱所の上屋 自家用給油取扱所においては、危険物規則第 25 条の 6 のうち給油取扱所の敷地面積を給油取扱所の敷地面積に給油取扱所の周囲の空地面積を加えた面積と読み替えることができる。</p> <p>4 自家用給油取扱所の防火塀 危険物令第 17 条第 1 項 19 号に定める技術上の基準は、火災予防上支障がない場合、<u>適用</u>しないことができる。</p> <p>5 固定注油設備の取扱い 自家用給油取扱所の空地内に、自動車等の冷暖房用として、自動車</p>	<p>法令改正に伴う 所要の整備</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------

<p>等に設けられた灯油タンクに給油するための固定注油設備を設ける場合にあっては、危険物令第17条第1項第13号に定める固定給油設備との離隔距離に関する技術上の基準については適用しないことができる。</p> <p>6 自家用給油取扱所に専用の地下貯蔵タンクを設けず、当該自家用給油取扱所の固定給油設備に接続することを目的とした屋外タンク貯蔵所を設置する場合については、「危険物規制事務に関する執務資料の送付について」（平成27年4月24日消防危第91号）によること。</p> <p>第7 圧縮天然ガス等充填設備設置給油取扱所の基準 （危険物規則第27条の3又は第27条の4）</p> <p>（省略）</p> <p>第8 圧縮水素充填設備設置給油取扱所の基準 （危険物規則第27条の5）</p> <p>（省略）</p> <p>第9 メタノール等及びエタノール等を取り扱う給油取扱所の基準 （危険物規則第28条の2、第28条の2の2又は第28条の2の3）</p> <p>（省略）</p> <p>第10 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所の基準 （危険物規則第28条の2の4から同第28条の2の8、平成10年3月13日消防危第25号及び平成10年4月2日消危第4号）</p> <p>顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所の基準は、危険物規則第28条の2の4から同第28条の2の8の規定によるほか、次によること。</p> <p>1 定義 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所（以下「セルフ給油取扱所」という。）は、顧客用固定給油設備等により、顧客に自ら自動車若し</p>	<p>等に設けられた灯油タンクに給油するための固定注油設備を設ける場合にあっては、危険物令第17条第1項第13号に定める固定給油設備との離隔距離に関する技術上の基準については適用しないことができる。</p> <p>6 自家用給油取扱所に専用の地下貯蔵タンクを設けず、当該自家用給油取扱所の固定給油設備に接続することを目的とした屋外タンク貯蔵所を設置する場合については、「危険物規制事務に関する執務資料の送付について」（平成27年4月24日消防危第91号）によること。</p> <p>第7 圧縮天然ガス等充填設備設置給油取扱所の基準 （危険物規則第27条の3又は第27条の4）</p> <p>（省略）</p> <p>第8 圧縮水素充填設備設置給油取扱所の基準 （危険物規則第27条の5）</p> <p>（省略）</p> <p>第9 メタノール等及びエタノール等を取り扱う給油取扱所の基準 （危険物規則第28条の2、第28条の2の2又は第28条の2の3）</p> <p>（省略）</p> <p>第10 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所の基準 （危険物規則第28条の2の4から同第28条の2の8、平成10年3月13日消防危第25号及び平成10年4月2日消危第4号）</p> <p>顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所の基準は、危険物規則第28条の2の4から同第28条の2の8の規定によるほか、次によること。</p> <p>1 定義 顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所（以下「セルフ給油取扱所」という。）は、顧客用固定給油設備等により、顧客に自ら自動車若し</p>	
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

くは原動機付自転車に給油させ、又は灯油若しくは軽油を容器に詰め替えさせることができる給油取扱所である。この場合、自動二輪車は自動車に含まれる。

(注意事項)

顧客用固定給油設備により顧客がガソリン又は軽油を容器に詰め替えること及び顧客用固定注油設備により顧客が灯油又は軽油をタンクローリーに注入することはできない。

2 セルフ給油取扱所の表示

セルフ給油取扱所である旨の表示の方法は、「セルフ」、「セルフサービス」等のカタカナの記載、看板の掲示等により行うこととし、英語等による表示を併記しても良い。また、一部の時間帯に限り顧客に自ら給油等をさせる場合の表示は、その時間帯のみ、又は常時掲出（あらかじめセルフの時間帯を明記するもの）のいずれでも良い。
なお、材質は第11(2)ウによること。

3 顧客用固定給油設備

(1)～(8) (省略)

4 顧客用固定注油設備

(1)～(4) (省略)

5 固定給油設備等及び簡易タンクの衝突防止措置

措置例として、次のものがある。

なお、懸垂式の固定給油設備等は、衝突防止措置を要しない。

(1)～(2) (省略)

6 固定給油設備等転倒時の危険物漏えい拡散防止措置

措置例として、次のものがある。

(1) 立ち上がり配管遮断弁の設置

一定の応力を受けた場合に脆弱部がせん断されるとともに、せん

くは原動機付自転車に給油させ、又は灯油若しくは軽油を容器に詰め替えさせることができる給油取扱所である。この場合、自動二輪車は自動車に含まれる。

(注意事項)

顧客用固定給油設備により顧客がガソリン又は軽油を容器に詰め替えること及び顧客用固定注油設備により顧客が灯油又は軽油をタンクローリーに注入することはできない。

セルフ給油取扱所において、自動車等（自動車及び原動機付自転車を除く。）に直接給油する場合には、危険物取扱者である従業員、又はその立会いを受けた従業員が行う必要がある。

2 セルフ給油取扱所の表示

セルフ給油取扱所である旨の表示の方法は、「セルフ」、「セルフサービス」等のカタカナの記載、看板の掲示等により行うこととし、英語等による表示を併記しても良い。また、一部の時間帯に限り顧客に自ら給油等をさせる場合の表示は、その時間帯のみ、又は常時掲出（あらかじめセルフの時間帯を明記するもの）のいずれでも良い。
なお、材質は第11(2)ウによること。

3 顧客用固定給油設備

(1)～(8) (省略)

4 顧客用固定注油設備

(1)～(4) (省略)

5 固定給油設備等及び簡易タンクの衝突防止措置

措置例として、次のものがある。

なお、懸垂式の固定給油設備等は、衝突防止措置を要しない。

(1)～(2) (省略)

6 固定給油設備等転倒時の危険物漏えい拡散防止措置

措置例として、次のものがある。

(1) 立ち上がり配管遮断弁の設置

一定の応力を受けた場合に脆弱部がせん断されるとともに、せん

所要の整備

<p>断部の双方を弁により遮断することにより、危険物の漏えいを防止する構造のものとし、車両衝突等の応力が脆弱部に的確に伝わるよう、固定給油設備等の本体及び基礎部に堅固に取り付けること。</p> <p>(2) 逆止弁の設置（ホース機器と分離して設置されるポンプ機器を有する固定給油設備等の場合を除く。）</p> <p>転倒時にも機能する構造のものとし、固定給油設備等の配管と地下から立ち上げたフレキシブル配管の間に設置すること。</p> <p>7 固定給油設備等、簡易タンク及びその周辺への表示 (1)～(4) (省略)</p> <p>8 制御卓、その他の設備 (1) 制御卓の位置</p> <p><u>全ての顧客用固定給油設備等における使用状況を直接視認できるとは、給油される自動車等の不在時において顧客用固定給油設備等における使用状況を目視できることをいい、壁等により死角となる部分がないこと。</u></p> <p><u>また、基本的に給油空地及び注油空地に正対する位置とするよう指導することとし、これによることが困難な場合は、監視員が制御卓に正対した状態で、全ての顧客用固定給油設備等を見渡す視野をおおむね180度以内とすること。</u></p>	<p>断部の双方を弁により遮断することにより、危険物の漏えいを防止する構造のものとし、車両衝突等の応力が脆弱部に的確に伝わるよう、固定給油設備等の本体及び基礎部に堅固に取り付けること。</p> <p>(2) 逆止弁の設置（ホース機器と分離して設置されるポンプ機器を有する固定給油設備等の場合を除く。）</p> <p>転倒時にも機能する構造のものとし、固定給油設備等の配管と地下から立ち上げたフレキシブル配管の間に設置すること。</p> <p>7 固定給油設備等、簡易タンク及びその周辺への表示 (1)～(4) (省略)</p> <p>8 制御卓、その他の設備 (1) 制御卓の位置</p> <p><u>ア 制御卓は、給油取扱所内で、すべての顧客用固定給油設備等における使用状況を直接視認できる位置に設置すること。ただし、給油取扱所内で、全ての顧客用固定給油設備等の使用状況を監視設備により視認できる位置に設置する場合は、この限りでないこと。</u></p> <p><u>なお、この場合、直接視認できるとは、給油される自動車等の不在時において顧客用固定給油設備等における使用状況を目視できることをいうものであること。</u></p> <p><u>イ 給油中の自動車等により顧客用固定給油設備等の使用状況について制御卓からの直接的な視認が妨げられるおそれのある部分については、制御卓からの視認を常時可能とするための監視設備を設置すること。</u></p> <p><u>ウ 全ての顧客用固定給油設備等における使用状況を監視設備により視認できる場合は、全ての顧客用固定給油設備等における使</u></p>	<p>所要の整備</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>(2) 監視設備 監視設備としては、モニター<u>テレビ</u>及びディスプレイが想定されるものであり、視認を常時可能とするとは、必要な時点において顧客用固定給油設備等の使用状況を即座に映し出すことができるものをいう。</p> <p>(3) 制御卓の制御装置 制御装置には、給油等許可スイッチ及び許可解除のスイッチ並びに顧客用固定給油設備等の状態の表示装置を設けること。 なお、顧客用固定給油設備等を、顧客が要請した油種のポンプだけを起動し、顧客が当該油種のノズルを使用した場合に給油等を開始することができる構造としたもので、制御卓で油種設定をする構造のものは、油種設定のスイッチを併せて設置すること。</p> <p>(4) <u>供給一斉停止制御装置（緊急停止スイッチ）</u> <u>火災その他の災害に際し速やかに操作できる箇所とは、給油空地等に所在する従業者等においても速やかに操作することができる箇所をいうものであり、給油取扱所の事務所の給油空地に面する外壁等がある。</u></p> <p>(5) 会話装置・放送機器（インターホン拡声装置） ア 会話装置 顧客と容易に会話することができる装置としてはインターホンがあり、インターホンの顧客側の端末は、顧客用固定給油設備等の近傍に設置し、懸垂式の顧客用固定給油設備等は、近くの壁面等に設置すること。 イ 放送機器 スピーカーは、顧客がいる全ての場所に指示ができるように設置すること。 なお、放送機器の機能を有する既設の有線放送設備を顧客の給油作業等について必要な指示を行なう放送機器として用いても良い。ただし、有線放送等よりも指示の放送が優先されるものであること。（平成10年10月13日消防危第90号）</p> <p>(6) 固定消火設備起動装置<u>（起動スイッチ）</u> 起動スイッチは、透明な蓋で覆う等により、不用意に操作されないものであるとともに、火災時には速やかに操作できるものであること。</p>	<p><u>用状況を従業員が直接視認できる位置以外の場所に制御卓を設置できること。</u></p> <p>(2) 監視設備 監視設備としては、モニター<u>カメラ</u>及びディスプレイが想定されるものであり、視認を常時可能とするとは、必要な時点において顧客用固定給油設備等の使用状況を即座に映し出すことができるものをいう<u>ものであること。</u></p> <p>(3) 制御卓の制御装置 制御装置には、給油等許可スイッチ及び許可解除のスイッチ並びに顧客用固定給油設備等の状態の表示装置を設けること。 なお、顧客用固定給油設備等を、顧客が要請した油種のポンプだけを起動し、顧客が当該油種のノズルを使用した場合に給油等を開始することができる構造としたもので、制御卓で油種設定をする構造のものは、油種設定のスイッチを併せて設置すること。</p> <p>(4) 緊急停止スイッチ <u>制御卓及び火災その他の災害に際し速やかに操作できる箇所（給油取扱所の事務所の給油空地に面する外壁等）にすべての固定給油設備等への危険物の供給を一斉に停止するための制御装置（緊急停止スイッチ）を設けること。</u></p> <p>(5) 会話装置・放送機器（インターホン拡声装置） ア 会話装置 顧客と容易に会話することができる装置としてはインターホンがあり、インターホンの顧客側の端末は、顧客用固定給油設備等の近傍に設置し、懸垂式の顧客用固定給油設備等は、近くの壁面等に設置すること。 イ 放送機器 スピーカーは、顧客がいる全ての場所に指示ができるように設置すること。 なお、放送機器の機能を有する既設の有線放送設備を顧客の給油作業等について必要な指示を行なう放送機器として用いても良い。ただし、有線放送等よりも指示の放送が優先されるものであること。（平成10年10月13日消防危第90号）</p> <p>(6) 固定消火設備起動装置 <u>制御卓には、固定消火設備の起動装置を設置すること。</u> 起動スイッチは、透明な蓋で覆う等により、不用意に操作されない</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------

<p>と。</p> <p>(7) 制御卓の複数設置 制御卓は、顧客用固定給油設備等を分担することにより複数設置しても良い。この場合、全ての制御卓に、全ての固定給油設備等への危険物の供給を一斉に停止するための制御装置を設置すること。</p> <p>(8) コンビニエンスストア等併設給油取扱所 制御卓が設置されている場所にレジを設置し監視者がレジ業務を兼ねることは、顧客自らによる給油作業等の監視・制御及び顧客に対する必要な指示を行なうことが確保されていれば、認められる。(平成10年10月13日消防危第90号)</p> <p>(9) 可搬式の制御機器の使用については、第3章第47「顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所における可搬式の制御機器の使用に係る運用」によること。</p>	<p>ものであるとともに、火災時には速やかに操作できるものであること。</p> <p>(7) 制御卓の複数設置 制御卓は、顧客用固定給油設備等を分担することにより複数設置しても良い。この場合、全ての制御卓に、全ての固定給油設備等への危険物の供給を一斉に停止するための制御装置を設置すること。</p> <p>(8) コンビニエンスストア等併設給油取扱所 制御卓が設置されている場所にレジを設置し監視者がレジ業務を兼ねることは、顧客自らによる給油作業等の監視・制御及び顧客に対する必要な指示を行なうことが確保されていれば、認められる。(平成10年10月13日消防危第90号)</p> <p>(9) 可搬式の制御機器の使用については、第3章第47「顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所における可搬式の制御機器の使用に係る運用」によること。</p> <p><u>(10)顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所において、「セルフ給油取扱所において給油の許可の判断に資する情報を従業員へ提供するAIシステム」(情報提供型AIシステム)を導入する場合は、「顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所において給油の許可の判断に資する情報を従業員へ提供するAIシステムの導入に係る留意事項について」(令和5年5月15日消防危第124号。以下「124号通知」という。)によるほか、次によること。</u> <u>ア 情報提供型AIシステム導入時の変更工事の手続きについては、124号通知によるほか、第4章第2.2によること。</u> <u>イ 124号通知1(2)イ(ア)及び(イ)の内容は、予防規程に定めるべき内容であることから、現に認可している予防規程で対応できない場合は、変更認可申請するよう求めること。</u> <u>ウ 124号通知1(2)イ(イ)については、完成検査、現場確認又は資料提出等により確認すること。</u></p> <p><u>(11)顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所において、「予め設定した環境条件等を満たす場合にのみ、給油又は注油の許可を判断し、危険物の供給の開始又は停止を自動で行うAIシステム」(以下「条件付自動型AIシステム」という。)の導入に向けた実証実験を実施する際の要件及び手続きについては、「顧客に自ら給油等をさせる給油取扱所における条件付自動型AIシステムの導入に向けた実証実験の実施について」(令和6年3月29日消防危第75号。以下「75号通知」という。)</u></p>	<p>所要の整備</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>第11 その他の留意事項</p> <p><u>1 電気自動車用急速充電設備の設置については、第3章第42「給油取扱所に電気自動車用急速充電設備を設置する場合における技術上の基準の運用」によること。</u></p> <p><u>2 ガソリンとエタノールを混合してエタノールを含有するものを製造する行為について、給油取扱所で行うことは認められない。(平成24年1月11日消防危第2号)</u></p> <p><u>3 バイオエタノールの一種である ETBE (エチルターシャリーブチルエーテル) をガソリンに混合したものは、危険物令第17条第4項に規定するエタノールを含有するものには含まれない。(平成24年1月11日消防危第2号)</u></p> <p><u>4 給油等の業務が行われていないときに、給油取扱所に併設された物販店舗等のみの営業を行う場合は、「給油取扱所の技術上の基準等に係る運用について」(平成13年11月21日消防危第127号)第2によること。</u></p> <p><u>5 給油取扱所における移動タンク貯蔵所に乗務する危険物取扱者による単独荷卸しに必要な安全対策等については、「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成17年10月26日消防危第245号(平成30年3月30日消防危第44号改正))によること。</u></p>	<p><u>によるほか、次によること。</u></p> <p><u>ア 条件付自動型AIシステム導入時の変更工事の手続きについては、第4章第2.2によること。</u></p> <p><u>イ 75号通知1(3)に基づき、実証実験の実施には、予防規程の変更認可が要件となることに留意すること。</u></p> <p><u>(12) 可搬式の制御機器を用いて給油許可を行う場合の顧客自らによる給油作業の監視を固定給油設備や給油空地等の近傍以外の場所(給油取扱所の敷地内に限る。)から行う場合は、「危険物規制事務に関する執務資料の送付について」(令和6年9月24日消防危第279号)問1によること。</u></p> <p>第11 その他の留意事項</p> <p><u>1 ガソリンとエタノールを混合してエタノールを含有するものを製造する行為について、給油取扱所で行うことは認められない。(平成24年1月11日消防危第2号)</u></p> <p><u>2 バイオエタノールの一種である ETBE (エチルターシャリーブチルエーテル) をガソリンに混合したものは、危険物令第17条第4項に規定するエタノールを含有するものには含まれない。(平成24年1月11日消防危第2号)</u></p> <p><u>3 給油取扱所における移動タンク貯蔵所に乗務する危険物取扱者による単独荷卸しに必要な安全対策等については、「給油取扱所等における単独荷卸しに係る運用について」(平成17年10月26日消防危第245号(平成30年3月30日消防危第44号改正))によること。</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第15節 移送取扱所の<u>位置、構造及び設備の技術上の</u>基準</p> <p>移送取扱所の基準は、危険物令第18条の2の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1～3 (省略)</p> <p>4 配管等の加熱及び保温のための設備(危険物規則第28条の11) 危険物規則第28条の11に規定する「配管等に加熱及び保温のための設備を設ける場合」については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の</u>基準」14(7)の例によること。</p> <p>5 地上配管の地表面からの高さ(危険物規則第28条の16第1号) 危険物規則第28条の16第1号に規定する「地上配管」は、原則として当該配管の直下の地表面から0.2メートル以上の高さとなるように設置するよう指導する。ただし、地表面がコンクリート造等の場合には、0.1メートル以上で差し支えない。</p> <p>6 地上配管の保有空地(危険物規則第28条の16第3号) 危険物規則第28条の16第3号ただし書の「保安上必要な措置」には、水密構造で両端を閉塞した防護構造物、危険物の流出拡散を防止することができる防火上有効な塀等の工作物を周囲の状況に応じて保安上有効に設置した場合の措置が該当するほか、当該配管の周囲の状況に応じて、配管から流出した危険物に火災が発生した場合又はその周囲の建築物等が火災になった場合に相互に延焼を防止するために有効であり、かつ、消防活動上の支障がないことを事業者が検証し、市町村長等が当該検証内容を適当と認めた措置をいう。(平成23年12月1日消防危第273号)</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第15節 移送取扱所の基準</p> <p>移送取扱所の基準は、危険物令第18条の2の定めによるほか、次のとおりとする。</p> <p>1～3 (省略)</p> <p>4 配管等の加熱及び保温のための設備(危険物規則第28条の11) 危険物規則第28条の11に規定する「配管等に加熱及び保温のための設備を設ける場合」については、第4節「製造所の基準」14(7)の例によること。</p> <p>5 地上配管の地表面からの高さ(危険物規則第28条の16第1号) 危険物規則第28条の16第1号に規定する「地上配管」は、原則として当該配管の直下の地表面から0.2メートル以上の高さとなるように設置するよう指導する。ただし、地表面がコンクリート造等の場合には、0.1メートル以上で差し支えない。</p> <p>6 地上配管の保有空地(危険物規則第28条の16第3号) 危険物規則第28条の16第3号ただし書の「保安上必要な措置」には、水密構造で両端を閉塞した防護構造物、危険物の流出拡散を防止することができる防火上有効な塀等の工作物を周囲の状況に応じて保安上有効に設置した場合の措置が該当するほか、当該配管の周囲の状況に応じて、配管から流出した危険物に火災が発生した場合又はその周囲の建築物等が火災になった場合に相互に延焼を防止するために有効であり、かつ、消防活動上の支障がないことを事業者が検証し、市町村長等が当該検証内容を適当と認めた措置をいう。(平成23年12月1日消防危第273号)</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

<p>7 地上配管の支持物(危険物規則第28条の16第4号及び第5号) 危険物規則第28条の16第4号及び第5号に規定する「支持物」 については、第4節「製造所の<u>位置、構造及び設備の技術上の</u> 基準」14(11)の例によること。</p> <p>8 ~15 (省略)</p>	<p>7 地上配管の支持物(危険物規則第28条の16第4号及び第5号) 危険物規則第28条の16第4号及び第5号に規定する「支持物」 については、第4節「製造所の基準」14(11)の例によること。</p> <p>8 ~15 (省略)</p>	<p>所要の整備</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 16 節 消火設備の基準</p> <p>第 1 ～第 6 (省略)</p> <p>第 7 泡消火設備の基準 (平成元年 3 月 22 日消防危第 24 号)</p> <p>危険物規則第 32 条の 6 及び泡消火設備告示の規定によるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 泡消火設備告示第 4 条、第 6 条、第 17 条、別表第 5 又は別表第 6 に規定する「水に溶けないもの」については、第 4 節「製造所<u>の位置、構造及び設備の技術上</u>の基準」5 (4)によること。</p> <p>2 ～ 4 (省略)</p> <p>第 8 不活性ガス消火設備の基準 (平成元年 3 月 22 日消防危第 24 号)</p> <p>危険物規則第 32 条の 7 及び「製造所等の不活性ガス消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」(平成 23 年総務省告示第 557 号。以下「不活性ガス消火設備告示」という。)の規定によるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 ガソリン、灯油、軽油若しくは重油 (以下「ガソリン等」という。)を貯蔵し、又は取り扱う製造所等で、当該製造所等に設置される危険</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第 16 節 消火設備の基準</p> <p>第 1 ～第 6 (省略)</p> <p>第 7 泡消火設備の基準 (平成元年 3 月 22 日消防危第 24 号)</p> <p>危険物規則第 32 条の 6 及び泡消火設備告示の規定によるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 泡消火設備告示第 4 条、第 6 条、第 17 条、別表第 5 又は別表第 6 に規定する「水に溶けないもの」については、第 4 節「製造所の基準」5 (4)によること。</p> <p>2 ～ 4 (省略)</p> <p>第 8 不活性ガス消火設備の基準 (平成元年 3 月 22 日消防危第 24 号)</p> <p>危険物規則第 32 条の 7 及び「製造所等の不活性ガス消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」(平成 23 年総務省告示第 557 号。以下「不活性ガス消火設備告示」という。)の規定によるほか、次のとおりとする。</p> <p>1 ガソリン、灯油、軽油若しくは重油 (以下「ガソリン等」という。)を貯蔵し、又は取り扱う製造所等で、当該製造所等に設置される危険</p>	<p style="text-align: center;">所要の整備</p>

<p>物を取り扱う設備等において少量の潤滑油や絶縁油等の危険物が取り扱われる場合でも、当該製造所等は不活性ガス消火設備告示第5条第2号に規定されている「ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等」として扱う。(平成24年3月30日消防危第92号)</p> <p>2 不活性ガス消火設備告示第5条第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75ミリメートル以上のもの」(平成12年建設省告示第1399号)第1第1号トが含まれる。</p> <p>3 不活性ガス消火設備告示第5条第2号に規定する表中、上欄に掲げる製造所等の区分に応じた同表下欄に掲げる消火剤以外の消火剤を使用する場合は、「危険物施設に係るガス系消火設備等の取扱いについて」(平成8年12月25日消防予第265号・消防危第169号)により指導する。</p> <p>4 「二酸化炭素消火設備の安全対策に係る制御盤の技術基準について」(平成4年2月5日消防予第22号・消防危第11号)、<u>「二酸化炭素消火設備の安全対策について」(平成8年9月20日消防予第193号・消防危第117号)</u>、<u>「全域放出方式の二酸化炭素消火設備の安全対策ガイドラインについて」(平成9年8月19日付消防予第133号・消防危第85号)</u>において示されている二酸化炭素消火設備の安全対策に従って設置するよう指導する。</p>	<p>物を取り扱う設備等において少量の潤滑油や絶縁油等の危険物が取り扱われる場合でも、当該製造所等は不活性ガス消火設備告示第5条第2号に規定されている「ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等」として扱う。(平成24年3月30日消防危第92号)</p> <p>2 不活性ガス消火設備告示第5条第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75ミリメートル以上のもの」(平成12年建設省告示第1399号)第1第1号トが含まれる。</p> <p>3 不活性ガス消火設備告示第5条第2号に規定する表中、上欄に掲げる製造所等の区分に応じた同表下欄に掲げる消火剤以外の消火剤を使用する場合は、「危険物施設に係るガス系消火設備等の取扱いについて」(平成8年12月25日消防予第265号・消防危第169号)により指導する。</p> <p>4 「二酸化炭素消火設備の安全対策に係る制御盤の技術基準について」(平成4年2月5日消防予第22号・消防危第11号)、<u>「製造所等の不活性ガス消火設備の技術上の基準の細目を定める告示の一部改正に伴う二酸化炭素消火設備の設置に係る安全対策等について」(令和5年3月31日消防危第65号。以下「65号通知」という。)</u>において示されている二酸化炭素消火設備の安全対策に従って設置するよう指導する。</p> <p><u>5 65号通知により製造所等に設置する二酸化炭素消火設備においては、消防法令上、閉止弁の設置を義務化しないとされたが、新設の製造所等については、原則、閉止弁を設置するよう指導すること。また、既存の製造所等のうち閉止弁が設置されていない二酸化炭素消火設備(自主設置のものを含む。)についても、事前相談や改修等の機会をとらえ、閉止弁の設置を指導すること。(令和5年5月15日消保安第102号)</u></p> <p><u>6 二酸化炭素以外のガスを消火剤とする不活性ガス消火設備についても65号通知で示された「製造所等における二酸化炭素消火設備の設置に係るガイドライン」を準用し、安全対策を講じるよう指導する</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------

第9 ハロゲン化物消火設備の基準

(平成元年3月22日消防危第24号)

危険物規則第32条の8及び「製造所等のハロゲン化物消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」(平成23年総務省告示第558号。以下「ハロゲン化物消火設備告示」という。)の規定によるほか、次のとおりとする。

- 1 ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等で、当該製造所等に設置される危険物を取り扱う設備等において少量の潤滑油や絶縁油等の危険物を取り扱われる場合でも、当該製造所等はハロゲン化物消火設備告示第5条第2号に規定されている「ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等」として扱う。(平成24年3月30日消防危第92号)
- 2 ハロゲン化物消火設備告示第5条第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75mm以上のもの」(平成12年建設省告示第1399号)第1 第1号トが含まれる。
- 3 ハロゲンガス消火設備告示第5条第2号に規定する表中、上欄に掲げる製造所等の区分に応じた同表下欄に掲げる消火剤以外の消火剤を使用する場合は、「危険物施設に係るガス系消火設備等の取扱いについて」(平成8年12月25日消防予第265号・消防危第169号)により指導する。
- 4 ハロン1301、ハロン2402及びハロン1211(以下「ハロン消火剤」という。)は、「特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律」(昭和63年法律第53号)において特定ハロンとして指定され、使用を抑制されている。ハロン消火剤の抑制対策等については、「ハロン消火剤を用いるハロゲン化物消火設備・機器の使用抑制等について」(平成13年5月16日消防予第155号・消防危第61号(平成26年11月13日消防予第466号・消防危第261号改正))及び「ハロン

こと。(令和5年5月15日消保安第102号)

第9 ハロゲン化物消火設備の基準

(平成元年3月22日消防危第24号)

危険物規則第32条の8及び「製造所等のハロゲン化物消火設備の技術上の基準の細目を定める告示」(平成23年総務省告示第558号。以下「ハロゲン化物消火設備告示」という。)の規定によるほか、次のとおりとする。

- 1 ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等で、当該製造所等に設置される危険物を取り扱う設備等において少量の潤滑油や絶縁油等の危険物を取り扱われる場合でも、当該製造所等はハロゲン化物消火設備告示第5条第2号に規定されている「ガソリン等を貯蔵し、又は取り扱う製造所等」として扱う。(平成24年3月30日消防危第92号)
- 2 ハロゲン化物消火設備告示第5条第4号に規定する「これと同等以上の強度を有する構造」には、「高温高圧蒸気養生された軽量気泡コンクリート製パネルで厚さ75mm以上のもの」(平成12年建設省告示第1399号)第1 第1号トが含まれる。
- 3 ハロゲンガス消火設備告示第5条第2号に規定する表中、上欄に掲げる製造所等の区分に応じた同表下欄に掲げる消火剤以外の消火剤を使用する場合は、「危険物施設に係るガス系消火設備等の取扱いについて」(平成8年12月25日消防予第265号・消防危第169号)により指導する。
- 4 ハロン1301、ハロン2402及びハロン1211(以下「ハロン消火剤」という。)は、「特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律」(昭和63年法律第53号)において特定ハロンとして指定され、使用を抑制されている。ハロン消火剤の抑制対策等については、「ハロン消火剤を用いるハロゲン化物消火設備・機器の使用抑制等について」(平成13年5月16日消防予第155号・消防危第61号(平成26年11月13日消防予第466号・消防危第261号改正))及び「ハロン

バンクの運用等について」(平成6年2月10日消防予第32号・消防危第9号(平成17年12月26日消防予第411号・消防危第312号改正))により指導する。

バンクの運用等について」(平成6年2月10日消防予第32号・消防危第9号(平成17年12月26日消防予第411号・消防危第312号改正))により指導する。

5 65号通知で示された「製造所等における二酸化炭素消火設備の設置に係るガイドライン」を準用し、安全対策を講じるよう指導すること。(令和5年5月15日消保安第102号)

所要の整備

第10 粉末消火設備の基準

(平成元年3月22日消防危第24号)

(省略)

第10 粉末消火設備の基準

(平成元年3月22日消防危第24号)

(省略)

第11 第4種消火設備及び第5種消火設備

1～2 (省略)

3 計算例

危険物政令第17条第1項に規定するフルサービスの屋外給油取扱所で危険物規則第35条第3号に該当する場合の計算例。計算条件は以下の通り。

事務所等(耐火構造)	290 m ²
上屋(耐火構造以外)	100 m ²
危険物(第4類)の倍数	542倍
キュービクル式変電設備	5 m ²

第5種消火設備の能力単位

A火災	3単位
B火災	7単位

(1) 第5種消火設備のみを設ける場合

建築物、工作物の所要単位は、

$$\frac{290}{100} + \frac{100}{50} = 4.9$$

第11 第4種消火設備及び第5種消火設備

1～2 (省略)

3 計算例

危険物政令第17条第1項に規定するフルサービスの屋外給油取扱所で危険物規則第35条第3号に該当する場合の計算例。計算条件は以下の通り。

事務所等(耐火構造)	290 m ²
上屋(耐火構造以外)	100 m ²
危険物(第4類)の倍数	542倍
キュービクル式変電設備	5 m ²

第5種消火設備の能力単位

A火災	3単位
B火災	7単位

(1) 第5種消火設備のみを設ける場合

建築物、工作物の所要単位は、

$$\frac{290}{100} + \frac{100}{50} = 4.9$$

建築物、工作物（A火災）に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{4.9}{3} = 1.633 \text{ 小数点以下切り上げて } 2 \text{ 個}$$

危険物の所要単位は、

$$\frac{542}{10} = 54.2$$

危険物（第4類の場合はB火災）に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{54.2}{7} = 7.74 \text{ 小数点以下切り上げて } 8 \text{ 個}$$

電気設備に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{5}{100} = 0.05 \text{ 小数点以下切り上げて } 1 \text{ 個}$$

よって第5種消火設備だけの場合は、次の個数を設置すること。

$$\text{合計：} 2 \text{（建築物）} + 8 \text{（危険物）} + 1 \text{（電気設備）} = 11 \text{（個）}$$

(2) 第4種消火設備2個で全ての部分を歩行距離30メートル以下となるよう警戒する場合

第5種消火設備の設置個数は、危険物規則第35条第3号ただし書の規定により当該所要単位の5分の1以上で足りるため、所要単位は、

$$\text{建築物} = \frac{4.9}{5} = 0.98 \quad \text{危険物} = \frac{54.2}{5} = 10.84$$

建築物に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{0.98}{3} = 0.326 \quad \text{小数点以下切り上げて } 1 \text{ 個}$$

建築物、工作物（A火災）に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{4.9}{3} = 1.633 \text{ 小数点以下切り上げて } 2 \text{ 個}$$

危険物の所要単位は、

$$\frac{542}{10} = 54.2$$

危険物（第4類の場合はB火災）に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{54.2}{7} = 7.74 \text{ 小数点以下切り上げて } 8 \text{ 個}$$

電気設備に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{5}{100} = 0.05 \text{ 小数点以下切り上げて } 1 \text{ 個}$$

よって第5種消火設備だけの場合は、次の個数を設置すること。

$$\text{合計：} 2 \text{（建築物）} + 8 \text{（危険物）} + 1 \text{（電気設備）} = 11 \text{（個）}$$

(2) 第4種消火設備2個で全ての部分を歩行距離30メートル以下となるよう警戒する場合

第5種消火設備の設置個数は、危険物規則第35条第3号ただし書の規定により当該所要単位の5分の1以上で足りるため、所要単位は、

$$\text{建築物} = \frac{4.9}{5} = 0.98 \quad \text{危険物} = \frac{54.2}{5} = 10.84$$

建築物に対する第5種消火設備の設置個数は、

$$\frac{0.98}{3} = 0.326 \quad \text{小数点以下切り上げて } 1 \text{ 個}$$

<p>危険物に対する第5種消火設備の設置個数は、</p> $\frac{10.84}{7} = 1.548$ <p>小数点以下切り上げて 2個</p> <p>よって第4種消火設備を2個設ける場合は、第5種消火設備を次の個数設置すること。</p> <p>合計：第4種消火設備 2（個） 第5種消火設備 3 + 1（電気設備） = 4（個）</p> <p>第12 大規模な製造所の消火設備 （省略）</p> <p>第13 その他 （省略）</p>	<p>危険物に対する第5種消火設備の設置個数は、</p> $\frac{10.84}{7} = 1.548$ <p>小数点以下切り上げて 2個</p> <p>よって第4種消火設備を2個設ける場合は、第5種消火設備を次の個数設置すること。</p> <p>合計：第4種消火設備 2（個） 第5種消火設備 3 + 1（電気設備） = 4（個）</p> <p><u>4 危険物規則第33条第2項各号、第34条第2項各号又は第35条各号に基づき設置される消火設備が、危険物令別表第5において電気設備に適応するものとされ、かつ、当該消火設備が電気設備のある場所を包含し、又は危険物規則第36条の規定を満たすように設けられている場合、危険物令第23条を適用し、危険物規則第36条の規定により設置が必要な消火設備を設けないこととして差し支えない。（令和5年3月24日消防危第63号）</u></p> <p>第12 大規模な製造所の消火設備 （省略）</p> <p>第13 その他 （省略）</p>	<p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第17節 警報設備、避難設備の技術上の基準</p> <p>1 自動火災報知設備の基準（平成元年3月22日消防危第24号） 危険物規則第38条第2項の定めによるほか、自動火災報知設備の基準の細目は、次によること。 (1) 感知器等の設置は、規則第23条第4項から第9項までの規定の例によること。 (2) (1)に定めるもののほか、規則第24条及び第24条の2の規定の例によること。</p> <p>2 誘導灯については、危険物令第21条の2の定めによるほか、全域放出方式の二酸化炭素消火設備を設置するものについては「<u>全域放出方式の二酸化炭素消火設備の安全対策ガイドラインについて</u>」（平成9年8月19日消防予第133号・消防危第85号）により設置するよう指導すること。</p> <p>3 その他警報設備及び避難設備の技術上の基準の項目については、この章の定めによるほか、法第17条に基づく消防用設備等の基準に準じて指導すること。</p>	<p style="text-align: center;">第 2 章 危険物規制審査基準</p> <p>第17節 警報設備、避難設備の基準</p> <p>1 自動火災報知設備の基準（平成元年3月22日消防危第24号） 危険物規則第38条第2項の定めによるほか、自動火災報知設備の基準の細目は、次によること。 (1) 感知器等の設置は、規則第23条第4項から第9項までの規定の例によること。 (2) (1)に定めるもののほか、規則第24条及び第24条の2の規定の例によること。</p> <p>2 誘導灯については、危険物令第21条の2の定めによるほか、全域放出方式の二酸化炭素消火設備を設置するものについては「<u>製造所等の不活性ガス消火設備の技術上の基準の細目を定める告示の一部改正に伴う二酸化炭素消火設備の設置に係る安全対策等について</u>」（令和5年3月31日消防危第65号）により設置するよう指導すること。</p> <p>3 その他警報設備及び避難設備の技術上の基準の項目については、この章の定めによるほか、法第17条に基づく消防用設備等の基準に準じて指導すること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 2 電気設備の基準 (令和 4 年 4 月 15 日消保安第 43 号、令和 4 年 8 月 2 6 日消保安第 339 号)</p> <p>電気設備は、危険物令第 9 条第 1 項第 17 号（他の規定において準用する場合を含む。）の規定により「電気設備に関する技術基準を定める省令」（平成 9 年通商産業省令第 52 号）によるほか、次の基準によるものとする。</p> <p>1 防爆構造の適用範囲 (省略)</p> <p>2 爆発危険箇所の種別 (省略)</p> <p>3 爆発危険箇所の範囲 爆発危険箇所（危険度区域）の範囲は、日本産業規格（JIS）C 60079-10(2008)「爆発性雰囲気で使用する電気機械器具-第 10 部：危険区域内の分類」の規定によるほか、次の範囲とする。 (1) 屋内における爆発危険箇所の範囲 ア 屋内における爆発危険箇所の範囲は、次によるものであること。 (省略) イ 爆発危険箇所の範囲の例 (ア) 開放容器、詰替装置等の爆発危険箇所は、図 3-2-1 及び図 3-2-2 の例によるものであること。</p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 2 電気設備の基準 (令和 4 年 4 月 15 日消保安第 43 号、令和 4 年 8 月 2 6 日消保安第 339 号、<u>令和 6 年 9 月 6 日消保安第 398 号</u>)</p> <p>電気設備は、危険物令第 9 条第 1 項第 17 号（他の規定において準用する場合を含む。）の規定により<u>適用される</u>「電気設備に関する技術基準を定める省令」（平成 9 年通商産業省令第 52 号）によるほか、次の基準によるものとする。<u>また、危険物令第 24 条第 13 号に規定する「可燃性の液体、可燃性の蒸気若しくは可燃性のガスがもれ、若しくは滞留するおそれのある場所又は可燃性の微粉が著しく浮遊するおそれのある場所」の適用範囲についても本基準を準用する。</u></p> <p>1 防爆構造の適用範囲 (省略)</p> <p>2 爆発危険箇所の種別 (省略)</p> <p>3 爆発危険箇所の範囲 爆発危険箇所（危険度区域）の範囲は、日本産業規格 JISC60079-10(2008)「爆発性雰囲気で使用する電気機械器具-第 10 部：危険区域内の分類」の規定によるほか、次の範囲とする。 (1) 屋内における爆発危険箇所の範囲 ア 屋内における爆発危険箇所の範囲は、次によるものであること。 (省略) イ 爆発危険箇所の範囲の例 (ア) 開放容器、詰替装置等の爆発危険箇所は、図 3-2-1 及び図 3-2-2 の例によるものであること。</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

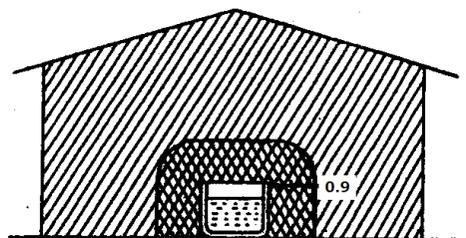


図 3-2-1 開放容器の例

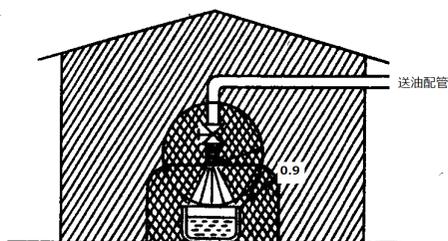


図 3-2-2 詰替装置の例

備考
 第一類危険箇所
 第二類危険箇所
 単位：メートル
 以下同じ。

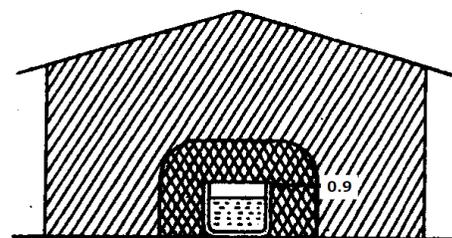


図 3-2-1 開放容器の例

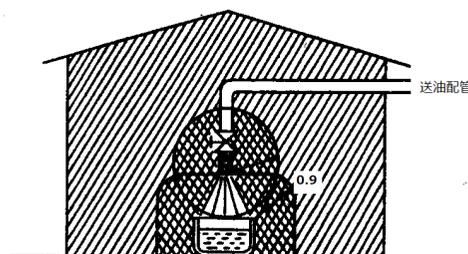


図 3-2-2 詰替装置の例

備考
 第一類危険箇所
 第二類危険箇所
 単位：メートル
 以下同じ。

- (イ) ポンプ室は、室内の全てを第二類危険箇所として扱うものであること。
- (ウ) 屋内貯蔵所にあつては、図 3-2-3 の例によるものであること。

- (イ) ポンプ室は、室内のすべてを第二類危険箇所として扱うものであること。
- (ウ) 屋内貯蔵所にあつては、図 3-2-3 の例によるものであること。

なお、屋内貯蔵所において IoT 機器等を使用する場合は、「屋内貯蔵所において電気機械器具等を使用する場合の運用について」（令和 6 年 3 月 29 日消防危第 80 号）によるものとし、予防規程策定義務対象の屋内貯蔵所については、当該通知 1 (1) から (3) の内容について予防規程に追記し、認可を受けること。（令和 6 年 4 月 18 日消保安第 31 号）

所要の整備

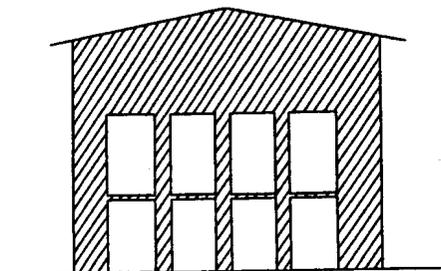


図 3-2-3 屋内貯蔵所の例

- (エ) 屋内タンク貯蔵所のタンク専用室については、前(ウ)の例によるものであること。
- (オ) 販売取扱所の配合室については、室内の部分は第二類危険箇所とするものであること。
- (2) 屋外における爆発危険箇所の範囲
 - ア 屋外における爆発危険箇所の範囲は、次によるものであること。
 - (ア) 移動性のある設備については、前(1)、ア、(イ)の例によるものであること。
 - (イ) 屋外であっても、周囲の状況から実態上通風が悪く可燃性蒸気が滞留するおそれがある場合は、前(1)の屋内における爆発危険箇所の範囲の例によるものであること。
 - イ 爆発危険箇所の範囲の例
 - (ア)～(カ) (省略)
 - (キ) 給油取扱所における爆発危険箇所は、図 3-2-13 から図 3-2-17 の例によるものであること。ただし、可燃性蒸気流入防止構造である固定給油設備は、「可燃性蒸気流入防止構造等の基準について」(平成 13 年 3 月 30 日消防危第 43 号)によること。
 - なお、給油取扱所に設置した地下タンクについては前(ウ)、(エ)及び(オ)を、簡易タンクについては図 3-2-13 を準用し、懸垂式固定給油設備のポンプ室については、室内を全て第二類危険箇所とすること。

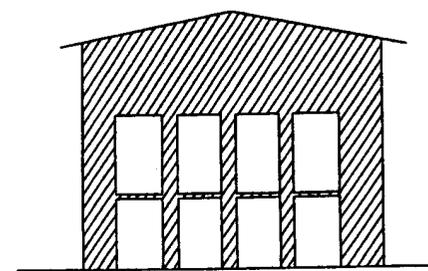


図 3-2-3 屋内貯蔵所の例

- (エ) 屋内タンク貯蔵所のタンク専用室については、前(ウ)の例によるものであること。
- (オ) 販売取扱所の配合室については、室内の部分は第二類危険箇所とするものであること。
- (2) 屋外における爆発危険箇所の範囲
 - ア 屋外における爆発危険箇所の範囲は、次によるものであること。
 - (ア) 移動性のある設備については、前(1)、ア、(イ)の例によるものであること。
 - (イ) 屋外であっても、周囲の状況から実態上通風が悪く可燃性蒸気が滞留するおそれがある場合は、前(1)の屋内における爆発危険箇所の範囲の例によるものであること。
 - イ 爆発危険箇所の範囲の例
 - (ア)～(カ) (省略)
 - (キ) 給油取扱所の爆発危険箇所は、次の範囲とすること。ただし、可燃性蒸気流入防止構造である固定給油設備は、平成 13 年 3 月 30 日消防危第 43 号(平成 24 年 3 月 16 日消防危 77 号改正)によること。
 - なお、給油取扱所に設置した地下タンクについては前(ウ)、(エ)及び(オ)を、簡易タンクについては図 13 を準用し、懸垂式固定給油設備のポンプ室については、室内をすべて第二類危険箇所とすること。

a 懸垂式以外の固定給油設備にあつては、固定給油設備の

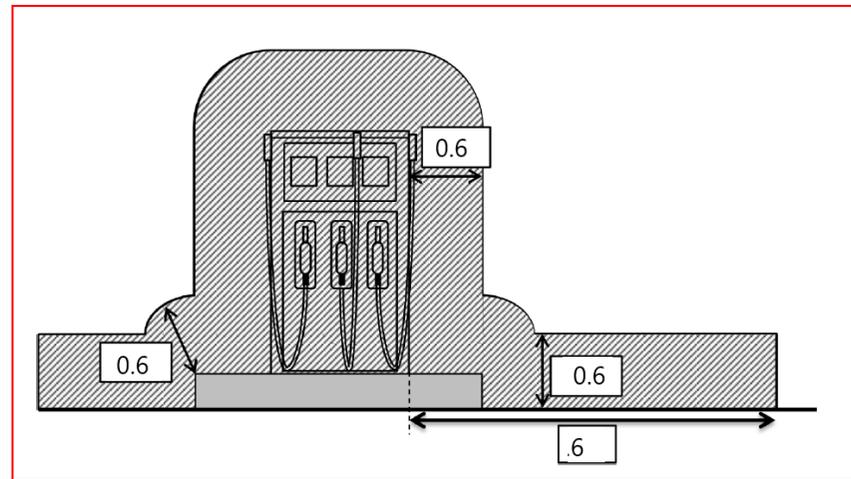
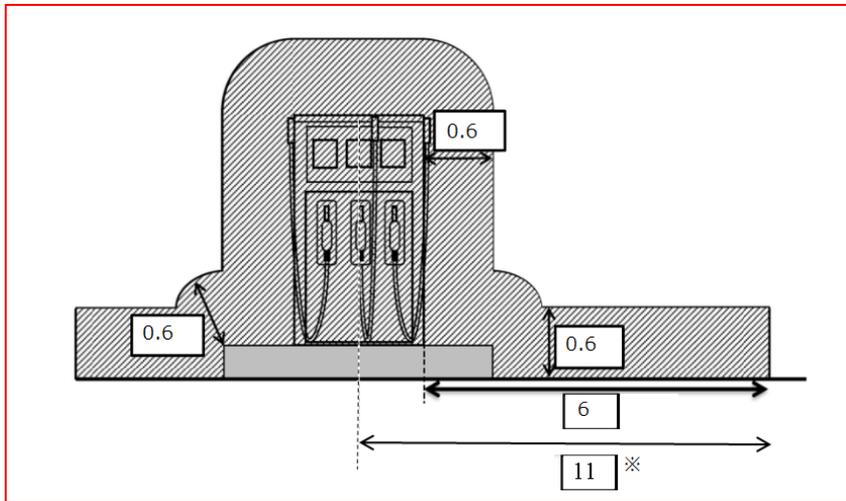
所要の整備

所要の整備

端面から水平方向 6メートルまで、基礎又は地盤面からの高さ 60センチメートルまでの範囲、かつ固定給油設備の周囲 60センチメートルまでの範囲

b 懸垂式の固定給油設備にあつては、固定給油設備のホース機器の引出口から地盤面に下ろした垂線（当該引出口が可動式のものにあつては、可動範囲の全ての部分から地盤面に下ろした垂線とする。）から水平方向 6メートルまで、地盤面からの高さ 60センチメートルまでの範囲、かつ固定給油設備の端面から水平方向 60センチメートルまで、地盤面までの範囲

c 通気管の先端の中心から地盤面に下ろした垂線の水平方向及び周囲 1.5メートルまでの範囲



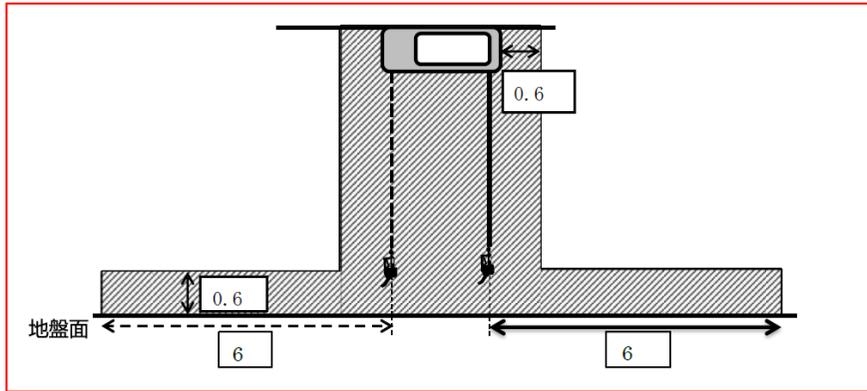
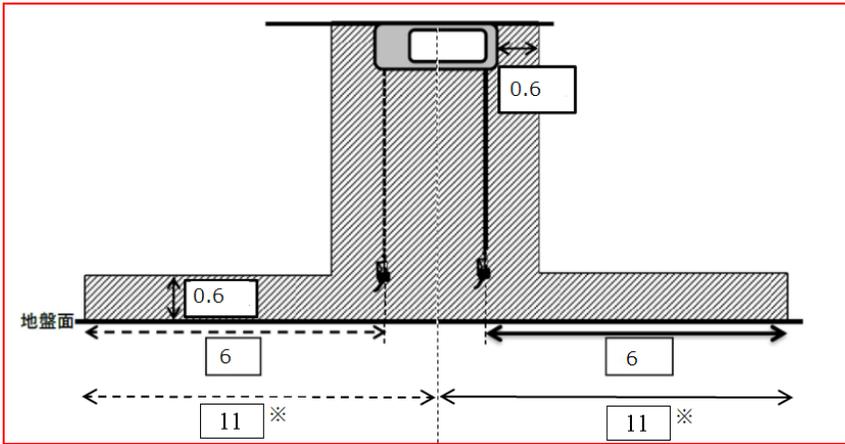
※緊急遮断装置を設けない急速充電設備を設置する場合にあつては 11メートル（図 3-2-17 参照）

（網掛け部の全てが第二类危険箇所）

図 3-2-13 地上式固定給油設備の例

（網掛け部の全てが第二类危険箇所）

図 3-2-13 地上式固定給油設備の例



※緊急遮断装置を設けない急速充電設備を設置する場合には11メートル (図3-2-17参照)

(網掛け部の全てが第二类危険箇所)

図3-2-14 懸垂式固定給油設備の例

(網掛け部の全てが第二类危険箇所)

図3-2-14 懸垂式固定給油設備の例

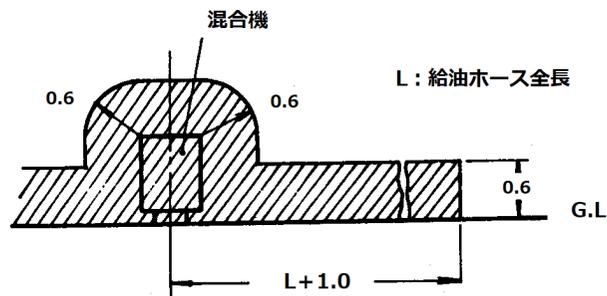


図3-2-15 混合燃料油調合器の例

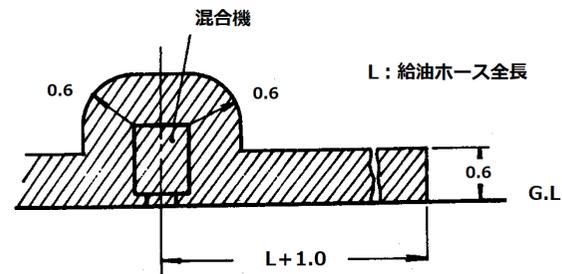


図3-2-15 混合燃料油調合器の例

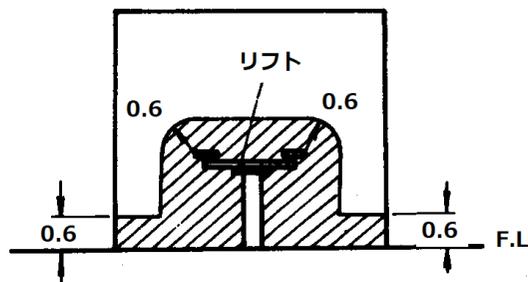


図3-2-16 リフト室の例

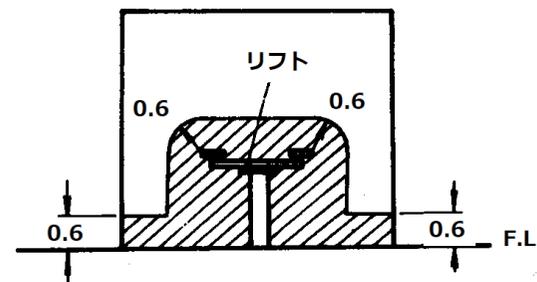


図3-2-16 リフト室の例

(ク) 給油取扱所に緊急遮断装置を設けない急速充電設備を設置する場合の爆発危険箇所は、前(キ)によるほか、図3-2-17のとおり、固定給油設備、専用タンクのマンホール及び注入口の中心から排水溝までの最大の下り勾配となっている直線を定め、当該直線からの水平範囲（固定給油設備：11メートル、マンホール：14メートル、注入口：16メートル）のうち、地盤面からの高さ60センチメートルまでの範囲とし、当該範囲を第二類危険箇所とすること。

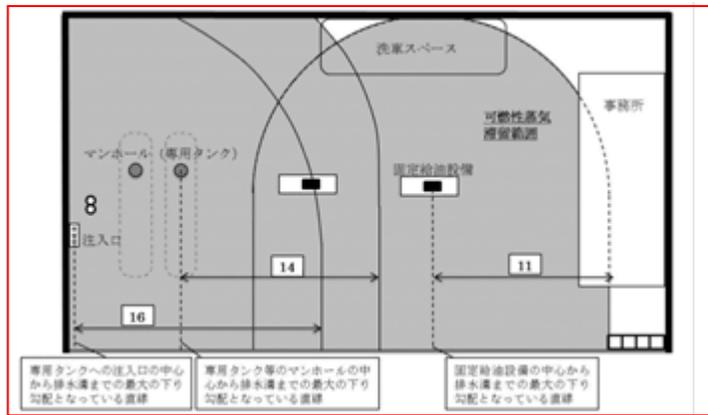


図3-2-17 緊急遮断装置を設けない急速充電設備を設置する場合の例

ウ 石油精製、化学工業（石油化学を含む。）等のプラントの爆発危険箇所については、「危険物施設における可燃性蒸気の滞留するおそれのある場所に関する運用について」（平成31年4月24日消防危第84号（令和2年1月23日消防危第21号改正））によることができる。予防規程の策定義務対象については、本通知を適用する場合、自主行動計画を予防規程に添付して認可を受けること。（令和2年1月27日消保安第473号）

4 防爆構造の種類
（省略）

5 使用する電気設備

爆発危険箇所で使用使用する電気機械器具は、爆発危険箇所の種別に応じ、「電気機械器具防爆構造規格（昭和44年労働省告示第16号。以下「構造規格」）※

ウ 石油精製、化学工業（石油化学を含む。）等のプラントの爆発危険箇所については、「危険物施設における可燃性蒸気の滞留するおそれのある場所に関する運用について」（平成31年4月24日消防危第84号（令和2年1月23日消防危第21号改正））によることができる。予防規程の策定義務対象については、本通知を適用する場合、自主行動計画を予防規程に添付して認可を受けること。（令和2年1月27日消保安第473号）

4 防爆構造の種類
（省略）

5 使用する電気設備

爆発危険箇所で使用使用する電気機械器具は、爆発危険箇所の種別に応じ、「電気機械器具防爆構造規格（昭和44年労働省告示第16号。以下「構造規格」）※

¹という。)に適合するもの又は構造規格第5条に基づく、構造規格に適合するものと同等以上の防爆性能を有することを確認するための基準(令和3年8月12日基発0812第5号。以下「労働基準局長通達」^{※2}という。)に適合するほか次の事項に留意すること。

(1) 爆発危険箇所の種別ごとの電気機械器具の選定については、表3-2-1を参考とすること。また、第一類危険箇所における安全増防爆構造の機器の選定は、国際整合防爆指針では適するものとされているが、工場電気設備防爆指針では故障又は劣化によって万一発火源を生じた場合の防爆性が保証されていないことから適さないものとされている。よって、第一類危険箇所において安全増防爆構造の機器を選定する場合は、国際整合防爆指針の検定を受けたものを使用するよう指導すること。

(2) IEC規格や海外の認証を取得している防爆機器であっても、国内の爆発危険箇所で使用する電気機械器具は、検定に合格し、検定合格標章(図3-2-18)を付す必要があり、表示のない防爆電気機器は使用してはならない旨が示されていることに留意すること。
(労働衛生安全法第44条の2関係)

(3) 爆発危険箇所における電気工事については、「電気設備の技術基準の解釈(平成25年3月14日付け20130215商局第4号制定)」及び「工場電気設備防爆指針(ガス蒸気防爆2006) NIIS-TR-N0.39(2006)」を参考とすること。

なお、危険物施設においては、爆発危険箇所以外の場所においても、一般に行われている工事方法の中で安全度の高いもののみが認められていることに留意すること。

※1 構造規格の技術的指針としては、労働安全衛生総合研究所が発行する「工場電気設備防爆指針(ガス蒸気防爆2006) NIIS-TR-N0.39(2006)」がある。

※2 労働基準局長通達では「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2015)」、「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2018)」及び「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2020)」を引用して基準が定められている。

表3-2-1 電気機器の防爆構造の選定の原則
(省略)

¹という。)に適合するもの又は構造規格第5条に基づく、構造規格に適合するものと同等以上の防爆性能を有することを確認するための基準(令和3年8月12日基発0812第5号。以下「労働基準局長通達」^{※2}という。)に適合するほか次の事項に留意すること。

(1) 爆発危険箇所の種別ごとの電気機械器具の選定については、表3-2-1を参考とすること。また、第一類危険箇所における安全増防爆構造の機器の選定は、国際整合防爆指針では適するものとされているが、工場電気設備防爆指針では故障又は劣化によって万一発火源を生じた場合の防爆性が保証されていないことから適さないものとされている。よって、第一類危険箇所において安全増防爆構造の機器を選定する場合は、国際整合防爆指針の検定を受けたものを使用するよう指導すること。

(2) IEC規格や海外の認証を取得している防爆機器であっても、国内の爆発危険箇所で使用する電気機械器具は、検定に合格し、検定合格標章(図3-2-17)を付す必要があり、表示のない防爆電気機器は使用してはならない旨が示されていることに留意すること。
(労働衛生安全法第44条の2関係)

(3) 爆発危険箇所における電気工事については、「電気設備の技術基準の解釈(平成25年3月14日付け20130215商局第4号制定)」及び「工場電気設備防爆指針(ガス蒸気防爆2006) NIIS-TR-N0.39(2006)」を参考とすること。

なお、危険物施設においては、爆発危険箇所以外の場所においても、一般に行われている工事方法の中で安全度の高いもののみが認められていることに留意すること。

※1 構造規格の技術的指針としては、労働安全衛生総合研究所が発行する「工場電気設備防爆指針(ガス蒸気防爆2006) NIIS-TR-N0.39(2006)」がある。

※2 労働基準局長通達では「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2015)」、「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2018)」及び「工場電気設備防爆指針(国際整合防爆指針2020)」を引用して基準が定められている。

表3-2-1 電気機器の防爆構造の選定の原則
(省略)

所要の整備

6 電気機械器具の防爆構造の表示等

(1) 防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章

機械等検定規則（昭和47年労働省令第45号）様式第11号で定められている合格標章は、図3-2-18によって示されるものであること。

(防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章)



備考

1 この型式検定合格標章は、次に定めるところによること。

(1) 正方形とし、次に示す寸法のいずれかによること。

一辺の長さ(L)	ふちの幅(l)
イ 1.3センチメートル	0.1センチメートル
ロ 2.0センチメートル	0.1センチメートル
ハ 3.2センチメートル	0.2センチメートル
ニ 5.0センチメートル	0.2センチメートル
ホ 8.0センチメートル	0.3センチメートル

(2) 材質は、金属その他耐久性のあるものとする。

(3) 地色は黒色とし、字、ふち及び線は黄色又は淡黄色とすること。

2 「労(年月)検」の欄中(年月)は、型式検定に合格した年月又は更新検定に合格した年月を(昭48.4)のごとく表示すること。

図3-2-18 防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章

(2) 電気機械器具の防爆構造の表示

防爆構造の電気機械器具には、当該機器の本体の見やすい位置に、防爆構造の種類、対象とする引火性危険物の蒸気の爆発等級及び発火度等が記号によって示されている。記号は、構造規格による表記と国際整合防爆指針による表記があるため、次のとおり例示する。

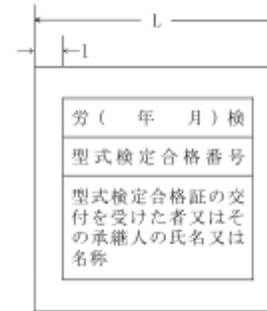
ア 構造規格による防爆記号例

6 電気機械器具の防爆構造の表示等

(1) 防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章

機械等検定規則（昭和47年労働省令第45号）様式第11号で定められている合格標章は、図3-2-17によって示されるものであること。

(防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章)



備考

1 この型式検定合格標章は、次に定めるところによること。

(1) 正方形とし、次に示す寸法のいずれかによること。

一辺の長さ(L)	ふちの幅(l)
イ 1.3センチメートル	0.1センチメートル
ロ 2.0センチメートル	0.1センチメートル
ハ 3.2センチメートル	0.2センチメートル
ニ 5.0センチメートル	0.2センチメートル
ホ 8.0センチメートル	0.3センチメートル

(2) 材質は、金属その他耐久性のあるものとする。

(3) 地色は黒色とし、字、ふち及び線は黄色又は淡黄色とすること。

2 「労(年月)検」の欄中(年月)は、型式検定に合格した年月又は更新検定に合格した年月を(昭48.4)のごとく表示すること。

図3-2-17 防爆構造電気機械器具用型式検定合格標章

(2) 電気機械器具の防爆構造の表示

防爆構造の電気機械器具には、当該機器の本体の見やすい位置に、防爆構造の種類、対象とする引火性危険物の蒸気の爆発等級及び発火度等が記号によって示されている。記号は、構造規格による表記と国際整合防爆指針による表記があるため、次のとおり例示する。

ア 構造規格による防爆記号例

所要の整備

所要の整備

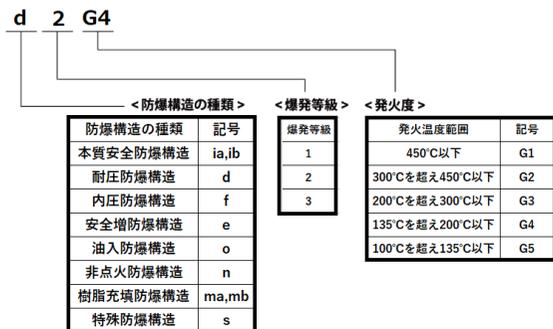


図3-2-19 防爆記号例①

イ 国際整合防爆指針（2008）による防爆記号例

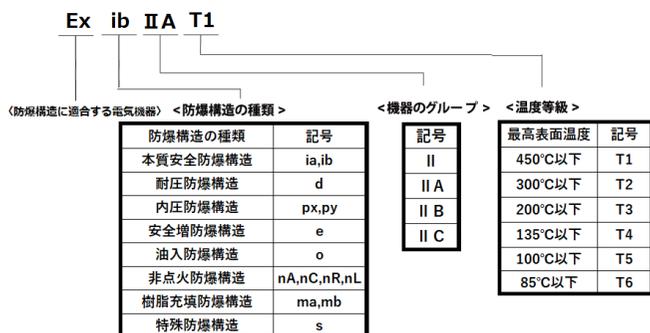


図3-2-20 防爆記号例②

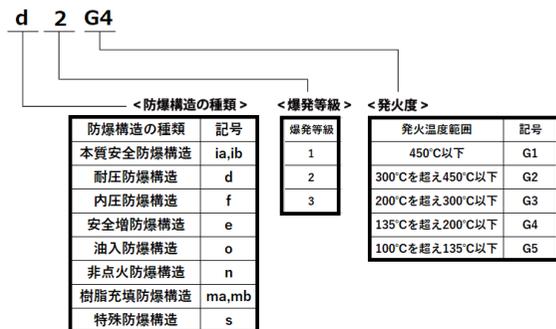


図3-2-18 防爆記号例①

イ 国際整合防爆指針（2008）による防爆記号例

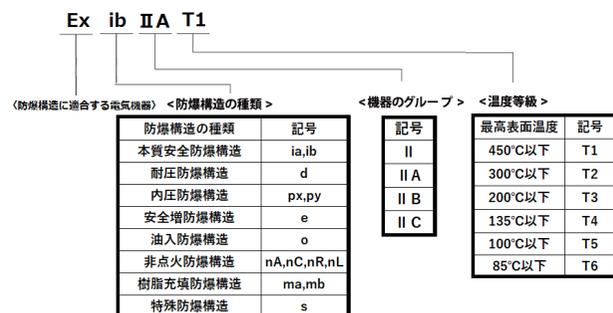
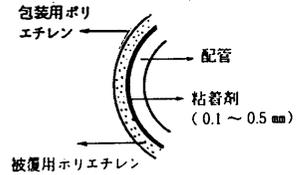
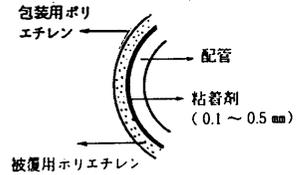
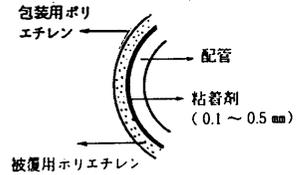


図3-2-19 防爆記号例②

所要の整備

所要の整備

現 行	改 正 案	理 由				
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 4 地下配管の防食措置の基準</p> <p>地下配管の防食措置については、危険物告示によるほか次の表の例によること。</p> <p>なお、廃止された日本工業規格G3491「水道用鋼管アスファルト塗覆装方法」に適合する塗覆装材及び塗覆装の方法により施工される配管の塗覆装は、危険物告示第 3 条第 1 号及び第 2 号並びに第 22 条第 1 号及び第 2 号に適合するものとして、これまでと同様に認められる。（平成 23 年 12 月 21 日消防危第 302 号）</p> <p>表 3-4 <u>1</u> 危険物告示第 3 条及び第 22 条に規定する塗覆装及びこれと同等以上の防食効果を有する防食措置の例 (省略)</p> <p>表 3-4-2 危険物告示第 3 条の 2 に規定するコーティングの例</p> <table border="1" data-bbox="107 979 990 1410"> <thead> <tr> <th data-bbox="107 979 452 1026">施工方法</th> <th data-bbox="452 979 990 1026">備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="107 1026 452 1410"> <p>ポリエチレン被覆鋼管</p>  </td> <td data-bbox="452 1026 990 1410"> <p>(危険物告示第 3 条の 2)</p> <p>口径 15A～90A の配管に、ポリエチレンを 1.5mm の厚さで被覆したもの。粘着剤はゴム、アスファルト系及び樹脂を主成分としたもの。被覆用ポリエチレンはエチレンを主体とした重合体で微量の滑剤、酸化防止剤を加えたもの</p> </td> </tr> </tbody> </table>	施工方法	備考	<p>ポリエチレン被覆鋼管</p> 	<p>(危険物告示第 3 条の 2)</p> <p>口径 15A～90A の配管に、ポリエチレンを 1.5mm の厚さで被覆したもの。粘着剤はゴム、アスファルト系及び樹脂を主成分としたもの。被覆用ポリエチレンはエチレンを主体とした重合体で微量の滑剤、酸化防止剤を加えたもの</p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 4 地下配管の防食措置の基準</p> <p>地下配管の防食措置については、危険物告示によるほか次の表の例によること。</p> <p>なお、廃止された日本工業規格 G3491「水道用鋼管アスファルト塗覆装方法」に適合する塗覆装材及び塗覆装の方法により施工される配管の塗覆装は、危険物告示第 3 条第 1 号及び第 2 号並びに第 22 条第 1 号及び第 2 号に適合するものとして、これまでと同様に認められる。（平成 23 年 12 月 21 日消防危第 302 号）</p> <p>表 3-4 危険物告示第 3 条及び第 22 条に規定する塗覆装及びこれと同等以上の防食効果を有する防食措置の例 (省略)</p> <p><u>(削除)</u></p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
施工方法	備考					
<p>ポリエチレン被覆鋼管</p> 	<p>(危険物告示第 3 条の 2)</p> <p>口径 15A～90A の配管に、ポリエチレンを 1.5mm の厚さで被覆したもの。粘着剤はゴム、アスファルト系及び樹脂を主成分としたもの。被覆用ポリエチレンはエチレンを主体とした重合体で微量の滑剤、酸化防止剤を加えたもの</p>					

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 7 ドレンチャー設備の基準</p> <p>ドレンチャー設備の基準は、次によること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ドレンチャーヘッドは、開口部の上枠に、当該上枠の長さ 2.5 メートル以下ごとに 1 個設けること。 2 制御弁は、防火対象物の階ごとに、その階の床面からの高さが 0.8 メートル以上、1.5 メートル以下の位置に設けること。 3 水源は、その水量がドレンチャーヘッドの設置個数に 0.4 立方メートル（屋内給油取扱所については 1.3 立方メートル）を乗じて得た量以上の量となるように設けること。 4 ドレンチャー設備は、全てのドレンチャーヘッドを同時に使用した場合に、それぞれのヘッドの先端において放水圧力が、0.1 メガパスカル（屋内給油取扱所については 0.3 メガパスカル）以上で、かつ、放水量が 40 リットル毎分（屋内給油取扱所については 130 リットル毎分）以上の性能のものとする事。 5 ドレンチャー設備には、双口形の送水口を附置すること。 6 水源に連結する加圧送水装置は点検に便利で、かつ、火災等の災害による被害を受けるおそれが少ない箇所に設けること。 7 その他の基準については、消防用設備等設置規制事務審査基準（昭和 63 年 5 月 30 日消指第 59 号）第 3 章第 1 節第 3 「スプリンクラー設備」<u>17</u>「開口部に設けるドレンチャー設備の技術的基準」の例によること。 	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 7 ドレンチャー設備の基準</p> <p>ドレンチャー設備の基準は、次によること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ドレンチャーヘッドは、開口部の上枠に、当該上枠の長さ 2.5 メートル以下ごとに 1 個設けること。 2 制御弁は、防火対象物の階ごとに、その階の床面からの高さが 0.8 メートル以上、1.5 メートル以下の位置に設けること。 3 水源は、その水量がドレンチャーヘッドの設置個数に 0.4 立方メートル（屋内給油取扱所については 1.3 立方メートル）を乗じて得た量以上の量となるように設けること。 4 ドレンチャー設備は、全てのドレンチャーヘッドを同時に使用した場合に、それぞれのヘッドの先端において放水圧力が、0.1 メガパスカル（屋内給油取扱所については 0.3 メガパスカル）以上で、かつ、放水量が 40 リットル毎分（屋内給油取扱所については 130 リットル毎分）以上の性能のものとする事。 5 ドレンチャー設備には、双口形の送水口を附置すること。 6 水源に連結する加圧送水装置は点検に便利で、かつ、火災等の災害による被害を受けるおそれが少ない箇所に設けること。 7 その他の基準については、消防用設備等設置規制事務審査基準（昭和 63 年 5 月 30 日消指第 59 号）第 3 章第 1 節第 3 「スプリンクラー設備」<u>18</u>「開口部に設けるドレンチャー設備の技術的基準」の例によること。 	<p style="text-align: center;">所要の整備</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 10 防油堤の構造等に関する運用基準 （昭和52年11月14日消防危第162号） 屋外タンク貯蔵所に設ける鉄筋コンクリート、盛土等による防油堤の構造は、次の基準によるものとする。 なお、既設防油堤を改修する場合においても同様とする。</p> <p>1～9 （省略）</p> <p>10 防油堤の地表面下の地盤の部分を管きよ等が横断する箇所の措置について 防油堤の地表面下の地盤の部分を管きよ等が横断する箇所の漏出防止措置等は、次によるものとする。 （1）防油堤の地表面下の地盤の部分を横断して入出荷用配管、消火用配管、排水用管、電線路、連結工用函きよ等のうち呼び径が40Aを超えるもの（以下「管きよ等」という。）を設けないこと。ただし、次に掲げる措置を講じた場合は必要最小限の管きよ等に限り、防油堤の地表面下の地盤の部分を横断して設置することができるものであること。 なお、この場合においては、（2）ア又はイの措置を併せて実施することが望ましいものであること。 ア 管きよ等は防油堤築造前に埋設すること。 イ 鉄筋コンクリート造防油堤にあってはその壁内面から、盛土造防油堤にあってはその表のり尻からそれぞれ4メートル以上、鉄筋コンクリート造防油堤にあってはそのフーチング外端から、盛土造防油堤にあってはその裏のり尻からそれぞれ1メートル以上の範囲について次の要領で埋戻しを行うこと（図4-10-11参照）。 （ア）良質な埋戻し材料を用い適切な機械で十分な締固めを行うこと。</p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 10 防油堤の構造等に関する運用基準 （昭和 52 年 11 月 14 日消防危第 162 号） 屋外タンク貯蔵所に設ける鉄筋コンクリート、盛土等による防油堤の構造は、次の基準によるものとする。 なお、既設防油堤を改修する場合においても同様とする。</p> <p>1～9 （省略）</p> <p>10 防油堤の地表面下の地盤の部分を管きよ等が横断する箇所の措置について 防油堤の地表面下の地盤の部分を管きよ等が横断する箇所の漏出防止措置等は、次によるものとする。 （1）防油堤の地表面下の地盤の部分を横断して入出荷用配管、消火用配管、排水用管、電線路、連結工用函きよ等のうち呼び径が 40A を超えるもの（以下「管きよ等」という。）を設けないこと。ただし、次に掲げる措置を講じた場合は必要最小限の管きよ等に限り、防油堤の地表面下の地盤の部分を横断して設置することができるものであること。 なお、この場合においては、（2）ア又はイの措置を併せて実施することが望ましいものであること。 ア 管きよ等は防油堤築造前に埋設すること。 イ 鉄筋コンクリート造防油堤にあってはその壁内面から、盛土造防油堤にあってはその表のり尻からそれぞれ4メートル以上、鉄筋コンクリート造防油堤にあってはそのフーチング外端から、盛土造防油堤にあってはその裏のり尻からそれぞれ1メートル以上の範囲について次の要領で埋戻しを行うこと（図3-10-11参照）。 （ア）良質な埋戻し材料を用い適切な機械で十分な締固めを行うこと。</p>	<p style="text-align: center;">所要の整備</p>

なお、埋設した管きよ等の周囲は、特に念入りに締固めを行うこと。

(イ) 平坦に敷きならし、一層ごとの締固め厚さはおおむね 20 センチメートル以下とすること。

(2)～(4) 別添 (省略)

なお、埋設した管きよ等の周囲は、特に念入りに締固めを行うこと。

(イ) 平坦に敷きならし、一層ごとの締固め厚さはおおむね 20 センチメートル以下とすること。

(2)～(4) 別添 (省略)

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 22 地下貯蔵タンク等の漏れの点検の細部運用</p> <p>地下貯蔵タンク等の定期点検のうち、危険物規則第 62 条の 5 の 2 及び危険物規則第 62 条の 5 の 3 に定める漏れの点検（以下「漏れの点検」という。）は次により実施させること。</p> <p>1 漏れの点検実施方法 危険物告示第 71 条及び危険物告示第 71 条の 2 で定める方法により実施させること。このうち「その他の方法」とは、原則として財団法人全国危険物安全協会が実施する性能評価において「適合」と評価された点検方法及び機器を用いたものであること。</p> <p>2 その他 漏れの点検に伴う地下貯蔵タンク及び専用タンクからの危険物を抜き取る行為については、次のとおりとすること。 なお、届出にあつては、第 4 章第 2 2 (3) ア (ア) に準じて簡素化することができるものであること。 <u>(1)</u> 市規則第 16 条第 1 項に基づく「危険物製造所等軽微な変更工事届出書」により、流出防止措置等の安全対策を確認すること。 <u>(2)</u> 地下タンク貯蔵所での危険物の抜き取り行為後に指定数量以上の危険物をドラム缶等により、翌日におよぶような貯蔵する場合は、仮貯蔵の承認が必要であること。 また、抜き取った危険物を移動タンク貯蔵所に貯蔵する場合は、移送中となるものであること。 <u>(3)</u> 製造所又は取扱所での危険物の抜き取り行為後に指定数量以上の危険物をドラム缶等により翌日に及ぶような貯蔵する場合は、(1)の届出内容に盛り込むこと。 <u>(4)</u> 漏れの点検の結果、異常が認められる場合は、直ちに消防署長宛</p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 22 地下貯蔵タンク等の漏れの点検の細部運用</p> <p>地下貯蔵タンク等の定期点検のうち、危険物規則第 62 条の 5 の 2 及び危険物規則第 62 条の 5 の 3 に定める漏れの点検（以下「漏れの点検」という。）は次により実施させること。</p> <p>1 漏れの点検実施方法 危険物告示第 71 条及び危険物告示第 71 条の 2 で定める方法により実施させること。このうち「その他の方法」とは、原則として財団法人全国危険物安全協会が実施する性能評価において「適合」と評価された点検方法及び機器を用いたものであること。</p> <p>2 その他 <u>(1)</u> 漏れの点検に伴う地下貯蔵タンク及び専用タンクからの危険物を抜き取る行為については、次のとおりとすること。 なお、届出にあつては、第 4 章第 2 2 (3) ア (ア) に準じて簡素化することができるものであること。 <u>ア</u> 市規則第 16 条第 1 項に基づく「危険物製造所等軽微な変更工事届出書」により、流出防止措置等の安全対策を確認すること。 <u>イ</u> 地下タンク貯蔵所での危険物の抜き取り行為後に指定数量以上の危険物をドラム缶等により、翌日におよぶような貯蔵する場合は、仮貯蔵の承認が必要であること。 また、抜き取った危険物を移動タンク貯蔵所に貯蔵する場合は、移送中となるものであること。 <u>ウ</u> 製造所又は取扱所での危険物の抜き取り行為後に指定数量以上の危険物をドラム缶等により翌日に及ぶような貯蔵する場合は、(1)の届出内容に盛り込むこと。 <u>エ</u> 漏れの点検の結果、異常が認められる場合は、直ちに消防署長</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>

<p>報告させるとともに、危険物告示で定める方法により、再度漏れの点検を実施すること。</p> <p><u>(5) 参考として、漏れの点検の周期等のフローを図3-22-1、3-22-2に示す。</u></p> <p>図3-22-1 地下貯蔵タンク等の漏れの点検周期等のフロー</p> <p>(省略)</p> <p>図3-22-2 地下埋設配管の漏れの点検周期等のフロー</p>	<p>宛報告させるとともに、危険物告示で定める方法により、再度漏れの点検を実施すること。</p> <p><u>(2) 漏れの点検の周期等のフローを図3-22-1、3-22-2に示す。</u></p> <p><u>(3) 漏れの点検周期チェックリストを図3-22-3、その他の点検方法等を図3-22-4に示す。</u></p> <p><u>3 留意事項</u></p> <p><u>(1) 「地下埋設配管」は、危険物規則第62条の5の3において「製造所等のうち地盤面に設置された配管」と定義されているが、蓋付きピット内に設置されている配管など、地下埋設配管の外観点検ができるものについては、漏れの点検対象外として取扱うことができるものであること。</u></p> <p><u>(2) 漏れの点検は、すべての製造所、貯蔵所又は取扱所に設置された地下貯蔵タンク及び地下埋設配管が対象であること。地下タンク貯蔵所、給油取扱所に限り適用されるものではないことに留意すること。</u></p> <p><u>(3) 地下貯蔵タンクの点検周期と地下埋設配管の点検周期はそれぞれ確認が必要であること。よって、地下貯蔵タンクと地下埋設配管の点検周期が異なる場合や、漏れの点検をしなくて良い地下貯蔵タンクであっても、地下埋設配管については点検を要する場合などが考えられるものであること。</u></p> <p><u>(4) 休止中の製造所等など、危険物の取扱いが休止され保安上支障がないと認められる場合については、「休止中の地下貯蔵タンク又は二重殻タンクの漏れの点検期間延長申請書」及び「休止中の地下埋設配管の漏れの点検期間延長申請書」の申請により点検期間を延長させることができるものであること。</u></p> <p>図3-22-1 地下貯蔵タンク等の漏れの点検周期等のフロー</p> <p>(省略)</p> <p>図3-22-2 地下埋設配管の漏れの点検周期等のフロー</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------

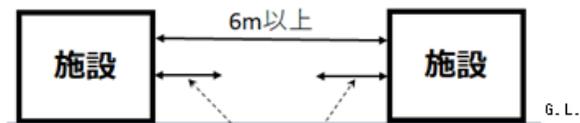
評価番号	名称	点検方法等	(A) 測線の点検方法 (点検の方法)		(B) 地下埋設物点検 (埋設物の点検)		(C) 地下埋設物点検 (埋設物の点検)		(D) 地下埋設物点検 (埋設物の点検)		(E) 地下埋設物点検 (埋設物の点検)		(F) 地下埋設物点検 (埋設物の点検)		申請者
			地下埋設物点検 1項 目	地下埋設物点検 2項 目	地下埋設物点検 3項 目	地下埋設物点検 4項 目	地下埋設物点検 5項 目	地下埋設物点検 6項 目	地下埋設物点検 7項 目	地下埋設物点検 8項 目	地下埋設物点検 9項 目	地下埋設物点検 10項 目	地下埋設物点検 11項 目	地下埋設物点検 12項 目	
			○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	
全点検第1号 (No.1)	パルセータ方式の地下埋設物探知システム	地下埋設物探知システム及び地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	㈱エスピー・システム 〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 TEL: 03-5521-8441
全点検第2号 (No.2)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第3号 (No.3)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第4号 (No.4)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第5号 (No.5)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第6号 (No.6)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第7号 (No.7)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第8号 (No.8)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第9号 (No.9)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第10号 (No.10)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第11号 (No.11)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第12号 (No.12)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第13号 (No.13)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第14号 (No.14)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第15号 (No.15)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第16号 (No.16)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第17号 (No.17)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第18号 (No.18)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第19号 (No.19)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第20号 (No.20)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第21号 (No.21)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第22号 (No.22)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	
全点検第23号 (No.23)	電位差探知 (200-3000、3000-4000、4000-5000)	地下埋設物探知システムの点検方法	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	東京建設工務23-24 TEL: 03-5900-2020	

図3-22-4 その他の点検方法等 (2023年2月現在)

新 旧 対 照 表

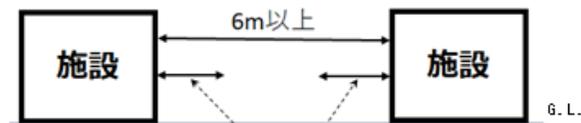
危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p data-bbox="168 295 907 343">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p data-bbox="94 399 683 430">第23 危険物製造所等の保有空地等における植栽</p> <p data-bbox="94 478 996 582">本市の工場等の緑化事業については、「緑の環境をつくり育てる条例」（昭和48年6月横浜市条例第47号）により、緑化することとされているので、<u>環境創造局</u>と協議し、植栽範囲等を明確にし、適切な指導を図るものとする。</p> <p data-bbox="94 630 291 662">1～3 （省略）</p>	<p data-bbox="1108 295 1848 343">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p data-bbox="1034 399 1624 430">第 23 危険物製造所等の保有空地等における植栽</p> <p data-bbox="1034 478 1937 582">本市の工場等の緑化事業については、「緑の環境をつくり育てる条例」（昭和48年6月横浜市条例第 47 号）により、緑化することとされているので、<u>みどり環境局</u>と協議し、植栽範囲等を明確にし、適切な指導を図るものとする。</p> <p data-bbox="1034 630 1232 662">1～3 （省略）</p>	<p data-bbox="1982 478 2161 582">市組織・機構改革に伴う修正</p>



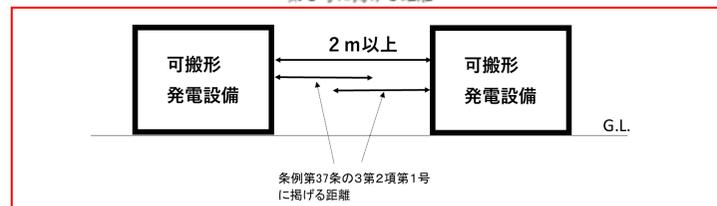
条例第37条の3第2項
第1号に掲げる距離

図3-24-1

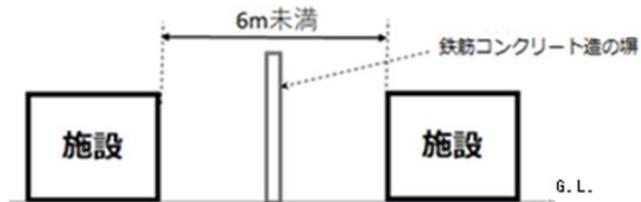


条例第37条の3第2項
第1号に掲げる距離

図3-24-1

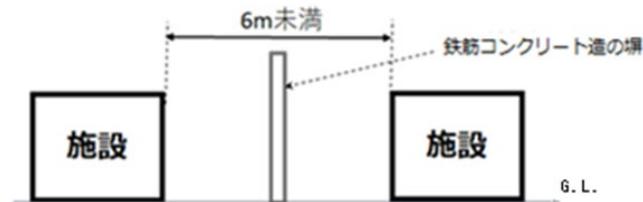


条例第37条の3第2項第1号
に掲げる距離



塀と施設の間には、空地が保有されていること。

図3-24-2



塀と施設の間には、空地が保有されていること。

図3-24-2

(2) 屋内における場合
(省略)

(2) 屋内における場合
(省略)

(3) その他の場合
ア～エ (省略)

(3) その他の場合
ア～エ (省略)

オ リチウムイオン蓄電池を箱に収納して貯蔵する場合
電解液量の総量が指定数量未満の蓄電池を、出入口（厚さ1.6
ミリメートル以上の鋼板又はこれと同等以上の性能を有する材
料で造られたものに限る。）以外の開口部を有しない厚さ1.6ミ
リメートル以上の鋼板又はこれと同等以上の性能を有する材料
で造られた箱に収納し、当該箱を複数置く場合にあっては、設置
場所にかかわらず、当該箱を一の貯蔵場所として数量を算定する
こと（平成23年12月27日消防危第303号関係）。

オ リチウムイオン蓄電池又は蓄電池設備を耐火性収納箱等に収
納する場合
耐火性収納箱に収納し、又は耐火性筐体により覆われた蓄電池
等を貯蔵し、又は取り扱う場合、次の(ア)及び(イ)を満たすときは、
耐火性収納箱又は耐火性筐体（以下「耐火性収納箱等」という。）
ごとの指定数量の倍数を合算しないこととして差し支えないこ
と。また、耐火性収納箱等ごとの相互間の距離は不要であること
（平成23年12月27日消防危第303号関係（全部改正：令和6

所要の整備

所要の整備

<p>4 留意事項等</p> <p>(1) 一の棟において、危険物の総量（3(3)エ及びオを除く。）が指定</p>	<p>年7月2日消防危第200号))。</p> <p><u>(7) 耐火性収納箱等内の危険物の総量が指定数量未満であること。</u></p> <p><u>(イ) 耐火性収納箱等には、横浜市火災予防条例第37条の2第2項第1号の規定による標識及び掲示板の設置に加え、見やすい箇所に蓄電池等を収納している旨を表示すること。</u></p> <p><u>カ キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備を貯蔵する場合</u> 蓄電池設備の電解液量が指定数量未満であって、かつ、当該蓄電池設備を厚さ1.6mm以上の鋼板で造られたキュービクルに収納する場合、開口部を必要な耐火性を有する布で覆うことにより、蓄電池設備ごとの指定数量の倍数を合算せず、それぞれを指定数量未満の危険物を貯蔵する場所として扱うものであること。また、当該措置を講じた場合、蓄電池設備ごとの離隔距離は不要であること（令和4年4月27日消防危第96号関係）。</p> <p><u>キ 車載用リチウムイオン蓄電池を貯蔵する場合</u> 指定数量未満の車載用リチウムイオン蓄電池に耐火性を有する布で覆うなど、一定の措置を講じた場合、指定数量の倍数を合算せず、それぞれを指定数量未満の危険物を貯蔵する場所とすることができること。また、当該措置を講じた場合、蓄電池ごとの離隔距離は不要であること（令和4年12月26日消防危第295号関係（最近改正：令和6年3月28日消防危第55号））。</p> <p><u>ク 鋼板製の筐体で覆われる車載用リチウムイオン蓄電池について</u> 電気自動車の製造等に伴い一時的に建築物内に置く必要がある車載用リチウムイオン蓄電池である場合、当該車載用リチウムイオン蓄電池等の状況が令和5年7月7日消防危第214号の1(1)から(3)の要件に該当する場合は、当該車載用リチウムイオン蓄電池が含有する危険物については、指定数量の倍数の合算に含めない（令和5年7月7日消防危第214号関係）。 <u>なお、原則、電気自動車の製造が行われない一般倉庫内の車載用リチウムイオン電池の貯蔵に際し、令和5年7月7日第214号通知は適用しない。</u></p> <p>4 留意事項等</p> <p>(1) 一の棟において、危険物の総量（3(3)エからクを除く。）が指定</p>	<p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p> <p>所要の整備</p>
-----------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

<p>数量以上となるもののうち、製造所等に対して適用される指定数量の倍数、建物構造、床面積、階数などの制限（法第 10 条第 4 項に規定する位置、構造及び設備の技術上の基準）を考慮し、火災危険性が高くなるものや消防活動上支障となると認められるものについては、法第 10 条第 1 項に規定する製造所等として計画するよう指導すること。</p> <p>なお、火災危険性が高くなるものや消防活動上支障となると認められるものの例としては、次のものが考えられる。</p> <p>ア 危険物を貯蔵する場所の床面積の合計又は指定数量の倍数の合計が危険物令第 10 条第 3 項に規定する屋内貯蔵所の上限を超えるもの</p> <p>イ 1 階又は 2 階以外の階に危険物を貯蔵する場所が複数設置されるもの（危険物令第 10 条第 3 項関係）</p> <p>ウ 少量危険物貯蔵・取扱所等の床面積の合計が、貯蔵又は取扱いの形態に応じ、著しく消火困難な製造所等となる面積以上のもの（危険物規則第 33 条関係）</p> <p>(2) 危険物令において地階への設置が認められている発電機等以外の形態の少量危険物貯蔵・取扱所については、地階に複数設置しないよう指導すること。（危険物令第 9 条第 1 項第 4 号、危険物規則第 28 条の 57 第 2 項、第 3 項等関係）</p> <p>(3) 運用に際し、条例に規定する技術上の基準によることが前提となることに留意すること。</p> <p>(4) 貯蔵し、取り扱う危険物の類、品名等の種類についての制限はないが、条例第 37 条の 7 によるほか、類の異なる危険物を近接して保管しないことなど安全性を十分に確保するよう指導すること。</p> <p>(5) 部分規制の製造所等と少量危険物貯蔵・取扱所がそれぞれの技術上の基準に適合する場合は、一の棟に併設することができること。</p>	<p>数量以上となるもののうち、製造所等に対して適用される指定数量の倍数、建物構造、床面積、階数などの制限（法第 10 条第 4 項に規定する位置、構造及び設備の技術上の基準）を考慮し、火災危険性が高くなるものや消防活動上支障となると認められるものについては、法第 10 条第 1 項に規定する製造所等として計画するよう指導すること。</p> <p>なお、火災危険性が高くなるものや消防活動上支障となると認められるものの例としては、次のものが考えられる。</p> <p>ア 危険物を貯蔵する場所の床面積の合計又は指定数量の倍数の合計が危険物令第 10 条第 3 項に規定する屋内貯蔵所の上限を超えるもの</p> <p>イ 1 階又は 2 階以外の階に危険物を貯蔵する場所が複数設置されるもの（危険物令第 10 条第 3 項関係）</p> <p>ウ 少量危険物貯蔵・取扱所等の床面積の合計が、貯蔵又は取扱いの形態に応じ、著しく消火困難な製造所等となる面積以上のもの（危険物規則第 33 条関係）</p> <p>(2) 危険物令において地階への設置が認められている発電機等以外の形態の少量危険物貯蔵・取扱所については、地階に複数設置しないよう指導すること。（危険物令第 9 条第 1 項第 4 号、危険物規則第 28 条の 57 第 2 項、第 3 項等関係）</p> <p>(3) 運用に際し、条例に規定する技術上の基準によることが前提となることに留意すること。</p> <p>(4) 貯蔵し、取り扱う危険物の類、品名等の種類についての制限はないが、条例第 37 条の 7 によるほか、類の異なる危険物を近接して保管しないことなど安全性を十分に確保するよう指導すること。</p> <p>(5) 部分規制の製造所等と少量危険物貯蔵・取扱所がそれぞれの技術上の基準に適合する場合は、一の棟に併設することができること。</p> <p><u>(6) 本運用における、「厚さ 70 ミリメートル以上の鉄筋コンクリート造又はこれと同等以上の強度を有する構造について」は、①「耐火構造の構造方法を定める件」（平成 12 年建設省告示第 1399 号）第 1 第 1 号に適合する壁及び第 3 第 1 号に適合する床、及び②建築基準法第 2 条第 7 号並びに同法施行令第 107 条第 1 号及び第 2 号（第 1 号にあっては、通常の火災による加熱が 2 時間加えられた場合のものに限る。）の技術的基準に適合するものとして国土交通大臣の認定を受けた耐力壁である間仕切壁及び床が含まれるものである</u></p>	<p>所要の整備</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

<p>5 既存施設の取扱い</p> <p>現に条例第 76 条に基づき届出されている少量危険物貯蔵・取扱所のうち、本運用に適合しないものに係る技術上の基準については、本運用にかかわらず、なお従前の例によること。</p>	<p><u>こと。</u></p> <p>5 既存施設の取扱い</p> <p><u>令和 4 年 3 月 24 日時点において</u>、現に条例第 76 条に基づき届出されている少量危険物貯蔵・取扱所のうち、本運用に適合しないものに係る技術上の基準については、本運用にかかわらず、なお従前の例によること。</p>	<p>所要の整備</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 <u>43</u> リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いに係る運用 （平成 23 年 12 月 27 日消防危第 303 号、<u>令和 4 年 4 月 27 日消防危第 96 号</u>）</p> <p><u>1 運用の適用対象となるリチウムイオン蓄電池に関する事項</u> <u>(1) 運用の適用対象となるリチウムイオン蓄電池について</u> <u>2 に掲げる技術基準の適用は、一定の安全対策が講じられ発火危険性が低減されているリチウムイオン蓄電池（以下「蓄電池」という。）である次のア又はイに掲げるもののみ適用できるものであること。</u> <u>ア 電気用品安全法（昭和 36 年法律第 234 号）第 8 条第 1 項に基づく電気用品の技術上の基準を定める省令（昭和 37 年通商産業省令第 85 号）別表第 9 に規定する技術基準に適合している蓄電池。（別紙 1 参照）</u> <u>イ 国際海事機関が採択した危険物の運送に関する規程に定める技術基準に適合している蓄電池（電気用品安全法の適用を受けない蓄電池に限る。）。（別紙 2 参照）</u> <u>(2) 蓄電池の電気用品安全法等に規定する技術基準への適合状況の確認について</u> <u>ア (1)アに掲げる蓄電池については、電気用品安全法令に規定する技術基準に適合していることを、電気用品安全法第 10 条に基づく表示（PSE マーク）により確認すること。</u> <u>※ 電気用品安全法に基づく電気用品安全法施行令（昭和 37 年政令第 324 号）別表第 2 第 12 号において、蓄電池は、単電池 1 個当たりの体積エネルギー密度が 400 ワット時毎リットル以上のものに限り、自動車用、原動機付自転車用、医療用機械器具用及び産業用機械器具用のもの並びにはんだ付けその他の接合方法により、容易に取り外すことができない状態で機械</u></p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 <u>42</u> リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いに係る運用 （平成 23 年 12 月 27 日消防危第 303 号、<u>令和 6 年 7 月 2 日消防危第 200 号</u>）</p> <p><u>リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いについては、「リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いに係る運用について」の全部改正について（令和 6 年 7 月 2 日消防危第 200 号）による改正後の「リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いに係る運用について」（平成 23 年 12 月 27 日消防危第 303 号。以下「303 号通知」という。）によるほか、次のとおりとすること。</u></p> <p><u>1 303 号通知上の「火災予防条例（例）第 31 条の 2 第 2 項第 1 号」を「横浜市火災予防条例第 37 条の 2 第 2 項第 1 号」に読み替える。</u></p> <p><u>2 303 号通知上の「火災予防条例（例）第 34 条の 3」を「横浜市火災予防条例第 44 条」に読み替える。</u></p>	<p>所要の整備 （旧第 42 は消防庁通知の廃止に伴い、削除。旧第 43 を新第 42 に変更</p> <p>所要の整備及び審査基準掲載方法の簡略化</p>

器具に固定して用いられるものその他の特殊な構造のものを除くこととされている。

イ (1)イに掲げる蓄電池については、国際海事機関が採択した危険物の運用に関する規程に定める技術基準に適合していることを、事業者が実施している当該技術基準に基づく試験結果により確認すること。

2 リチウムイオン蓄電池の貯蔵及び取扱いに係る技術基準に関する事項

(1) 蓄電池を貯蔵し、又は取り扱う場合に共通する事項について

蓄電池を地上高さ3メートルからコンクリートの床面に落下させる試験（以下「落下試験」という。）を実施し、蓄電池内部から漏液や可燃性蒸気の漏れが確認されない場合にあつては、危険物令第23条又は条例第44条を適用し、当該蓄電池（蓄電池を用いたリチウムイオン蓄電池設備（蓄電池及び電気配線等から構成される設備をいう。以下「蓄電池設備」という。）や電気製品等の場合も含む。以下同じ。）を貯蔵し、又は取り扱う場所について、次に掲げる措置を講ずる必要はないこと。

ア 電気設備を防爆構造とすること。

イ 床を危険物が浸透しない構造とするとともに、適当な傾斜をつけ、かつ貯留設備（ためます）を設けること。

ウ 可燃性の蒸気を屋外の高所に排出する設備を設けること。

なお、落下試験による漏液や可燃性蒸気の漏れの確認については、事業者が実施した試験結果を当該事業者に提出させ、確認を実施して差し支えないこと。

(2) 指定数量未満の危険物を取り扱う自家発電設備の付近に電解液量の総量が指定数量未満の蓄電池設備を設置する場合の取扱いについて

ア 自家発電設備（指定数量未満の危険物を取り扱うものに限る。以下同じ。）の付近に蓄電池設備を設置する場合、当該蓄電池設備の電解液量が指定数量未満であつて、かつ、当該蓄電池設備を、出入口（厚さ1.6ミリメートル以上の鋼板又はこれと同等以上の性能を有する材料で造られたものに限る。）以外の開口部を有しない厚さ1.6ミリメートル以上の鋼板又はこれと同等以上の性能を有する材料で造られた箱（以下、単に「箱」という。）に収

納する場合にあっては、当該自家発電設備と当該蓄電池設備の指定数量の倍数を合算せず、それぞれを指定数量未満の危険物を取り扱う場所として扱うものとする。

イ 蓄電池設備を収納した箱を複数設置する場合は、全ての箱の電解液量を合算し、当該液量を指定数量未満とすること。

ウ ア及びイいずれの場合も自家発電設備との離隔距離は不要であること。また、イの場合において、互いの箱についても離隔距離は不要であること。

エ 箱には条例第 37 条の 2 第 2 項第 1 号の規定による標識及び掲示板の設置に加え、蓄電池を収納している旨を表示すること（例えば、品名に「リチウムイオン蓄電池」等と付記すること。）。

なお、箱には出入口以外の開口部を設けることは原則として認められないが、機能上開口部を設ける必要がある場合は、箱内部及び外部からの延焼を確実に防止するとともに、外部からの可燃性蒸気の流入を確実に防止することができる防火措置を講じた必要最小限の開口部に限り設けることができること。

(3) 電解液量の総量が指定数量未満の蓄電池を箱に収納して貯蔵する場合の取扱いについて

ア 箱に電解液量の総量が指定数量未満の蓄電池を収納し、当該箱を複数置く場合にあっては、箱ごとの指定数量の倍数を合算せず、それぞれを指定数量未満の危険物を貯蔵する場所として扱うものであること。

イ アの要件を満たす場合は、箱ごとの離隔距離は不要であること。

ウ 箱には条例第 37 条の 2 第 2 項第 1 号の規定による標識及び掲示板の設置に加え、蓄電池を収納している旨を表示すること（例えば、品名に「リチウムイオン蓄電池」等と付記すること。）。

(4) その他

電解液量の総量が指定数量以上となる場合の蓄電池設備については危険物規則第 28 条の 60 の 4 によること。

3 キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵に関する事項

キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵については、「キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵に係る運用について」（令和 4 年 4 月 27 日消防危第 96 号。以下「96 号通知」という。）に

よるほか、次のとおりとすること。

(1) 96 号通知別紙 2 1 の例により、キュービクルの全体に耐火性を有する布を袋状にして覆い被せる場合においても、標識及び揭示板は、外部から見やすい箇所に設置する必要があることに留意すること。

(2) 運用に際し、疑義が生じた場合は、保安課危険物保安係と協議すること。

別紙 1

電気用品安全法第 8 条第 1 項に基づく電気用品の技術上の基準を定める省令
別表第 9 に規定するリチウムイオン蓄電池に係る技術基準

試験項目	試験条件	要求事項
通常の使用における安全性に係る試験		
連続定電圧充電時の安全	充電単電池に再度 28 日間定電圧充電を行う。	発火、破裂又は漏液しないこと。
運搬中の振動時の安全	振幅 0.76 mm 及び最大全振幅 1.52 mm の単振動を充電単電池等に加える。振動数は、10Hz から 1Hz/分の割合で増加させ、55Hz に到達した後、1Hz/分の割合で減少させ、10Hz に到達したことを確認する。互いに垂直な 3 方向 (X 軸、Y 軸、Z 軸) のそれぞれの振動の方向で、振動数の全範囲 (10Hz から 55Hz) を 90 ± 5 分間試験する。	発火、破裂又は漏液しないこと。
高温下での組電池容器の安全	充電組電池を、70 ± 2°C の空気循環式オープンの中に 7 時間放置した後、当該空気循環式オープンから取り出し、当該組電池の容器の温度を 20 ± 5°C に戻す。	組電池の内容物の露出を引き起こす変形が起こらないこと。
温度変化時の安全	充電単電池等を 75 ± 2°C の中に 4 時間放置する。その後 30 分以内に 20 ± 5°C に変えて少なくとも 2 時間放置し、30 分以内に -20 ± 2°C に変えて 4 時間放置した後、30 分以内に 20 ± 5°C に変えて少なくとも 2 時間放置する。この手順をさらに 4 回繰り返して、充電単電池等を 20 ± 5°C で 7 日間保管する。	発火、破裂又は漏液しないこと。
予見可能な誤使用における安全性に係る試験		
外部短絡時の安全	充電単電池にあっては周囲温度が 55 ± 5°C の環境に、充電組電池にあっては 20 ± 5°C の環境に放置し、合計 80 ± 20m Ω の外部抵抗に接続して短絡させて状態で、24 時間又は電池容器の温度と周囲温度との差がその最大値 20% 以下となるまでのいずれか短い間放置する。	発火又は破裂しないこと。
落下時の安全	充電単電池等を高さ 1000 mm の地点から任意の向きでコンクリートの床に 3 回落下させる。	発火又は破裂しないこと。
衝撃時の安全	充電単電池等を、固定治工具によって衝撃試験機に固定し、同じ大きさの衝撃を互いに直角な 3 方向 (X 軸、Y 軸、Z 軸) にそれぞれ 1 回ずつ衝撃を加える。充電単電池等に加える衝撃は、最初の 3ms の間に最低平均加速度が 735m/s ² となるように加速する。加速のピーク値は、1228m/s ² から 1716m/s ² とする。	発火、破裂又は漏液しないこと。
異常高温時の安全	20 ± 5°C と同温度の充電単電池を、恒温槽中に置き、恒温槽の温度を 5 ± 2°C/分の昇温速度で 180 ± 2°C まで上昇させ、10 分間放置する。	発火又は破裂しないこと。
圧壊時の安全	充電単電池を、2 枚の平板間に入れ、圧壊装置によって 13 ± 1kN の力で加圧する。最大の圧力が得られること、試験開始時の電圧の 3 分の 1 まで急激な電圧降下が得られること、又は電池高さが 10% の変形が得られることのいずれかの状況が発生した時点で加圧力を開放すること。充電単電池は、その縦軸が圧壊装置の平板と平行になるように加圧すること。充電単電池のうち角形のものにあっては、その縦軸の周りに 90°C 回転して同様の試験を実施し、角形単電池の長側面及び短側面の双方が加圧力を受けるようにすること、この際、1 つの試料は 1 方向だけに加圧力を受けるものとする。	発火又は破裂しないこと。

低圧時の安全	充電単電池を真空チャンバ内に置き、チャンバを閉めた後、徐々に減圧して内部の圧力を 11.6kPa 以下まで減圧し、その状態で6時間保持する。	発火、破裂又は漏液しないこと。
過充電時の安全	充電単電池に対し、10V 以上で使用できる電源を用いて、設計上の充電電流によって定格容量の 250%又は試験電圧に達するまで通電する。	発火又は破裂しないこと。
強制放電時の安全	充電単電池に対し、1ItA で 90 分間逆充電を行う。	発火又は破裂しないこと。
高率充電時の安全	充電単電池を、設計上の最大充電電流の3倍の電流で充電し、満充電になったとき又は機器若しくは組電池で使用する保護素子が動作して充電電流を遮断する。	発火又は破裂しないこと。
強制的な内部短絡時の安全	<p>周囲温度が 20±5℃であり、かつ、露点が-25℃以下である環境において充電単電池を解体し、電極体を当該充電単電池の筐体から取り出した後、コングレル小片(高さ0.2mm×幅0.1mmで各辺1mmのL字型のもの)を正極活物質と負極活物質との間に挿入する。また、活物質層との対向部分に電極基材露出部が存在する場合は、当該部分での試験も実施する。挿入後は、挿入前の電極体配置関係に戻し、電解液蒸気の透過性のない袋に密閉する。充電単電池の解体から袋の密閉までの時間は、30分以内とする。</p> <p>電極体を入れた密閉した袋を、上限試験温度及び下限試験温度でそれぞれ 45±15 分放置し、電極体を袋から取り出す。袋から取り出した後速やかに、上限試験温度及び下限試験温度において、加圧ジグを用い、電極体のコングレル小片挿入部を中心に接触させた状態で 0.1 mm/秒の速度で加圧ジグを降下させる。50mV 以上の電圧降下が観測された時点又は加圧力が 800N に到達した時点のいずれか早い時点で加圧ジグの降下を停止する。ただし、角形単電池の場合は、加圧力が 400N に到達した時点で加圧ジグの降下を停止する。</p> <p>電圧降下が生じていることを5個の試料で確認できるまで、上記の手順で試験を行う。</p>	発火しないこと。
過充電の保護機能	<p>周囲温度が20±5℃である状態において、次のいずれかの方法で試験を行う。</p> <p>イ 1個の電池ブロックで構成される組電池にあつては、充電時に電池ブロックに加えられる電圧を測定する。</p> <p>ロ 電池ブロックを直列に2個以上接続した構造の組電池にあつては、各電池ブロックの電圧を計測しながら充電を行い、同時に一つの電池ブロックを徐々に強制的に放電させ、そのほかの各電池ブロックの電圧を測定する。</p> <p>ハ 電池ブロックを直列に2個以上接続した構造の組電池にあつては、各電池ブロックの電圧を計測しながら上限充電電圧を超える電圧を電池ブロックに加え、充電が停止するときの電圧を測定する。</p>	組電池内の電池ブロックが上限充電電圧を超えないこと。
機器落下時の組電池の安全	周囲温度が 20±5℃の状態において、試験対象機器に応じた落下試験高さから、充電組電池をその使用を想定する機器に装着した状態で、コンクリートの床若しくは鉄板へ組電池に最も悪影響を与えると判断される落下方向へ1回落下させ、又は同等の負荷を当該組電池に与える。	組電池の内部において短絡が生じないこと。

別紙 2

国際海事機関が採択した危険物の運送に関する規程に定めるリチウムイオン蓄電池に係る技術基準

試験項目	試験条件	要求事項
T1：高度シミュレーション	試験電池を周囲温度（20±5℃）、気圧 11.6kPa 以下の減圧雰囲気になくとも6時間貯蔵する。	質量の減少、漏液、弁作動、破裂、破断及び発火がなく完全放電電池を除き、開路電圧が試験直前の90%以上であること。
T2：温度	試験電池を最低6時間試験温度75±2℃に保存し、続いて、最低6時間試験温度-40±2℃に保存する。試験温度間のインターバルは最長30分とする。試験手順を10回繰り返す。その後、試験電池を24時間周囲室温（20±5℃）に保存する。大形試験電池の場合、試験温度になくとも12時間曝されるものとする。	質量の減少、漏液、弁作動、破裂、破断及び発火がなく完全放電電池を除き、開路電圧が試験直前の90%以上であること。
T3：振動	試験電池を、変形させることなく、振動が確実に伝わるように、振動装置のプラットフォーム（振動台）にしっかりと固定する。振動は正弦波形の対数掃引とし、振動数7Hz→200Hz→7Hzを15分間で掃引する。電池の互いに垂直な3方向それぞれについて、このセットを12回繰り返す。すなわち、試験時間は各方向3時間の合計9時間となる。振動の方向の一つは端子面に対し垂直でなければならない。対数掃引は以下のとおり。7Hzから18Hzに達するまで、ピーク加速度を1g _n に維持する。その後、振幅を0.8mm（全振幅1.6mm）に保ち、ピーク加速度が8g _n となるまで振動を増加する（約50Hz）。その後、振動が200Hzに上がるまで、8g _n のピーク加速度を維持する。	質量の減少、漏液、弁作動、破裂、破断及び発火がなく完全放電電池を除き、開路電圧が試験直前の90%以上であること。
T4：衝撃	各試験電池の全ての固定面を支える堅牢な固定ジグを用いて試験電池を試験装置に固定する。各試験電池に、ピーク加速度150g _n 、パルス持続時間6ミリ秒の正弦半波（half-sine）衝撃を与える。各試験電池には、試験電池の互いに垂直な3方向について、正方向に3回、次いで負方向に3回、合計18回の衝撃を与えるものとする。大形試験電池には、ピーク加速度50g _n 、パルス持続時間11ミリ秒の正弦半波衝撃を与える。各試験電池は、電池の互いに垂直な3方向それぞれについて、正方向に3回、次いで負方向に3回、合計18回の衝撃を与える。	質量の減少、漏液、弁作動、破裂、破断及び発火がなく完全放電電池を除き、開路電圧が試験直前の90%以上であること。
T5：外部短絡	試験を実施する試験電池の外装ケースの温度が、55±2℃になるように、温度を安定させる。次いで、試験電池を55±2℃で外部抵抗の合計が0.1Ω未満の短絡状態にする。試験電池の外装ケースの温度が55±2℃に戻ってから、この短絡状態を最低1時間持続する。試験の完了までさらに6時間、試験電池を観察する。	外部温度が170℃を超えず、試験後6時間以内に破裂、破断及び発火がないこと。

T6：衝突	<p>試験を実施する試験単電池を、平面に置く。直径 15.8 mm の棒をサンプルの中央部に横たえる。9.1kg の重りを 61±2.5 cm の高さからサンプル上に落下させる。円筒形又は角形単電池はその縦軸が平面に対して平行で、かつ、試験サンプルの中央部に横たえられた直径 15.8 mm の曲面の縦軸に対して垂直な状態で、衝撃を受ける。また、角形単電池は、縦軸のまわりに 90 度回転させて、広い面と狭い面の両方が衝撃を受けるようにする。各サンプルが衝撃を受けるのは 1 回限りとする。別々のサンプルが各衝突試験に用いられる。</p>	<p>外部温度が 170℃ を超えず、試験後 6 時間以内に破裂、破断及び発火がないこと。</p>
T7：過充電	<p>この試験は組電池の過充電状態に対する耐久力を評価する。充電電流は製造者が推奨する最大連続充電電流の 2 倍とする。試験の最小電圧は以下のとおり。</p> <p>(a) 製造者の推奨充電電圧が 18V 以下の場合、試験の最小電圧は、組電池の最大充電電圧の 2 倍、又は 22V のどちらか低い方。</p> <p>(b) 製造者の推奨充電電圧が 18V を上回る場合、試験の最小電圧は、最大充電電圧の 1.2 倍。</p> <p>試験は室温で行う。試験の継続時間は 24 時間とする。</p>	<p>試験後、7 日間に破裂、発火がないこと。</p>
T8：強制放電	<p>各単電池を 12V の直流電源に直列に接続し、製造者が定めた最大放電電流に等しい初期電流により、室温で強制放電する。特定の放電電流は、適切なサイズ及び定格の抵抗負荷を試験単電池に直列に接続して得るものとする。各単電池は、定格容量を初期試験電流 (A) で割った数値に等しい時間 (h) だけ、強制放電する。</p>	<p>試験後、7 日間に破裂、発火がないこと。</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p><u>(新規)</u></p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p><u>第 43 キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵に係る運用（令和 4 年 4 月 27 日消防危第 96 号、令和 6 年 9 月 17 日消防危第 273 号）</u></p> <p><u>キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵については、「キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵に係る運用について」の一部改正について（令和 6 年 9 月 17 日消防危第 273 号）による、改正後の「キュービクル式リチウムイオン蓄電池設備の貯蔵に係る運用について」（令和 4 年 4 月 27 日消防危第 96 号。以下「96 号通知」という。）によるほか、次のとおりとすること。</u></p> <p><u>(1) 96 号通知別紙 2 1 の例により、キュービクルの全体に耐火性を有する布を袋状にして覆い被せる場合においても、標識及び掲示板は、外部から見やすい箇所に設置する必要があることに留意すること。</u></p> <p><u>(2) 運用に際し、疑義が生じた場合は、保安課危険物保安係と協議すること。</u></p>	<p>旧第42は削除 旧第43は新第42に変更</p> <p>所要の整備</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 44 震災時等における危険物の仮貯蔵・仮取扱い等の安全対策及び手続きの運用 （平成 25 年 10 月 3 日消防災第 364 号、消防危第 171 号、平成 26 年 3 月 26 日消防指第 497 号（令和 3 年 7 月 19 日消保安第 204 号改正）、平成 30 年 12 月 18 日消防危第 226 号）</p> <p>1 趣旨 （省略）</p> <p>2 事業者等への事前指導等 震災時等に危険物の仮貯蔵・仮取扱いの申請が想定される者（以下「事業者等」という。）に対し、次により指導すること。</p> <p>震災時等に想定される危険物の仮貯蔵・仮取扱いの形態例</p> <p>① ドラム缶等による燃料の貯蔵及び取扱い（形態例①） ② 危険物を収納する設備等からの危険物の抜き取り（形態例②） ③ 移動タンク貯蔵所等による軽油の給油・注油等（形態例③） ④ 可搬式給油設備と移動タンク貯蔵所を用いた車両への給油（形態例④） ⑤ 避難所等の屋外における消毒用アルコール貯蔵等（形態例⑤） ⑥ 避難所等の屋内における消毒用アルコール貯蔵等（形態例⑥）</p> <p>(1) 事前協議等 危険物の仮貯蔵・仮取扱いの形態に応じた安全対策や必要な資機材等の準備方法等の具体的な実施計画、事務手続きについて事前に消防署と協議（以下「事前協議」という。）したうえで危険物の仮貯蔵・仮取扱い実施計画書（別紙。以下「実施計画書」という。）を作成し、提出するよう指導すること。 なお、危険物施設における臨時的な危険物の貯蔵・取扱いであつ</p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p>第 44 震災時等における危険物の仮貯蔵・仮取扱い等の安全対策及び手続きの運用 （平成 25 年 10 月 3 日消防災第 364 号、消防危第 171 号、平成 26 年 3 月 26 日消防指第 497 号（令和 3 年 7 月 19 日消保安第 204 号改正）、平成 30 年 12 月 18 日消防危第 226 号）</p> <p>1 趣旨 （省略）</p> <p>2 事業者等への事前指導等 震災時等に危険物の仮貯蔵・仮取扱いの申請が想定される者（以下「事業者等」という。）に対し、次により指導すること。</p> <p>震災時等に想定される危険物の仮貯蔵・仮取扱いの形態例</p> <p>① ドラム缶等による燃料の貯蔵及び取扱い（形態例①） ② 危険物を収納する設備等からの危険物の抜き取り（形態例②） ③ 移動タンク貯蔵所等による軽油の給油・注油等（形態例③） ④ 可搬式給油設備と移動タンク貯蔵所を用いた車両への給油（形態例④） ⑤ 避難所等の屋外における消毒用アルコール貯蔵等（形態例⑤） ⑥ 避難所等の屋内における消毒用アルコール貯蔵等（形態例⑥）</p> <p>(1) 事前協議等 危険物の仮貯蔵・仮取扱いの形態に応じた安全対策や必要な資機材等の準備方法等の具体的な実施計画、事務手続きについて事前に消防署と協議（以下「事前協議」という。）したうえで危険物の仮貯蔵・仮取扱い実施計画書（別紙。以下「実施計画書」という。）を作成し、提出するよう指導すること。 なお、危険物施設における臨時的な危険物の貯蔵・取扱いであつ</p>	

て、設備等が故障した場合に備えて事前に準備された代替機器の使用や停電時における非常用電源の設置等を行う場合※は、変更許可申請又は危険物製造所等軽微な変更工事届出書（市規則第 24 号様式）の届出により資料を提出させ、臨時的な危険物の代替機器等に関する位置、構造及び設備に関する事項について、許可内容へ内包させること。この場合については、発災時の緊急対応、施設の応急点検、臨時的な危険物の貯蔵・取扱いの手順、定期的な従業員に対する教育、対応訓練等に関する事項を予防規程及びこれに基づくマニュアル等（予防規程の制定義務のない場合は相応する防災計画等）に記載するよう指導すること。

(2) 実施計画書の作成・提出等に係る留意事項

ア 実施計画書の作成

実施計画書は、実施計画書（例）【別添 1-1～1-6】を参考※に作成するとともに、事前協議を踏まえた内容となっている必要があること。また、仮貯蔵・仮取扱いの形態例による場合は、「安全対策・管理状況チェックリスト」【別添 2-1～2-6】により、安全対策等の状況について確認をさせること。

なお、特異な事例の危険物の仮貯蔵・仮取扱いについては、保安課危険物保安係と協議すること。

※ 消毒用アルコールの貯蔵又は取扱いについては、実施計画作成例によるほか、「新型コロナウイルス感染症防止対策に伴う消毒用アルコールの増産等に係る消防法令の弾力的運用に関するガイドライン（令和 2 年 8 月）」を必要に応じて活用すること。

イ 実施計画書の添付書類

実施計画書には、案内図、仮貯蔵・仮取扱い実施予定場所の構造図、敷地の見取り図のほか、「安全対策・管理状況チェックリスト」（仮貯蔵・仮取扱いの形態例による場合に限る。）及び「レイアウト図」を添付すること。

(3) 実施計画書の保管等

実施計画書が提出された場合は「震災時等仮貯蔵・仮取扱い整理番号簿」【別添 3】及び「震災時等仮貯蔵・仮取扱い整理票」【別添 4】に事業者等の住所・氏名等の必要な事項を記載し、震災時等に適切に対応できるよう当該実施計画書とともに専用のファイルに編さんし適正に保管すること。

て、設備等が故障した場合に備えて事前に準備された代替機器の使用や停電時における非常用電源の設置等を行う場合は、変更許可申請又は危険物製造所等軽微な変更工事届出書（市規則第 24 号様式）の届出により資料を提出させ、臨時的な危険物の代替機器等に関する位置、構造及び設備に関する事項について、許可内容へ内包させること。この場合については、発災時の緊急対応、施設の応急点検、臨時的な危険物の貯蔵・取扱いの手順、定期的な従業員に対する教育、対応訓練等に関する事項を予防規程及びこれに基づくマニュアル等（予防規程の制定義務のない場合は相応する防災計画等）に記載するよう指導すること。

(2) 実施計画書の作成・提出等に係る留意事項

ア 実施計画書の作成

実施計画書は、実施計画書（例）【別添 1-1～1-6】を参考※に作成するとともに、事前協議を踏まえた内容となっている必要があること。また、仮貯蔵・仮取扱いの形態例による場合は、「安全対策・管理状況チェックリスト」【別添 2-1～2-6】により、安全対策等の状況について確認をさせること。

なお、特異な事例の危険物の仮貯蔵・仮取扱いについては、保安課危険物保安係と協議すること。

イ 実施計画書の添付書類

実施計画書には、案内図、仮貯蔵・仮取扱い実施予定場所の構造図、敷地の見取り図のほか、「安全対策・管理状況チェックリスト」（仮貯蔵・仮取扱いの形態例による場合に限る。）及び「レイアウト図」を添付すること。

(3) 実施計画書の保管等

実施計画書が提出された場合は「震災時等仮貯蔵・仮取扱い整理番号簿」【別添 3】及び「震災時等仮貯蔵・仮取扱い整理票」【別添 4】に事業者等の住所・氏名等の必要な事項を記載し、震災時等に適切に対応できるよう当該実施計画書とともに専用のファイルに編さんし適正に保管すること。

ガイドライン
削除に伴う反映

なお、震災時等における仮貯蔵・仮取扱いの申請の際、危険物事務担当者が対応できない場合も想定されることから、保管場所の共有等を図り、申請時に円滑な承認が行えるようにすること。

3～8（省略）

なお、震災時等における仮貯蔵・仮取扱いの申請の際、危険物事務担当者が対応できない場合も想定されることから、保管場所の共有等を図り、申請時に円滑な承認が行えるようにすること。

3～8（省略）

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p><u>(新規)</u></p>	<p style="text-align: center;">第 3 章 危険物規制審査基準（資料編）</p> <p><u>第 49 車載用リチウムイオン蓄電池の貯蔵に係る運用</u> <u>(令和 4 年 12 月 26 日消防危第 295 号、令和 5 年 1 月 5 日消保安</u> <u>第 572 号、令和 6 年 3 月 28 日消防危第 55 号)</u></p> <p><u>車載用リチウムイオン蓄電池の貯蔵に係る運用は、「車載用リチウ</u> <u>ムイオン蓄電池の貯蔵に係る運用の改正について」(令和 6 年 3 月 28</u> <u>日消防危第 55 号) によるほか、次のとおり取り扱うこととします。</u></p> <p><u>1 車載用リチウムイオン蓄電池に指定数量の 5 分の 1 以上指定数</u> <u>量未満の危険物（以下「少量危険物」という。）が含まれる場合</u> <u>耐火性を有する布により、蓄電池の全体又は火災時に火炎が噴</u> <u>出するおそれのある開口部を覆う場合においても、横浜市火災予</u> <u>防条例（昭和 48 年横浜市条例 70 号。以下「条例」という。）第 37</u> <u>条の 2 第 2 項第 1 号により、外部から見やすい箇所に標識及び掲</u> <u>示板の設置が必要であることに留意すること。</u> <u>なお、設置が困難な場合は、別途協議すること。</u></p> <p><u>2 少量危険物を含む車載用リチウムイオン蓄電池が複数貯蔵され</u> <u>る場合の条例第 76 条の届出の単位は、原則蓄電池ごととなるが、</u> <u>蓄電池の搬入・搬出の頻度が著しく多い場合などは、別途協議す</u> <u>ること。</u></p> <p><u>3 車載用リチウムイオン蓄電池に限った運用であることに留意す</u> <u>ること。</u></p>	<p>所要の整備</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由						
<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 2 申請区分 表 4-2-1 市規則第 16 条第 1 項に基づく、主な確認を要する変更工事 及び確認を要しない軽微な変更工事</p> <table border="1" data-bbox="107 563 981 758"> <tr> <td> <p>配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p> </td> <td> <p>※72 緊急停止付帯で、高さ又は重量に限り補修。 (1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 巡回監視車の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの取替、補修 ※58。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p> </td> <td> <p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p> </td> </tr> </table>	<p>配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p>	<p>※72 緊急停止付帯で、高さ又は重量に限り補修。 (1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 巡回監視車の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの取替、補修 ※58。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p>	<p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p>	<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 2 申請区分 表 4-2-1 市規則第 16 条第 1 項に基づく、主な確認を要する変更工 事及び確認を要しない軽微な変更工事</p> <table border="1" data-bbox="1059 563 1955 758"> <tr> <td> <p>(1) 配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p> </td> <td> <p>(1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 衝突防護設備の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 巡回監視車の取替、補修。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p> </td> <td> <p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分(移植上蓋) を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p> </td> </tr> </table>	<p>(1) 配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p>	<p>(1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 衝突防護設備の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 巡回監視車の取替、補修。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p>	<p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分(移植上蓋) を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p>	<p>所要の整備</p>
<p>配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p>	<p>※72 緊急停止付帯で、高さ又は重量に限り補修。 (1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 巡回監視車の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの取替、補修 ※58。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p>	<p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p>						
<p>(1) 配管(地下埋設配管を除く。)の取替、補修※11・59・60。 (2) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の増設、 補修、改造※11・59・60。 (3) ビク取扱装置の取替。 (4) 緊急遮断弁の取替。 (5) 感震装置の取替。 (6) 監視小屋の増設。 (7) ボンプ設備の取替、補修※11・61・62。 (8) 船舶からの荷出し又は荷揚げに用いるローディングーム先端のカブ ラーの改造、撤去 ※58。 (9) 置きし枠知口の取替、補修。 (10) 置きし枠知底蓋の取替。 (11) ローディングーム又はアンローディングームの撤去 ※57。 (12) 仕切弁、制液弁等の取替。</p>	<p>(1) 配管のベントノズル、ドレンノズル、サンプリングノズル等の取替、 補修、撤去※11・59・60。 (2) ビク取扱装置の補修。 (3) 緊急遮断弁の補修。 (4) 感震装置の補修。 (5) 監視小屋の取替、補修。 (6) 仕切弁、制液弁等の補修。 (7) 土盛り等置きし底蓋防止設備の取替、補修。 (8) 衝突防護設備の増設 ※38・40。 (9) 衝突防護設備の取替、補修。 (10) 巡回監視車の取替、補修。 (11) 巡回監視車の取替、補修。 (12) 置きし枠知底蓋の補修。 (13) ローディングーム又はアンローディングームの補修 (撤去を伴わ ないものに限る。) ※57。</p>	<p>※57 ローディングームの点検に伴 う再取付けは変更許可を要する。 ※58 ボルトにより取り付け可能なも のに限る。 ※59 道路、河川、海又は第三者の敷 地を通過する部分(移植上蓋) を除く。 ※60 構造、材質、材質、経路の変更 がないこと。 ※61 移送基地の構内に設置されるも のに限る。 ※62 電気機器の場合、可燃性蒸気の 滞留するおそれのある範囲に設置 しないこと。</p>						

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続</p> <p>第 3 危険物関係法令と他法令との関係</p> <p>危険物製造所等に関しては、消防法による規制のほか、他の法令により規制される場合があるので、事前相談等で質疑のあるものについては、設置者に対し直接主管部局に相談するよう指導すること。</p> <p>1～3（省略）</p> <p>4 横浜市緑化条例との関係</p> <p>本市の工場等の緑化事業については、「緑の環境をつくり育てる条例」（昭和 48 年 6 月横浜市条例第 47 号）により、敷地面積 500 平方メートル以上の工場等の新設及び改修時に適用され、敷地面積、用途地域により敷地面積の 5 パーセントから 20 パーセント以上を緑化することとされている。</p> <p>一方、危険物製造所等については、延焼防止上及び消火活動上の観点から、保有空地、通路等が定められているが、これらの部分に関する緑化の対応については、従来特段の定めがなかったため、ややもすると、延焼防止上又は消防活動上支障となるおそれがあったことから、<u>環境創造局開発調整課</u>と協議し、植栽範囲等を明確にし、適切な指導を図るものである。植栽要領等については、第 3 章第 23「危険物製造所等の保有空地等における植栽」によること。</p>	<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続</p> <p>第 3 危険物関係法令と他法令との関係</p> <p>危険物製造所等に関しては、消防法による規制のほか、他の法令により規制される場合があるので、事前相談等で質疑のあるものについては、設置者に対し直接主管部局に相談するよう指導すること。</p> <p>1～3（省略）</p> <p>4 横浜市緑化条例との関係</p> <p>本市の工場等の緑化事業については、「緑の環境をつくり育てる条例」（昭和 48 年 6 月横浜市条例第 47 号）により、敷地面積 500 平方メートル以上の工場等の新設及び改修時に適用され、敷地面積、用途地域により敷地面積の 5 パーセントから 20 パーセント以上を緑化することとされている。</p> <p>一方、危険物製造所等については、延焼防止上及び消火活動上の観点から、保有空地、通路等が定められているが、これらの部分に関する緑化の対応については、従来特段の定めがなかったため、ややもすると、延焼防止上又は消防活動上支障となるおそれがあったことから、<u>みどり環境局公園緑地部公園緑地管理課</u>と協議し、植栽範囲等を明確にし、適切な指導を図るものである。植栽要領等については、第 3 章第 23「危険物製造所等の保有空地等における植栽」によること。</p>	<p>市組織・機構改革に伴う修正</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 10 工事整備対象設備等着工届出 (法第 17 条の 14、規程第 24 条、危険物規制事務処理実施要領第 2、第 3 及び第 19)</p> <p>危険物施設において消防用設備等の工事をしようとするときは、法第 17 条の 14 の規定により規則第 33 条の 18 による「工事整備対象設備等着工届出書」(規則別記様式第 1 号の 7) の届出が必要となる。</p> <p>ただし、消防用設備等設置規則事務審査基準第 2 章第 2 節第 7-4 表に掲げる軽微な工事に該当するものについては、届出を要しないことができる。</p> <p>なお、工事整備対象設備等着工届出書の正本は、完成検査を受けるまでに、当該工事の申請に係る設置許可申請書又は変更許可申請書に差入れること。</p>	<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 10 工事整備対象設備等着工届出 (法第 17 条の 14、規程第 24 条、危険物規制事務処理実施要領第 2、第 3 及び第 19)</p> <p>危険物施設において消防用設備等の工事をしようとするときは、法第 17 条の 14 の規定により規則第 33 条の 18 による「工事整備対象設備等着工届出書」(規則別記様式第 1 号の 7) の届出が必要となる。</p> <p>ただし、消防用設備等設置規則事務審査基準第 2 章第 2 節第 7-4 表に掲げる軽微な工事に該当するものについては、届出を要しないことができる。</p> <p>なお、工事整備対象設備等着工届出書の正本は、完成検査を受けるまでに、当該工事の申請に係る設置許可申請書又は変更許可申請書に差入れること。</p> <p><u>添付図書については、「設置届及び着工届の添付図書等に関する運用について」(令和 5 年 3 月 30 日消防予第 196 号、消防危第 68 号)によるほか、次によること。</u></p> <p><u>(1) 危険物施設ごとに届出を行うよう指導すること。</u></p> <p><u>(2) 危険物施設における着工届の提出の際は、原則、事前に許可を受けている必要があることに留意すること。</u></p> <p><u>(3) 消防用設備等試験結果報告書は、完成検査の資料として受領し確認すること。</u></p>	<p>所要の整備</p>

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第4章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第12 危険物製造所等の完成検査前検査申請 (法第11条の2、危険物令第8条の2、第8条の2の2、市規則第7条、 規程第15条、危険物規制事務処理実施要領第2、第3及び第12)</p> <p>屋外貯蔵タンクのタンク本体に関する変更工事に係る完成検査前検査等</p> <div data-bbox="100 638 963 989"> <p style="text-align: center;">屋外貯蔵タンクのタンク本体に関する変更工事に係る完成検査前検査等*</p> </div> <p>【拡大】</p> <div data-bbox="336 1085 784 1308"> </div> <p style="text-align: center;">図 4-12-1</p>	<p style="text-align: center;">第4章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第12 危険物製造所等の完成検査前検査申請 (法第11条の2、危険物令第8条の2、第8条の2の2、市規則第7条、規 程第15条、危険物規制事務処理実施要領第2、第3及び第12)</p> <p>屋外貯蔵タンクのタンク本体に関する変更工事に係る完成検査前検査等</p> <div data-bbox="1041 638 1993 1021"> <p style="text-align: center;">屋外貯蔵タンクのタンク本体に関する変更工事に係る完成検査前検査等*</p> </div> <p>【拡大】</p> <div data-bbox="1299 1133 1747 1356"> </div> <p style="text-align: center;">図 4-12-1</p>	<p style="text-align: center;">所要の整備</p>

新 旧 対 照 表

危険物規制事務審査基準

現 行	改 正 案	理 由
<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 15 危険物保安監督者選任・解任届出 (法第 13 条第 2 項、規程第 24 条、危険物規制事務処理実施要領第 2、 第 3 及び第 19)</p> <p>1～2 (省略)</p>	<p style="text-align: center;">第 4 章 届出・申請等に関する事務手続き</p> <p>第 15 危険物保安監督者選任・解任届出 (法第 13 条第 2 項、規程第 24 条、危険物規制事務処理実施要領第 2、 第 3 及び第 19)</p> <p>1～2 (省略)</p> <p><u>3 危険物取扱者の資格種別における実務経験の違いについて</u> <u>危険物保安監督者に必要とされる実務経験の内容は次のとおりである。</u></p> <p><u>(1) 甲種危険物取扱者たる危険物保安監督者については製造所等におけるいずれかの類の危険物の取扱いの実務経験</u></p> <p><u>(2) 乙種危険物取扱者たる危険物保安監督者については、製造所等における自らが取扱い、又はその取扱作業に関して立ち会うことのできる類の危険物の取扱いの実務経験</u></p>	<p>所要の整備</p>